
ランスIF 二人の英雄

散々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ランスIF 二人の英雄

【Nコード】

N5750X

【作者名】

散々

【あらすじ】

本来ならばランスに出会う前に死ぬはずの運命であった、英雄候補であるオリ主。その彼の生存によって、物語はどのように変化していくのか…という感じの作品です。Rance1からのスタートです。

プロローグ（前書き）

原作リスペクトで行きたいと思います。

オリ主以外のオリはモブ以外無し、主人公は現状チートという程強くはありません。

プロローグ

一つの大陸があつた。魂の集合体である存在が、自らの暇つぶしのために創造した大陸。その存在は三体の神を創り出し、大陸の管理をさせた。悲劇と混乱の鑑賞を愉悦とする主を退屈させぬよう、三体の神は争いが永遠に続くようバランスを考え、長い時を掛け世界を構築していった。

魔王：モンスター…ドラゴン…そして人類…

優秀すぎたドラゴンの存在を反省して想像された人類はこの混乱の時代を生き抜くには余りにも弱く、長きに渡り魔王やモンスターといった強大な存在に蹂躪され続けることとなる。

人類誕生から約3500年…

人類は滅びてはいなかった。高い繁殖力によりその数を増し、知識により武器を生み出し、他の種族に対抗する力を身につけていた。長く魔人の奴隷とされていた暗黒の時代も存在するが、第6代魔王ガイの時代に奴隷から解放されることとなり、各地に国が誕生する。ヘルマン・リーザス・ゼスの三大国だ。これに古くから存在する「APAN」と多くの自由都市の間で、人類同士の争いが長く続くこととなる。魔王ガイの死と、それによる魔人進行からなる地獄が目前に迫っていることも知らずに…

GI1006

- 大陸北西部 とある森中 -

「はあっ…はあっ…」

その男は森の中を彷徨っていた。身につけている鎧はひび割れ、既に防具としての役割は果たしていない。身体中に傷を負っているが、一際目立つのはその胸の傷。モンスターに付けられたのであるうか。その傷の深さから鑑みるに、おそらく…長くはない。

「15年か…流石にもう少し長く生きたかった…かな…」

自らも死期を悟っているのであるう。そう男は呟いたとほぼ同時に、背後で物音がする。

「さて…最後まで楽に殺して欲しいものだが…」

自分を殺すであろう相手を確認するため、男は振り返る。

本来、男はここで死ぬ運命にあった。多くの平行世界の歴史の中で、GI1006年以降まで男が生き延びたことはない。

「人間…？ なぜこのようなところに…？」

そこに立っていたのは美しき女性であった。しかし、その存在は人間ではない。魔人。人類を蹂躪する存在が、そこに立っていた。

それは創造神の悪戯か。本来ここで死ぬべき運命であった人間が、仇敵とも呼べる魔人との邂逅により、生き延びることとなる。それは即ち、これより後に起こる人類と魔人の戦争に、多くの平行世界

の中で初めてその男が携わることとなるのだ。

-そして10年の時が流れる-

破壊と混乱の時代…

時代は英雄をもとめていた…

時代がもとめる資質を備えた人物は二人…

だが…

その英雄たる資質を備えた人物の一人は…

とつても自分勝手に

とつてもスケベで

とつても乱暴で

とても正義とは思えない男だった。

そしてもう一人は…

これは二人の英雄の物語である。

第1話 出会い

LP0001 7月

- 自由都市アイス -

「今回はこの仕事を引き受けて貰いたい」

とあるギルドビルの一室にある部屋で、男二人が仕事の話をしていった。話を切り出した男の歳は40才後半から50才というところだろうが、成金のような服を身につけ、葉巻に火を付けようとしている。この男の名前はキース・ゴールド、このキースギルドのマスターである。

「そろそろ、お前も結婚したらどうだ。なんなら俺がいい女を紹介してやってもいいぜ」

「ふん、くだらないことを言っていないでさっさと仕事の話をしろ」

それに答えたもう一人の男。薄手のプレートメイルとマントを身にまとい、ふてぶてしい態度で佇んでいる。彼の名はランス、キースギルドに所属する戦士にして英雄たる資質を備えた人物の一人だ。しかし、彼の行動理念は「全ては俺様のために」というものであり、美女とは犯してもHし、邪魔する奴は皆殺しという、とても英雄とは呼べぬものであった。ただ、その実力は本物であり、いつしか彼は一部の冒険者からは鬼畜戦士という通り名で呼ばれるようになっていた。

「せっかちな野郎だな。まあいい、この写真を見てくれ」

そう言い、白い封筒から取り出した写真には白いドレスを着た赤い髪の美しい娘と、青いドレスを着た黒い髪の娘が写っていた。

「ほー、なかなか可愛い娘たちじゃないか。グッドだ！」

「この娘たちを見つけ出して保護して貰いたい」

「なんだ、人捜しか。何者なんだ」

聞けば、赤い髪の娘はブラン家の次女で名をヒカリ、黒い髪の娘はファン家の長女で名をグアンというらしい。どちらも名家のお嬢様だ。

「ヒカリの方は3週間前パリス学園に通っていて行方不明になったそうだ。グアンは彼女のルームメイトで、ヒカリを自分で見つけ出すと息巻いていたそうだが、こちらも1週間前から行方不明だ。どちらも身代金の要求はない」

「ふむ、営利誘拐では無いのか。まあ、とにかく助け出せばいいんだろう？報酬は？」

「聞いて驚け、1人救出で20000GOLD、2人で40000GOLDだ！」

「なんだと！破格値じゃないか！どうしたんだ？」

ランスが驚くのも無理はない。普通、この程度の依頼なら1人1000〜2000GOLDが相場になる。それが10倍もの報酬が提示されたのだ。俄然やる気も湧いてくる。

「それだけ大事な娘たちなんだろう」

「がはははは！俺様にまかせておけ、すぐに解決してやる。じゃあな」

「それとグアンの方は…行っちゃったよ。まあ持って行った資料を読めばすぐに気がつくだろう…」

キースギルドを後にし、アジトである貸家へと帰る。そこで受け取った資料に目を通し、情報を整理する。普段であればこんな真面目に取りかかるようなランスではないが、何せ報酬が報酬だ。その上美女のおまけ付き。ここで俺様がかつこよく助け出せば、感動の余り簡単に股を開いてくれるかもしれない。いや間違はなく開く、などと真面目な顔でとんでもないことを平然と考えていると、部屋の奥から女性が現れる。

「ランス様、お茶が入りました」

お茶を持って現れたこの娘はシイル・プラインという。特徴的なピンクのもこもこ髪で、露出の高い白い装束を身につけている。今から3ヶ月ほど前に奴隷商人から15000GOLDで買い取った魔法使いだ。彼女には特殊な魔法が掛けられており、ランスの命令には絶対服従である。

「あの…次のお仕事、決まったのですか？」

「人捜しをする事になった」

簡潔に答え、ランスは資料の続きを読む。邪魔としては悪いと思いい、シイルは机の上にお茶を置き、部屋から退出しようとしたが、それはランスの声によって阻まれる。

「なんだと！グアンちゃんはジオの町近辺の洞窟をアジトにしている盗賊団と一緒にいたという目撃情報があるじゃないか！キースの野郎、大事なことを言い忘れやがって！」

「お、落ち着いてくださいランス様」

話の途中でさっさと切り上げた自分の失態は棚に上げ憤慨するラ

ンス。しかし、ランスがここまで怒るのにも訳がある。一つは現在ランス家の貯蓄は底をついており、是が非でもこの報酬は手に入れないといけないのだ。そして、もう一つはキースギルドの方針である。何もこの依頼はランスだけが受けたものではない。希望者が多ければ早い者勝ちというギルド方針であるため、手を付けるのが遅れば他の請負人にみすみす40000GOLDを横取りされかねない。

「急いで準備をしろ、シイル！すぐに出発するぞ！」

「はい、ランス様」

キースに文句を言って無理矢理うしバス代を出させ、ジオの町へと向かう。まだこの依頼を受けたものは少ないはず。今なら一番乗り確実だ。

「がはははは！40000GOLDと美女二人の身体はどっちも俺様のものだ！」

- 自由都市ジオ近辺の洞窟 盗賊のアジト内 -

「へっへっへ、今日も楽しませて貰おうかな」

「もう…家に帰してください…」

「まーだそんなこと言ってるのか？お前はもう一生俺たちの奴隷なんだよ！」

洞窟の奥には捕らえられ、さんざん汚されぬいたグアンと、いかにもな盗賊が二人。本来はもう少し盗賊の人数が多いのだが、他の盗賊たちは今外に出払っているため、アジトには三人だけだ。

自分にもこの男は向かってくるだろう。短剣を腰から抜き、目の前に立つ男に向かい声を荒げる。

「てめえ…なにもんだっ！ぶち殺されてーのか！」

「名乗る必要があるのか？…今から死ぬ奴に」

- 盗賊のアジト入り口 -

「ふんっ、手間取らせやがって。ここがアジトで間違いなさそうだな」

洞窟の前にはランスとシル、そして先ほどまで盗賊だった肉塊がらつ。ランスたちは運のいいことにアジトに戻る盗賊たちを偶然目にし、うしバスを途中下車してついできたのだ。そしてアジトの前についたと同時に用済みとばかりに後ろから不意打ちを仕掛けた。何人かには反撃してくるが、こんな盗賊に手こずるランスではない。みるみるうちに全員を皆殺しにした。

「さーて、グアンちゃんを俺様がかっこよく助けて一発やらせてもらおう」

「待ってくださいランス様、洞窟の中から誰か出てきます」

「んっ？…なんだとおおお！」

洞窟から出てきたのは二人。薄手の鎧とロングソードを装備した、どこからどう見ても冒険者である黒髪の男。両腕でグアンを抱えている。助かって気が抜けてしまったのだろうか、気を失っている。

「ま…間に合わなかった…」

「ん？おたくらは…なるほど、俺同様、依頼を受けた冒険者か。殺す直前に仲間が帰ってくるとか言っていたから警戒していたが、あんたらが片付けてくれたのか」

「あ、はい、そうです。私はシイルといいます。こちらはランス様で、私のご主人様になります」

グアンを抱えた男はそうランスとシイルに向かって話しかけるが、ランスは何かを考え込んで返事をしない。訝しげにランスを見ると、考えがまとまったのか、ランスがしゃべり出した。

「よし、殺そう。そうすれば金も美女も俺様のものだ。我ながらグッドアイデアだな、がはははは！」

「いきなりとんでもないことを言うな、あんたの主人は…」

「むっ、何を勝手に馴れ馴れしく人の奴隷に話しかけているんだ貴様」

「ランス様…一応自己紹介は済ませました…」

「なんだと、勝手なことをするなシイル、ええい、こうしてやる！」

「ひんひん…痛いですが、ランス様…」

両拳でシイルの頭をぐりぐりとし始める。余りにも理不尽な光景である。

「一応ほとんどの盗賊を片付けてくれた礼に、報酬を分けてやってもいいと思っではいたんだがな…」

「なに？それを早く言え。なかなか下僕として見所のある奴じゃないか。分けると言わず全部寄越してしまってもいいんだぞ？」

シイルを解放し、ランスはまだ名も知らぬ冒険者に向き直る。

「ふふっ、おもしろい奴だな、あんた」

「で、貴様の名前はなんというのだ？男の名前など覚える気はないが、こつちだけ名乗っているのは気に食わん」

「ああ、名乗りが遅れたな、すまなかつた」

それは、本来ならあり得ぬ出会い。世界の理から外れた男たちの邂逅。この出会いが人類同士、果ては魔人との争いに終止符を打ち始まりであったことを、このときはまだ誰も知らなかった。

「俺の名はルーク。キースギルド所属の冒険者だ」

第1話 出会い（後書き）

「人物」

ルーク・グラント（オリ主）

LV 45 / 200

技能 剣戦闘LV2 対結界LV2 冒険LV1

キースギルド所属の冒険者。歳は25才でランスの7つ上。本作の主人公の一人で、英雄候補。GI1006年に行方不明となるが、GI1015年にキースギルドに戻ってきてキースを驚かせた。その間の動向は謎に包まれている。

ランス

LV 10 /

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV1 冒険LV1

キースギルド所属の冒険者。本編の主人公にして、本作の主人公の一人。英雄候補。才能限界に上限が無く、世界のバグとされている。

シイル・プライン

LV 13 / 35

技能 魔法LV1 神魔法LV1

ランスの奴隷の魔法使い。ランスのベストパートナー。

「技能」

対結界（オリ技能）

結界を無効化する。LV1で魔法結界などの人類の生み出した結界を、LV2で魔人の無敵結界をも無効化し、直接ダメージを与えることができる。魔剣力オスや聖刀日光と違い、効果は本人のみで

周りの人間がダメージを与えられるようにはならない。ランスの才能限界同様世界のバグであり、ルークのみが保有する技能である。

第2話 奇妙な協力関係

・ジオの街 酒場・

街の外れにある小さな酒場。そこそこに繁盛しているようで、店内には多くの冒険者たちがいた。冒険の成果を喜び合うもの、静かに飲むもの、酔いが回って口論を始めるもの、酒場の風景としてはよくあるものだろう。その酒場の奥のテーブルにランスたちはいた。

「おごつて貰うのはいいが、分け前はまた別だぞ。わかっているな」
「わかつてるって。人の好意は素直に受け取るもんだぞ」

水割りを片手にランスがルークに念を押す。ここの払いは全額ルーク持ちだ。先の礼も兼ねてというのが一つ、一応ギルドの先輩だからというのがもう一つの理由だ。

「しかし酒はまあまあだが、料理が不味いな。こんなに不味いへんでろばなど俺様は認めん」

「酒場の料理なんてこんなもんだろ。ほれ、シイルちゃんも遠慮せずにご飯を」

「すいません、いただきます」

奢りでありながら文句ばかりのランスに呆れながら、ウォッカを一口飲み、シイルにはあんを勧める。

「で、仕事の話に戻ろうか。グアンちゃんから聞いた話だと、ヒカリちゃんをさらったのは女忍者だったらしい。深夜にシャワーを浴びていたところを襲われたとのことだ」

「女忍者ねえ…そんなもんがまたいたのか」

「まあ大陸にいるのは珍しいな。JAPANではいまだに多く存在するようだが」

グアンは酒場の近くにある宿で寝かせている。宿に運んだあたりで一度目を覚まし、誘拐時の状況をルークに話してくれたのだ。その後は疲労からか、すぐにまた眠り込んでしまった。

「ヒカリちゃんとグアンちゃんの誘拐は全くの無関係だな。一人救出出来たのはめでたいが、ヒカリちゃんの件は情報を集める必要があるな」

「忍者が犯人などたいした手がかりにもならんぞ、まったく…」

「とりあえず俺はグアンちゃんをリーザスに送り届けて、その後はリーザスで情報収集をするつもりだ。そっちはどうするんだ」

「ふむ…シイル、お前パリス学園に入学して情報を集める」

「えっ、学校に行かせてもらえるのですか？」

「ふっ…」

急に話を振られたシイルはよくわからない返事をする。しっかりしていると思っていたが、思ったより天然なのか？と考え、ルークは少し笑ってしまった。

「ばか、情報を集めるんだよ、情報を。ヒカリちゃんと親しかった友達などを中心に調べる」

「はい、わかりました」

「がはははは、グアンちゃんの分の20000GOLDは山分けになっちゃったが、もう20000GOLDは必ず俺様が全部もらうぞー！」

「まったく、いつから分け前が半分になったんだ…で、ものは相談なんだが、この事件お互いに協力し合わないか？」

「は？いきなり何を言い出すんだ？俺様は男と協力し合う気はないぞ」

「いや、こちらとしては早く救出して親御さんを安心させてあげたくてな。それにそちらは知らないだろうが、この案件いつも以上に急ぐ必要があるぞ」

きっぱりと協力の申し出を断ったランスに対し、ルークは意味深なことを言い出す。

「どういづことですか？」

「ええい、もつたいぶらずにさっさと急がなきゃいけない理由を話せ！」

協力する気のなかったランスも話の内容は気になったのか、飲み干したグラスを机に強く置き、声を荒げる。

「いや、俺が仕事を受けた段階でラークとノアもこの案件に興味を持っていて話をキースがしててな。今の仕事が片付いたら間違いない乗り込んでくるぞ」

「げっ、あいつらか…ノアさんはかわいいから許すが、あの野郎弱いくせに調子に乗りやがって…」

ランスが嫌な顔をするのも無理はない。ラーク&ノアといえは美男美女コンビとして有名な冒険者で、今までにいくつもの困難な事件を解決してきた強者だ。キースギルド所属の冒険者の中ではトップクラスに名前が売れており、彼らがこの案件を引き受けたら20000GOLDとヒカリちゃんGETTの計画に暗雲が立ちこめる。

「むむむむむ…」

「報酬は5：5。お互いにいい提案だと思うがね？」

いつもならば、どうせ俺様が一番に解決すると断っていただろう。しかし、今は本格的に金がないのだ。先の分け前を無理矢理折半に持ち込んだが、10000GOLDでは借りている金を返したら、しばらく遊んで暮らすには心許ない。やはり最低でも20000GOLDは欲しい。それに…

「ぐぬぬぬ…そうだな、今回だけは協力してやらんこともない。ただし、報酬は7：3だ！こっちは2人だからな」

「オーケー。6000GOLDでも破格だし、別にいいぜ。これからしばらくは協力関係だな。仲良くしようぜ」

「よろしく願います」

「ふん、男と仲良くする気などないわ」

シイルが返事をする横で、追加できた水割りを飲みながら悪態をつく。ルークは両の手のひらを上にし、やれやれといった姿を取るが、シイルは内心珍しいこともあるものだと思っていた。いくら時間もお金もないとはいえ、あのランス様が男性と組むなんて…と。

ランス自身気づいていなかったが、先の理由以外にもう一つ組んだ理由が存在していた。ランスは、ルークの雰囲気はどこか懐かしさを感じていたのだ。同じギルドに所属していながら顔を合わせるのとはこれが初めてで、そんなことがあり得るはずがないのに、以前に感じたことのあるような懐かしさ。その理由をランスとルークが知るのとは、かなり先のこととなる…

1 週間後

- リーザス城下町 -

シイルは途中入学の審査に楽々合格し、パリス学園への潜入に成功した。ルークはグアンを家族の元に送り届け、リーザスで情報収集を続けている。そしてランスは二人から遅れること1週間、パリス学園がある王都リーザス城へと到着していた。協力関係だとばれないようにするためである。まずランスが目指したのはパリス学園潜入調査をしているシイルから情報を聞く手はずとなっているからだ。パリス学園に到着すると、裏口に回った。女子校なので見つかると面倒だからだ。

「シイル…」

裏口に到着すると、ランスは横にいる人にも聞こえないような小さな声でシイルを呼ぶ。3分ほどでシイルが白い学生服を着て現れた。あのような小声でも呼び出せたのは、初級魔法であるリーダーのおかげである。本来相手の考えていることを読む魔法だが、応用すればこのような使い方も出来るのだ。

「お待ちせしました」

「遅いぞばか。で、何かわかったか？」

「ヒカリさんですが、学園長のミンミン先生から特別生徒にされていた優秀な生徒さんだったみたいですよ」

「ふーん、他には？」

「その他は、なにも」

「使えん」

「すみません：あ、私もミンミン先生から特別生徒にもらったんですよ」

ランスは嬉しそうに話すシイルを見る。こうして見ると白い服が中々に似合っていてかわいいかもしれない。

「あ、ランス様、この服中々似合っていると思いませんか？」
「似合わねえよ、ばか。とりあえずその茂みでやるぞ」

有無を言わず茂みに連れ込むランス。1週間女を抱いていなか
ったため相当溜まっていたらしい。

「グツドだ」

「ひどいです、ランス様…」

「しっかり調査しておけよ」

一発抜いてすっきりしたのか、ランスはパリス学園を後にし、中
央公園へ向かう。今度はここでルークと落ち合う約束になっている
からだ。

「ちっ…少し早く着きすぎたか。ルークの奴、気を利かせて早く来
ておけてんだ」

「あの…」

声を掛けられ振り向くと、買い物かごを両手に重そうに抱えた娘
が立っていた。

「なんのようだ？」

「おサイフを無くしてしまったの。一緒に捜して貰えませんか？」

見れば中々にかわいい娘である。良い事を思いついたと、いやら
しい顔をしながら返事をする。

「捜してやってもいいが、報酬は？」

「へ？」

「こっちはプロなんでな。報酬がないと働かんぞ。ああ、あんたの身体でもいいな」

サイフ捜しにずいぶん大げさなことを言うものである。

「そ…そんな……わかりました…」

顔を真っ赤にしながら、娘は小さな声で言った。これは楽しみだと笑みを浮かべ、どこでサイフを落としたのかを問う。

「あの…この公園なんです」

ランスは公園をぐるりと見渡す。あまり大きな公園でなく、開けた場所でもあるため、サイフが落ちていればすぐに目につくはずだが、見当たらない。

「見当たらんぞ。もう取られたんじゃないのか？」

ランスが振り返ると、そこにいたのはさつきまでの娘だが、服がさつきまでとは違う。黒装束に身を包み、手にはくないとランスのサイフを持っていた。

「ええ、サイフは見つかったわ。ありがとう」

「お、俺様のサイフ…」

「この件からは、手を引いた方がいいわよ。死にたくなければね」

「自分から姿を現してくれるとはな、ずいぶんと優しい誘拐犯さんなこつて」

突然の声に娘が振り返ると、くないが弾かれ、手に持っていたサ

イフも奪われてしまう。

「これは返して貰うぜ」

「くっ…」

娘は懐から煙り玉を出し、地面に投げる。娘の姿を煙が包み、煙がはれる頃には娘の姿は風のように消えてしまっていた。

「おお、ルーク！助かったぞ。まあ俺様一人でもちゃちゃっと取り返せたがな」

「まあ、そういうことにしておいてやるよ」

「しかしあの女、次にあつたら絶対に犯してやる！」

出し抜かれたのが相当腹に立ったのか、声を荒げるランス。サイフをランスに返し、ルークはベンチに腰掛ける。

「で、何か手がかりはわかったのか？これで何もわからなかったとか言ったら、報酬は9：1になるぞ」

「勝手なことを…一応有力な情報を手に入れたが…この案件、俺らの想像以上にやっかいなものかもしれん」

「どついうことだ？」

日が落ち、辺りが暗くなってくる。そのせいなのか、あるいは別の理由からか、ルークの表情が暗くなる。

「俺が手に入れたのは、ヒカリちゃんと思わしき女性がリーザス城に連れて行かれるのを見たという情報だ。この案件、リーザスのお偉いさんが関わっているな」

第2話 奇妙な協力関係（後書き）

「人物」

ラーク

LV 18 / 35

技能 剣戦闘 LV 1

キースギルド所属の冒険者。コンビを組むノアと共に多くの依頼を解決させてきた有名な冒険者である。

ノア・セーリング

LV 15 / 33

技能 神魔法 LV 1

キースギルド所属の冒険者。コンビを組むラークと共に多くの依頼を解決させてきた有名な冒険者である。

キース・ゴールド

アイスの街にあるキースギルドの主。ごつい見た目と違い、その経営手腕は本物である。ランスやラークの過去を知っている数少ない人物である。

グアン・ファン・ユーリイ（オリモブ）

ヒカリのルームメイト。原作では名無しで、誘拐事件にも巻き込まれない。名前はアリスソフト作品の「零式」より。ファンの方、すいません。

女忍者

いったい何者なんだ…

「技能」

戦闘

その武器での戦闘を得意とする才能。

魔法

攻撃魔法や補助魔法といった魔法を使う才能。

神魔法

回復魔法や浄化魔法を使う才能。

「料理／食材」

へんでろば

シチューのような料理。ランスの好物。

うはぁん

高級果物。

ウオツカ

ヘルマン国の地酒。アルコール度数が高い。

第3話 後に語られる出来事

- リーザス城下町 -

「だから、通行手形を持たない方はお通しできません」
「ええい、いいからさっさと通せ」

ランスは今リーザス城の前にいた。昨日ルークからリーザス城の中にいる可能性が高いという情報を聞いたため、朝から城の中に無理に入ろうとしているのだ。

「それ以上すると捕まえて牢獄に入れますよ」
「げっ… とりあえず戦略的撤退だ！」

その場から逃げ出すと公園でルークと落ち合う。ルークの方はというと、通行手形を手に入れる手段がないか朝から情報収集をしていたのだ。

「強行突破は無理だな。そっちの方は何か手は見つかったか」
「そうだな… それにしても疲れがとれん。若干風邪気味だし。昨晩は誰かさんのせいで街の外で野宿することになったからな」

そう、昨晩二人は街の外で野宿をしていた。それというのはランスが昨晩、一人で宿を切り盛りしているJAPAN出身の奈美という娘に襲いかかり、宿を追い出されてしまったためだ。因みに奈美は柔道五段の持ち主で、ランスはあっさりと投げ飛ばされてしまい、結局手は出せなかった。

「ふん、あれは俺様のせいじゃない。お前が「JAPAN出身…まさか忍者では…」とか呟くから確かめようとしただけだ」

「…記憶にないな」

「嘘付け！」

思いつきり目をそらしながら答えては、ランスじゃなくてもそう言いたくなる。

「まあ昨晚のことは置いておいて、話を戻そう」

「お・ま・え・が、始めたんだろっが！」

「…通行手形は中々持つている人物が少ないみたいだな、どうやら城下町の住民だと酒場のマスターが持つているらしい」

「なんだ、それなら話は早いな」

「…いい加減ランスの行動パターンも読めてきたが、一応聞いておこう。どうするつもりだ？」

「サクツと殺して奪えばいい。うむ、さすが俺様」

「予想通り過ぎて涙が出てきたよ。まあ、殺すのは別にして、とりあえず酒場に向かうか」

城下町の端にある酒場「ぱとらっしゅ」に向かう。途中買物していたシルと出会い、真面目に潜入調査しろというランスの雷が落ちていた。シルは学園長の頼みと言いかけていたが、問答無用でぐりぐりのお仕置きを受けていた。さすがに不憫である。

酒場に到着し、中に入ると、客は余りおらず、店の中に辛気くさい空気が漂っていた。

「なんだ？繁盛しておらんではないか。これなら殺しても誰からも文句は出ないな」

「文句が出ないかは知らんが、この空気はあのマスターのせいだな。明らかに負のオーラを出している。おかしいな…以前にもこの店は

来たことがあるが、もつと剛胆な性格だったと思ったが…」

二人はカウンターに座り、酒を注文する。ランスが今にも斬りかかってしまいそうなので、どのように話を切り出そうか早急に考える必要があるな、とルークが考えていると、幸いなことにマスターの方から話しかけてきた。

「見た目から察するに、あんたら強い戦士なんだろう？少し頼みがあるんだが…」

「ふん、ゆつとくが俺様は安くな」どういう要件だ？」…おいつ」

せつかくマスターと仲良くなる切っ掛けを自らぶち壊しにしてしまいそうだったので、ランスの発言を遮ってルークは聞き返す。ランスは不満そうだ。

「俺の娘が盗賊にさらわれちまったんだ。救い出して欲しい」

不満そうであったランスが急に真面目な顔になり、口を開く。

「その娘…美人か？」

「全然関係ないよな、今」

「親の俺が言うのもなんだが美人だ」

「答えるなよ、おやじ…しかも親バカかよ…」

ルークの頭が痛くなってきたのは酒のせいではないだろう。風邪が悪化しなければいいが。

「がはははは、ならこの俺様と下僕その1に任せておけ。大船に乗ったつもりでいろ」

「誰が下僕だ。盗賊の目撃情報なら情報屋の娘から今朝聞いたぞ。」

第3地区の外れだ」

「よし、早速向かってサクツと救出だ！」

「ありがとう、頼んだぞ。ただ報酬はあまり多くは払えなくてな…
800GOLDで頼む」

「いや、500GOLDで良い。その代わり通行手形を譲ってくれないか？」

「ん？あんなもんでいいなら良いぜ。最近は何事にも行かないしな」

これで娘さえ救えば通行手形が手に入る。殺すことにならなくて良かったとルークはほっとする。ランスも美人の娘と聞いて俄然やる気だ。殺そうとしていたことなど、もう忘れていよう。

・リーザス城下町近辺の洞窟 盗賊団のアジト・

「最近似たような洞窟を拠点にした盗賊を倒したような気が…何か関係あるのか？」

「何ぶつぶつ言ってるやがる。お前の独り言は二度と信じんぞ。ここがアジトだな。早速入るぞ…なんだ！？生意気にも結界なんぞ張りやがって、これじゃあ入れないじゃないか！」

ランスが喚く横をすり抜け、ルークは結界に触れる。すると結界はルークに対して無効化されたため、ルークは何事もなかったように結界を抜ける。

「なんだ？なぜお前は入れているんだ？」

「ああ、結界を無効化して入っただけだよ」

「なんだ、お前そんな器用な魔法も使えたのか。では俺様も入ると

するか」

魔法という訳ではないんだが…まあ説明も面倒だしいいか、とルークは自らの結界無効化能力の説明を放棄する。というのも、そもそもルーク自身もこの能力に関してよくわかっていないからだ。防御結界や魔法結界を無視できるな！、便利だな！、程度の認識だ。

「って、入れんではないか！」

「無効化したのは俺だけだからな。結界事態はまだ残ってるから、ランスは入れないぞ」

「ズルだぞ、貴様！これでは美人の女の子を助けられんではないか！俺様も入れろー！」

「大声で騒ぐな、気づかれるだろ…は…はくしょん！！！」

「明らかに俺様の声よりお前のくしゃみの方がでかいだろうが！！！」

ゴゴゴゴゴゴ…

風邪気味のルークがくしゃみをすると同時にアジトに掛かっていた魔法結界が解ける。さすがに呆然とする二人。

「…まさかくしゃみで結界を無効化するとは。俺様が爆裂くしゃみと名付けてやるう」

「違うから。どう考えても偶然くしゃみが結界解除の合い言葉だっただけだから」

随分不用心な結界である。まあ盗賊は深く考えていなかったのだろう。意気揚々と洞窟の中に入っていく二人。洞窟内にはいたるところに燭台が立っており、思ったよりも明るく歩きやすくなっていった。思ったよりもちゃんとした組織かもしれない。そうルークが考

「むう…特に何も見当たらん。そつちはそうだ？」

「俺様の方も見当たらん。ええい、厄介なことしやがって。絶対に皆殺しだ！」

「おや、盗賊以外のお客さんは珍しいね？」

と、背後から声を掛けられ二人は身構える。ランスとルークという一流の冒険者が、声を掛けられる直前まで全く気配に気がつかなかったのだ。何者だ…ルークの頬に汗が流れる。振り返るとそこにいたのは壁に埋め込まれた赤い髪のおっさんであった。

「焦らせやがって。なんだ貴様は？壁の中にいるとか変態か？」

「僕の名前はブリティシユ。好きで壁の中にいる訳じゃないよ。ここから出して貰えると嬉しいな！」

「結界とは違うな。呪いの類か…？だとしたら出す手段を持ち合わせていないな…」

「そんな…」

後の歴史に刻まれる出会いとは、得てしてこのようなものである。ブリティシユも、ランスも、そしてルークもそれを知る由もないが、この出会いは後に人々の間で語り告がれ、教科書にも載るような出来事となる。

LP0001 8月 二人の英雄がかつての英雄と出会う…と。

第3話 後に語られる出来事（後書き）

「人物」

ブリティシユ

LV 50 / 100

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV2

リーザスの近くにある盗賊団の洞窟の壁に埋め込まれている男。その正体は、今より1500年ほど前にエターナルヒーローと呼ばれるパーティーを率いたリーダーであり、英雄と呼ばれていた。魔法使いシンの禁呪を受け、壁に埋め込まれる。新陳代謝が殆ど無くされており、そのために長寿となる。壁の中での長い年月を経て精神を病み、かつて英雄と呼ばれていた頃の面影はない。

堀川奈美

リーザス城下町の宿「あいくくりむ」を一人で切り盛りする苦勞人。柔道五段。

ムララ

かぎりない明日戦闘団の構成員。本編ではランスが初めて戦う中ボス的な扱い。しかし、洞窟内を歩いているいもむしDXより弱かったりする。

「技」

リーダー

対象の思考や情報を読む初步魔法。複雑な思考やシールドをさせていると読むことが出来ない。

「その他」

エターナルヒーロー

1500年前に魔王ジル討伐のために集まったパーティー。過去から現在に至るまで、これほどの者たちで構成されたチームは無かつたという。構成員は戦士ブリティシユ、魔法使いホ・ラガ、神官カフエ、侍日光、盗賊力オスの五人である。GL0533年、その消息を絶つ。

GOLD

この世界の通貨単位。1GOLDは約100円。モンスターの間では、キラキラ光ってきれいなこれを多く持っている幸せになれるという伝説があり、モンスター同士で取り合っており、強いモンスターほど多くのGOLDを持っている。

年号

創世記

Kukuu0001}2014 魔王ククルククルの時代

AV0001}0721 魔王アベルの時代

SS0001}0500 魔王スラルの時代

NC0001}0960 魔王ナイチサの時代

GL0001}1004 魔王ジルの時代

GI0001}1015 魔王ガイの時代

LP0001} 魔王リトルプリンセスの時代

第4話 決戦！かぎりない明日戦闘団

- 盗賊団アジト 最奥の部屋 -

「ふへへへ、おら、もっと良い声を上げな」

「いや…もうやめて…」

部屋の中では40才前後と思われる男が少女を犯していた。この男が盗賊たちのリーダー、名をライハルトと言う。周りには部下と思われる盗賊が五人。その内の四人も他の少女たちを犯している最中であつた。その光景を若干冷やかな目で見ているのは、盗賊団唯一の女性構成員だ。

「これだから盗賊家業はやめられねえな。お前らも楽しんでるか？」

「ええ、最高ですぜリーダー。かぎりない明日戦闘団に入って良かったですぜ」

「(…何が最高なもんか。貧しい人たちに盗んだものを分け与える正義の盗賊団だと言われて入ってみれば、中身はただの下衆な盗賊団。さっさと抜きたいが、感じていいるのかしっかりとあたしの行動を見張ってやがる…)」

女盗賊が不満そうにしているのを無視し、他の盗賊はご機嫌に話し合う。

「そうだな、俺の作ったこのかぎりない明日戦闘団は最高だ！その内せかいを股に掛けるぜ！」

「おお、さすがですぜ、リーダー！」

「残念だがそんな日は永久に来ないな」

部屋の入り口から声を掛けられ、全員が入り口の方を見る。そこに立っていたのは戦士二人。ランスとルークだ。二人はプリティシユを解放する手段がなかったため、ひとまず彼と別れたのだ。その際、いつか必ず助けに来るとルークが約束すると、プリティシユは感謝し、階段の結界を無効化する靴の場所を教えてくれたのだった。靴は一足しかなかったが、ルークは自分で無効化できるため、こうして奥の部屋までたどり着いたのだった。

「なんだてめえら、どうやってここまで来た！」

「答える必要はないな。その娘たちを解放して貰おうか」

「面白いことを言うな。俺の機嫌のいい内にさっさと帰りな」

ルークは部屋を見回す。捕まっている娘は一人ではなかった。中にはまだ年端もいかない少女もいた。そのような少女も盗賊たちはお構いなしで、部下の一人が調度犯している最中だった。そのことに静かに怒りを燃やす。

「まあ…こいつらに生きている資格は…ないな」

「当たり前だ。世界中の美女は全て俺様のものだ。あの少女も将来的には美人になっただろうに…むかむか」

「調子に乗るなよ、やっちまえてめえら!!!」

そうリーダーが声を上げると、近くに控えていた部下たちが襲いかかってきた。

「俺様はあのリーダーを殺る。雑魚は任せたぞ」

「ボス一人と部下五人…さり気なく楽な方を選びやがって…しっかりと殺せよ」

「当たり前だ、お前の方はちゃんとあの女盗賊だけは生かせよ。中々に美人だからな」
「善処する」

そう返事をし、ルークは部下五人と対峙する。部屋の中にいた場所が悪く、部下はリーダーに向かうランスの間に割ってはいることは出来なかった。一対一と五対一の構図が完成する。

「バカが、五対一で勝てると思っているのか？」

「随分無謀な男もいたもんだね。悪いけど死んで貰うよ」

「ご心配どうも。が、複数人を相手にするのは割と得意でな」

部下の中に魔法使いと思われる者がいなかったことに内心ほっとする。負けはしないだろうが、やはり戦いつらくはなるからだ。入り口や階段の結界はどこかで盗んできた魔法製品で張ったのだろう。そう考えながら、ルークはロングソードを逆手に持ち、腰を少し落とす。盗賊たちは何かする気かと身構えるが、まだ振り抜いたところで当たる距離ではない。そのまま突っ込んでくる気だろうか、と女盗賊は考えていると予想外の事が起きた。ルークはそのまま剣を左から右に横払いで振り切ったのだ。当然剣は空を切る。

「なんだあ、射程もわからねえ素人か？」

「恐怖の余り訳わからなくなってるんじゃないかねえか？」

「なるほどな。ぎやはははは…ん？」

大声で笑っていた男は不意に違和感を覚え、自分の身体を見る。おかしい。なぜ俺の上半身と下半身がずれ…。男の意識はそこで永久に途絶えた。周りの盗賊たちの目が、驚愕で大きく開かれる。

「……なっ！……！！！！」「……」

「…真空斬」

自らの放った技の名前を良い、再び構える。今の男を一番先に殺したのにも理由がある。他の盗賊は短剣装備だが、この相手だけ斧を装備していたのだ。二発目の準備をしているのを察し、盗賊たちから血の気が引く。

「あれを使わせるな！突っ込めー！！」

「ふん、技を放つ手間が省けたな」

焦った盗賊たちが迫ってくるのを見て、ルークは素早く真空斬の構えを解き、初めに迫ってきた盗賊を斬り伏せる。長剣と短剣だ、リーチの差がありすぎる。その盗賊は何も出来ないまま倒れ込む。正面の男が倒れきるとほぼ同時に、左右から二人目の男盗賊と女盗賊が攻撃を仕掛けてくる。男盗賊の短剣を剣で防ぎ、女盗賊の攻撃は肩だけで避けながら、彼女の腹に蹴りを入れる。

「がっ…」

女盗賊が倒れ込む際、その手に持っていた短剣を左手で奪い取ると、右の男盗賊に向かって斬りつける。頸動脈を捕らえたようで、ぐあ…と声にならない声を上げながら、血飛沫を上げそのまま崩れ落ちる。

「くっ…くそっ…！！」

他の三人と違い、命令するだけで自分は襲いかかってこなかった盗賊がいた。ルークは知らないが、この男が副リーダーだったのだ。典型的な上から命令するだけの臆病で無能な男。ようやく腰から短剣を抜き、身構えるが…

「遅い！」

盗賊が気づいた時には既に目の前に短剣が迫って来ていた。ルークが左手に持っていた短剣を投げたのだ。その刃はそのまま盗賊の額に突き刺さり、その手から腰から抜いたばかりの短剣がこぼれ落ちる。

「ぐっ…命乞いはしない。殺せ…」

腹を押さえながら倒れ込んでいる女盗賊が呻く。

「悪いが殺すつもりはない。あんただけさっきの反吐が出る乱交に参加していなかったからな。女…というのもあるだろうが、あいつらを見る目が明らかに下衆を見る目だった」

「それだけの理由かい？一応あたしも盗賊だよ。ある程度の悪行はしてきている」

「別に時代が時代だからな。盗賊それ全てを否定する気はない。俺ら冒険者も、一歩間違えれば似たようなものだからな」

独自の考えを女盗賊に向かってしゃべると、ふと目を細め若干のさつきを含めた口調になる。

「もちろん…彼女たちの解放を邪魔しようとするなら別だがな」

「いや…邪魔する気はないよ。あたしらの負けだし、ああいった誘拐は正直不本意だった」

「良識があるようでこちらも助かる」

「名前…聞いても良いかい…？」

「ルークだ。あんたは？」

「シャイラ…シャイラ・レスだ」

「良い名前だ。そういえば、ランスはどうしたかな」

目の前の戦いに集中していたルークもシャイラも、ランスとリーダーの戦いに気を向けていなかった。二人が戦っていた方向を見ると、盗賊団のリーダーであるライハルトは既に床に倒れ伏し、命ない肉塊となっていた。その少し奥でランスは先ほどまでライハルトに犯されていた少女を無理矢理犯していた。

「お前なにしてんだーっ！！」

「見てわかるだろう、ナニだ！がはは、グツドだ」

「うつつ、助かったと思ったのに…」

「何を言う。しっかりと助かっているではないか。これはその分の報酬だ」

「無理矢理報酬を貰うな。さて、娘たちを解放しないと。酒場の親父の娘さんも捜さない」と

「あっ…それなら、私とその娘です…んっ…」

「おお、君があのお親父の娘か。確かに言うとおりの美女ではないか、がはは」

偶然にもランスが犯していた少女が酒場の娘だった。名前はパルプテックス。あの親父、どんなネーミングセンスだ。ランスがお楽しみの間、他の娘たちの鎖を解き、ようやく事を終えてランスから解放されたパルプテックスも加えてリーザスに戻ることにした。

「俺は彼女たちを連れて先に戻るが…何でこの洞窟に残るんだ、ランス？」

「ふっ…少しやり残したことがあってな。案内に彼女を置いておいてくれればいい。後で向かうから酒場で待っている」

「まあ案内くらいいいけどな…だがこのアジトはたいしたもの置いてねーぜ」

ランスはシャイラを指し、シャイラがそれに答える。娘たちを早く家まで送り届けてあげたいという思いから、ルークは特にその内容は聞き返さず、先にリーザスへと向かう。結論から言うと、ルークとシャイラは見誤っていた。ランスの性欲をだ。ランスと二人で残ることの危険性は考えていたが、先ほどまでパルプテックスを犯していたのだ、まさかな…と。ルークが洞窟から出ていったのを見送ると、ランスの目が怪しく光る。

・リーザス城下町 酒場「ぱとらっしゅ」・

「あんたらなら娘を救ってくれると信じていたよ、ありがとう」

「もう一杯どうぞ。このブランディ、おいしいのよ」

「確かに飲みやすいな」

カウンターでルークは親娘と会話しながらランスを待っている。助けてくれたお礼の通行手形は先ほど貰い、今飲んでいる酒もサービスだ。

「あんたを気にいつちまった。どうだ、俺の娘を貰ってくれないか？」

「もう、お父さんたら…変なこと言わないで」

冒険者をやっているればこの手の話はたまに出る。慣れたように断りの言葉を入れようとするルークだが…

「それに私…ランスさんの方が…」

さすがに今の発言にはへこんだ。おかしい。さっきまでの洞窟での流れのどこにランスに惚れる要素があった。納得がいかない顔で酒を飲んでいるとようやくランスが到着した。

「あ、ランスさん。先ほどはありがとうございました」

「がははは。何、パルプテックスちゃんもグッドだったぞ」

「ぽっ…」

「遅かったな。洞窟でいったい何をしていたんだ？」

ルークは顔を赤らめるパルプテックスに対し、「ぽっ…じゃねーだろ！」と心の中で突っ込みながらランスに問う。

「決まっているだろう、ナニだ！」

「…はっ？」

「シャイラちゃんの身体はグッドだったぞ。おっばいもでかかったし。がはは」

「ちょっと待て…まさか、やり残した事ってというのは…」

「ああ、シャイラちゃんを抱いていなかったからな。涙を流して喜んでいたぞ」

「どう考えても歓喜の涙じゃないだろ、それは！」

「まあ別れ際に「必ずいつかぶっ殺してやる」とは言ってたがな」

「超恨まれてるじゃねーか！」

頭を抱えるルーク。せつかく円満に終わったと思っていたのに、と嘆いていると…

「因みにお前も含まれてたぞ。先に帰ったルークの野郎も絶対殺す！」とか言ってたし」

「理不尽だ！！」

酒場にルークの声が悲しく響いた。

第4話 決戦！かぎりない明日戦闘団（後書き）

「人物」

ライハルト

LV 7 / 12

技能 シーフLV1

かぎりない明日戦闘団リーダー。装備は大鎌。本編では一応初ボスに当たるが、まず負ける相手ではない。

シャイラ・レス（オリモブ）

LV 3 / 25

技能 剣戦闘LV1 シーフLV1

かぎりない明日戦闘団の女盗賊にして唯一の生き残り。本編では名無しの女盗賊で、本作同様再登場フラグとも思える言葉を発して去るが、その後22年間音沙汰がない。きっともう出ない。名前はアリスソフト作品の「大番長」より。本作での再登場の予定は一応あり。ファミリーネームを変えたことにはきつと意味がある。

パルプテックス

リーザス城下町の酒場「ぱとらっしゅ」店主の娘。ランスに好意を抱く。

「ぱとらっしゅ」の親父

リーザス城下町の酒場「ぱとらっしゅ」の店主。意味もなく飲み代を無料にしたりと随分気っぷの良い親父だが、ネーミングセンスはない。

「技能」

シーフ

盗賊としての才能。手癖の悪さともいえる。

「技」

真空斬（オリ技）

使用者 ルーク

剣に溜めた闘気を相手へ飛ばす必殺剣。威力は普通の斬撃と変わらず、ある程度の実力者ならその軌道を読み防ぐことは出来る。風邪気味じゃなく、しっかりと集中できれば連発も可能。後衛にも攻撃できるため、ルークはこの技を重宝している。

「料理／食材」

ブランデー

ポピュラーな酒。よく使われるブランデー表記でないのはアリスソフトのこだわりと言えるだろう。「ぱすちゃこ」ではブランデー表記だった気もするが。

「その他」

かぎりない明日戦闘団

リーザス近辺で活動をする盗賊団。ランスとルークの活躍で壊滅した。

第5話 恐怖

・リーザス城下町 パリス学園・

「という訳で俺様たちはこれからリーザス城に入る。しっかりと調査を続けていろよ」

「はい、わかりましたランス様」

パリス学園の裏口でランスとシイルとルークの三人が落ち合っていた。お互いの情報の確認と今後の動き方を決めているところだ。

「しかし…まさかヒカリちゃんが初めてではないとはな…」

「そのようです。パリス学園ではこの4年間、毎年生徒が1人行方不明になっていました」

「学園の教師が怪しいな、その辺はしっかりと調べたのか？」

「はい、悪いとは思いましたが一応リーダーの魔法で心を読ませていただいたのですが…特にこれといって情報はありませんでした」

「深いところまで読み取れる魔法ではないからな…潔白と決まったわけではないが…」

「あ、一つ気になることがあります」

「なんだ？さつさと言え」

「生徒で一人だけ心を読めなかった女性がいるんです。恐らくシールドの魔法を掛けているのだと思います」

「普通のお嬢様生徒がか？用心のために親がやった可能性もあるが怪しいな。良い情報だぞ、シイルちゃん」

「えへへ…」

「よし、シイル。その生徒をマークしろ」

「わかりました。ランス様とルークさんもお気をつけて」

「ああ、ありがとう」

シルと別れ、二人はリーザス城へと向かった。

- リーザス城 -

ルークは驚いていた。ランスの強運にだ。門番に通行手形を見せると中に入れて貰えたので、まずは城に併設されているカジノに入ると、そこで「牢屋にどこから来たのかわからない女性が捕まっている」という情報を聞きだした。その情報を確かめるため、二人はリーザス城に潜入していた。どう牢屋に潜入したものかとルークが真剣に考えている横で、ランスはリーザス城のメイドたちを犯しているだけだった。が、その行動が全て良い方向に行くのだ。掃除をしているメイドを犯せば城の奥に入れるようになる鍵が手に入り、こっそりパンを盗んでいたメイドを犯せば牢屋の鍵が手に入るのだ。こいつは天から愛されている、と真面目に牢屋への潜入を考えていた自分が馬鹿らしくなってきた。いや、だが牢屋の鍵を手に入れた方がいいが、牢番が必ずいるはず。見つければ潜入していることがバレてしまう…どうしたものか。

「何ぐずぐずしている。さっさと行くぞ」

「おい、間違いなく牢番に見つかるぞ。考えなしに突っ込むな！」

ランスは何も考えずに牢屋がある部屋の扉を開けてしまった。焦るルークだが、その目に入ってきたのは居眠りをしている女性牢番だった。

「なんか…どうでもよくなってきたな…」

「訳の分からんこと言っていないで行くぞ」

牢番の横を通り、鍵を使って牢を開けるとそこには一人の少女がいた。髪の色は青く、ヒカリではない。

「大丈夫か？君の名前は？」

「…ユキ・デルです…」

「なぜ牢獄に捕まっているんだ？何かしたのか？」

「…王女様に…無理矢理…」

「王女だと？王女が君をこんなところに入れたのか？」

「…すみません、忘れてください…そうでないと、また私…」

そう言っただけで黙り込んでしまうユキ。その瞳はすでに人生を諦めてしまっているように見えた。助け出してあげたいところだが、鎖につながれており簡単には連れ出せない。それに、ここで鎖を斬って助けてしまうと潜入がばれてしまい、今後動きにくくなってしまふ。因みにランスが犯したメイドたちはなぜか二人とも報告する気はないようだった。納得がいかん。

「すまない…今の俺たちは君を助けることが出来ない。少しだけ待っていてくれ、必ず君を解放してみせる」

「がはははは、俺様に任せておけ！」

「…」

牢を後にする二人。部屋を出る直前、牢番が目を覚ましたようだが、「なんだあー…勝手に入ってきてきちゃ駄目じゃんだよー…」とか明らかに寝ぼけていたので無視した。

「まさか王女が誘拐に関わっているとはな…本格的にやばい案件だな」

「これでは20000GOLDでも割に合わんな。うむ、救出した

ら報酬を釣り上げよう」

「って言いながら部屋に勝手に入るな。誰かいたらどうするんだ！」

またもランスが勝手に行動してしまう。目の前の部屋の扉を勝手に開けてしまい、運の悪いことに部屋にいた女性に見つかってしまった。

「誰、健太郎くん？あれ、違う人みたい」

瞬間、ルークは全身の毛穴から汗が吹き出すのを感じた。そこにいたのはピンクの髪のおとなしそうな少女。どこからどう見ても普通の女の子で、ルーク自身なぜ彼女にここまでの畏怖を抱くのがわからなかった。しかし、確かに感じる。コイツは…やばい…

「じーっ」

「がはは、俺様がそんなに美男子だからって、そう見つめるな」

「健太郎君のほうがかっこいいもん。それで、おじさんたち誰？」

「おじっ…」

ランスはルークの異変に気づかず、普通に少女と話を続ける。

「がはは、君はかわいいな。とぉー」

「きゃっ！」

唐突にランスが少女のスカートをめくる。白いパンツがあらわになり、ランスはご満悦だ。少女は恥ずかしそうに顔を真っ赤にする。

「えっちー！」

少女の叫びと同時に、ルークは頭に浮かんだのは死のイメージ。その直後、二人を突風が襲い、部屋の外に叩き出された。壁に打ち付けられる二人。特に大きなダメージはないが、突風が起こった理由がわからず、ランスが呆然としている。

「いててて、今のはいったい何だ？」

「ランス…行くぞ…彼女に、それ以上構うな…」

「おい、勝手に行こうとするな。ええい、こら、待て！」

ルークがこの場を立ち去ろうとすると、ランスは文句を言うが、さっきの突風が多少気に掛かってはいたのが、素直に後についてくる。

「（今は、少しでも早くあの少女から離れなければ…なんなんだ、アレは…）」

・リーザス城 カジノ・

「がはははは、赤の5番で大当たりだ！さあ、脱いで貰おうか、葉月ちゃん」

「あーん、おかあさーん」

がむしゃらにあの場を立ち去って、二人はカジノに来ていた。ランスはのんきに奥で脱衣ルーレットをやっている。エロい顔をした男どもがその様子を眺めていて、ちよつとした人ばかりが出来てしまっていた。

「（ふう…ようやく落ち着いたな…なんだったんだ、あれは…以前

にあの森で彼女の实力を見せて貰った時にもあんな恐怖は感じなかったぞ……」

ルークは心を落ち着けながら、かつての森での生活を思い出す。彼女は元気になっているだろうか……。すると、不意にカジノの店員が話しかけてきた。青い髪の美しい女性だ。

「お客様、先程から顔色が悪かったですが大丈夫ですか？」

「ああ、心配掛けてすまない。大丈夫だ……ん？失礼だがお名前を聞いても良いかな？」

「ふふ、新手的のナンパですか？アキ・デルと言います」

「デル……やはりそうか。もしかして、ユキと言うのは君の近親者か何かかな？」

「……！あなた、ユキ姉さんを知っているの？ユキ姉さんはどうなったの？」

「ああ。気持ちはわかるが、少し落ち着いて聞いてくれ。彼女は牢屋に捕まっていた」

「そう……まだ牢にいたのね……早く保釈金を稼いで助け出してあげないと……」

今にも泣き出しそうな顔をしながら、アキは呟く。

「いったい何があったんだ？彼女はなぜ捕まっている？」

「姉さんは何もしていないのに、王女様に反乱を企てたとして捕まってしまったの。姉さんが……姉さんがそんなことをするはずがない……！」

彼女の悲痛な叫びを聞いて、ルークは一つの決意をする。アキは懐から石を取り出し、ルークに手渡す。

「もし…ユキ姉さんのもう一度会つのなら…これを渡していただ
けませんか？」

「これは？」

「私たちの家に代々伝わるやすらぎの石です。この石が…少しでも
姉さんの心をやすらげてくれれば…」

「…任された。必ず姉さんに渡しておくよ」

「ありがとうございます。それと、これは少ないですお礼です」

アキはサイフからGOLDを出そうとするが、ルークはそれを制
止する。

「それは貰えないな…それと、保釈金を稼ぐためとはいえ無理に働
きすぎては駄目だぞ」

「でも…少しでも早く姉さんを助け出してあげないと…」

そう言い残し去ろうとするルークに、アキは小さい声で反論する。
それを聞いて、ルークは彼女に一度だけ振り返り、口を開く。

「大丈夫、姉さんはもうすぐ帰ってくるよ。約束する」

騒がしいカジノの中で、ルークのその力強い言葉が、アキの心に
大きく響いた。

・リーザス城 客間・

その少女は椅子に腰掛け、足をぷらぷらとさせながら、愛しの彼
がはんばーを買って戻ってくるのを待っていた。頭に浮かぶの
は先ほどのおじさん二人組。スカートをめくられたのは口大きいお

じさんだったが、彼女が今考えているのはその奥にいた黒髪の顔の整ったおじさんのほうであった。

「あのおじさん…初めて見る人だね。なんかいやな感じがしたな…。なんだろう?」

そう独りごちる。ルークほどではないが、彼女も何かを感じていたのだろう。

「んー、そろそろリーザスからも離れなきゃだめかな…。結構この国好きだったんだけどな…。健太郎君が戻ってきたら相談してみよつと」

そう自分の中で決意したところでお腹が鳴る。はんばーがーはまだかな、お腹すいたな、と悲しそうな顔をする彼女は、やはりどこからどう見ても普通の少女にしか見えない。彼女の名は来水美樹。しかし、彼女にはもう一つ名前がある。その名を…

「あーあ…魔王になんか…なりたくないのに…」

魔王リトルプリンセス

第5話 恐怖（後書き）

「人物」

来水美樹

LV 1 /

技能 魔王LV1

現在の魔王。魔王名は「リトルプリンセス」。元々は異世界で暮らす中学二年生だったが、先代魔王ガイにこの世界に連れてこられ、魔王にされる。魔王になりたくない彼女は、追ってきた恋人の小川健太郎と共に、大陸中を逃げ回っている。

ユキ・デル

謀反の冤罪を掛けられ、投獄された女性。投獄前は妹と一緒にパン屋をやっていた。

アキ・デル

姉の保釈金を稼ぐためにカジノで働く女性。勝ち気な見た目とは裏腹に、姉思いの優しい女性。ランスクエストに出なくて泣いたのは筆者だけではないはず。デル姉妹大好きです。

甲州院葉月

リーザス城カジノ店員。脱衣ルーレット担当。的中率1/10で配当3.6倍。

お掃除メイド

リーザス城メイド。お掃除に情熱を掛けている。

パン盗みメイド

リーザス城メイド。手癖が悪く、常にパンを盗んでいる。お掃除

メイドと共に、ランスクエストにて22年ぶりの再登場を果たす。
CG出た瞬間に喚起でうおおお！と叫んだのはきつと筆者だけ。

リーザス城門番

通行証をチエックする女の子門番。ちゃんと仕事しているほう。

リーザス城牢番

牢屋を見張る女の子兵士。仕事していないほう。牢番エ…

「技能」

魔王

魔王のみが保有する技能。二級神をも上回る力を手にする。

「アイテム」

やすらぎの石

持っている心がやすらぐ。没落貴族であるデル家に代々伝わる家宝。

「料理／食材」

はんばーがー

美樹が健太郎にパシらせていた料理。

第6話 トーナメント

・リーザス城 牢屋・

その女性は、城を出ることを既に諦めていた。身に覚えのない罪で投獄され、王女に汚されぬいた。余計なことをしゃべれば殺すとも言われた。その彼女の心を未だに繋ぎ止めていたものは、かわいい妹の存在であった。アキに…出来ることならもう一度会いたい…ギイツ、と牢のドアが開く。ああ、また王女が来たのであるうか。そういえばさつきは見かけない男が二人ほど来ていたが、あれはなんだっただろうか。既に誰と話したのかさえおぼつかなくなってきたしまっている。

「どなた…ですか…」

「ただの冒険者さ。妹のアキさんから頼まれたものを届けに来た」
「えっ…」

アキという言葉にぼやけていた意識を取り戻す。よく見れば、先ほども来た二人の冒険者がそこに立っていた。

「アキに…会ったんですか…」

「ああ、これが妹さんからの預かりものだ。受け取ってくれ」

ユキはやすらぎの石を受け取る。ぐちゃぐちゃに汚されていた心が、落ち着きを取り戻していく。涙が流れるのを止められない。

「アキ…ありがとう…」

ふと、冒険者が後ろにいたもう一人の男に声を掛ける。

「ランス…先に謝っておく…すまん」
「ん？」

言っやいなや、冒険者は持っていた剣を振り抜いた。ユキの足に繋がれていた鎖を叩き壊したのだ。

「えっ…どうして…」

「「ぱとらっしゅ」という酒場は分かるな？その親父に既に話を通してある。二、三日の間そこに隠れていてくれ」

突然の出来事に思考が追いつかない。この人は私を助けてくれたのか。なぜそんなことをする。それに、私が抜け出せば城は大騒ぎになる。

「大丈夫。大騒ぎにはならないし、すぐにまた妹さんとも暮らせるようになる」

「どうして…ですか…」

「すぐに…全てを終わらせるから」

そう言って優しく手を引いて立ち上がらせてくれる。まともに歩くのは久しぶりなため、足下がおぼつかない私を見て、そっと肩を貸してくれる。

「さあ、行こう」

「お名前…聞かせていただいてもいいですか…？」

「ルークだ。妹さんと仲良くな」

・リーザス城 コロシウム・

「悪かったな…これで後は動きにくくなる」

「ん？ユキちゃんが助かったんだ、何も問題はあるまい。がはは」

そう言って笑い飛ばすランス。器がでない、とルークはランスを少し見直していた。同時にランスもルークの思わぬ熱い一面が見られ、少しルークの見方を変えていた。

「ああ、つまらないわ、みんな弱い人ばかりで！」

不意にそんな言葉が聞こえてきた。声のした方向を見ると、黄金の鎧をつけた女戦士がいた。

「最近の男はだらしないわね。闘ってもまるで張り合いがない」

「おい貴様、少しばかり生意気だぞ！俺様がお仕置きしてやるうか？」

女の発言に気を悪くしたランスは、怒り心頭で女戦士に突っかかっていく。

「あら？あなたなら私に勝てるって言うの？」

「その通りだ」

「自信満々なのね。それなら、このコロシウムで私と勝負しない？あなたのその自信、打ち砕いてあげるわ」

「むかむか、いいだろう！ただし、俺様が勝ったらやらせてもらうぞ！」

「私が負けるわけないけど、勝ったらね」

「よーし、その身体もらった！」

「ふっ…戦いは明日のトーナメントで。しっかりと申し込んでおき

なさいよ。楽しみにしているわ」

「ふん、身体をきれいにして待っているんだな。そういえば貴様の名前は？」

「ユラン・ミラージュ、このコロシアムのチャンピオンさ！」

・リーザス城下町 酒場「ぱとらっしゅ」・

「へー、それでランスさんは明日のトーナメントに出ることになったんですね」

「ああ、今受付に行っている」

ルークはパルプテックスと話しながら、酒を飲んでいる。トーナメントの申し込み時間に時間が掛かりそうだったので、ランスを置いて先に酒場に来ていたのだ。

「親父さん、悪かったな…無理を言って…」

「なに、良いつて事よ！パン屋のユキちゃんを救ってくれたんだからな！二、三日と言わず一生住み着いてくれてもいいくらいだぜ」「そうですよ、気になさらないでください。ユキさんは私の部屋で寝ています。よっぽど安心したんでしょうね。気持ち…少しですが分かりますし…」

この親娘は本当にいい人たちだ。言葉にするとまた何か言われてしまうので、心の中で感謝をしていると、申し込みを終えたランスがやってきた。

「がはははは、申し込み完了だ！これで明日の試合に参加できるぞ」

「お疲れ様です。どうぞ、まずは一杯」

「おう、ありがとうなパルプテックスちゃん」

「ぼっ…」

もうこの状況になれてしまったルークは特に突っ込まず、酒の追加を親父さんに頼む。考えるのは明日、自分がどう動くかだ。ランスがトーナメントに出ている間、自分だけ何もしないわけにはいかない。しかし、城に潜り込むのもう無理だろう。

「でも…ユランさんは強敵ですよ？大丈夫ですか？」

「そうだな、本人が望めばリーザス軍の副将くらいにだったら十分なれるって評判だしな」

「ふん、俺様の相手ではないわ」

「そうですね、ランスさんは無敵ですものね！」

「がはははは！！」

「あんまりつけあがらせないでくれ、足下救われるから…」

「ユランの必殺技は幻夢剣っていつてな、ありやすげー技だぜ。でも以前酒場で飲んでた奴が、ヒララレモンを鎧に塗っておけば滑って当たらないとか言っていたような」

「む、それは本当だろうな？親父、ヒララレモンをよこせ」

「相手ではないと言っておきながら万全を期す。戦士の鏡ですね、ランスさん！」

「もう勝手にやっててくれ…」

パルプテックスに煽られてどんちゃん騒ぎを始めたランスを見て、さすがにルークは呆れる。器がでかいんじゃないかって、何も考えてないんだな、多分。

「明日の試合に控えて早めに寝ておけよ。で、俺は明日もう一度城下町で聞き込みをしようと思っている」

「ん？何を訳の分からんことを言ってるんだ？」

「は？」

「明日はお前もトーナメントに参加だぞ。定員が32人で俺様が31人目だったから、気を利かせて申し込んでおいたぞ。感謝しろ」
「何勝手なことしてくれてんだ！！」

・深夜 リーザス城 とある部屋・

「…ユキの動向は？」

「…まだわかっていません」

「…あの牢番はクビにしておきなさい。ユキと侵入者を急いで捜すこと。いいわね」

「…はっ！」

「…ふふ、誰に喧嘩を売ったか教えてあげないとね」

・翌日 リーザス城 コロシウム・

「ふんっ！」

「なぜだ…なぜハニワ神は私を見捨て…ぐふっ」

「それまで！ルーク選手の勝利です。ハニーフラッシュの使い手であるおたま男選手を破り、堂々の準決勝進出です！」

司会者がそう言うつと観客席から歓声が沸く。これで準決勝へと駒を進めた選手は三人。ランス、ユラン、そしてルークだ。ルークは出場者用の観覧席に戻っていく。

「ふん、時間を掛けすぎだ！退屈でしかたなかったぞ」
「劳いの言葉くらいかけられんのか」

戻るやいなや文句を言ってくるランス。ランスは一回戦でサイボーグ戦士であるフブリ・松下を、二回戦でくぐつ伯爵を、そして先ほど巨人のこんごを破り一足先に準決勝行きを決めていた。

「その退屈はすぐに終わるさ。次は私とだからね」
「ふん、もうすぐ貴様は俺の女だ」

ユランが話しかけてくる。彼女も危なげなく準決勝行きを決め、次のランスの対戦相手だ。ルークは会場に視線を戻す。今は準々決勝最終試合の最中で、赤髪の男剣士と赤髪の男武闘家が闘っていた。

「次の俺の相手は武闘家かな」
「まあそうなるだろうね。あっちの若い坊やとはモノが違うよ」

そう話しているとほぼ同時に武闘家の拳が剣士の顎に入り、武闘家の勝利が決まった。

「それまで！アジマフ選手、惜しくもここで敗退です！遂に残すところはあと三戦、果たして誰が優勝という名誉とリーザス軍武将とのエキシビションマッチの権利を得るのでしょうか？司会は私、シユリ・セイハジユウ・ナガサキが引き続きお送りします」

会場がまたも沸き立つ。どうやら貰えるのは名誉と挑戦権だけで優勝賞品はないらしい。名誉や挑戦権などどうでもいいルークは先ほどまで棄権しようかとも思っていたのだが、今の武闘家を見て心変わりしていた。あいつと…手合わせしてみたいな、と。

「我らが偉大なチャンピオン、ユラン選手か？」

「あの巨人のこんご選手すらねじ伏せた剛剣の使い手、ランス選手か？」

「華麗な剣技でここまで無傷で勝ち上がった柔剣の使い手、ルーク選手か？」

「あるいは…」

司会者の女性が会場をさらに盛り上げる。それに呼応するように、会場は興奮のるつぼと化している。そのとき、先ほど勝ち上がった武闘家が部屋に戻ってきてルークと目が合う。挑発しているわけではないが、その目が互いに語っている。負ける気はないと。

「大陸を旅する武闘家、アレキサンダー選手か？準決勝、まもなく始まります！」

第6話 トーナメント（後書き）

「人物」

フブリ・松下

トーナメント出場者。身体全体の内、60パーセントが機械化しているサイボーグ戦士。

くぐつ伯爵

トーナメント出場者。脳をえぐるのが最高の楽しみという、恐ろしい男。

こんじ

トーナメント出場者。トロール殺しの巨人で、身長は2メートル60。

おたま男

トーナメント出場者。なぜか人間なのにハニーフラッシュを使える。

アジマフ・ラキ（オリモブ）

トーナメント出場者。準々決勝でアレキサンダーに敗れた若き戦士。名前はアリスソフト作品の「闘神都市？」より。

シュリ・セイハジュウ・ナガサキ（オリモブ）

コロシアムの受付兼司会者。大会と言えばこの人。年齢は不明。名前はアリスソフト作品の「闘神都市」シリーズより。

「技」

ハニーフラッシュ

使用者 ハニー族 おたま男

ハニー族が顔の穴から放つ衝撃波。防御力無視、絶対命中という厄介な技。

「料理/食材」

ヒララレモン

柑橘系の果物。別名ヒラミレモン。日常的に料理によく使われるが、値段は高価。一つ2000GOLDが相場。

第7話 惹かれあう強者たち

・リーザス城 コロシウム・

「はっ、想像以上だよ！私の剣をここまで防いだ男は初めてだ！」
「ふん、当然だ。ええい、俺様の攻撃を避けるんじゃない！」
「嫌なこつたね！」

舞台では準々決勝までとはレベルの違う攻防が繰り広げられていた。金属が衝突し、火花を散らす。ユランは絶え間なく攻撃を仕掛け、手数が多さでランスを圧倒する。一見、ユランが圧倒的優勢にも見える。我らがチャンピオンの優勢を感じ、観客たちは大いに盛り上がる。

「ユラン選手、攻め続ける！ランス選手もそれをギリギリで捌き、なんとか持ち答えています！この状況をどう見ますか？」

実況席のシュリが隣に解説にやってきていたリーザス兵に問いかける。彼が優勝した選手とエキシビジョンを行う予定の兵士だ。髪の色は金、美男子という言葉がピッタリなほど整った顔立ちをしている。

「そうですね：一見押しているのはユラン選手のようにも見えますが：優勢なのはランス選手の方ですね」

「えっ！主導権を握っているのはユラン選手のように見えますが？」
「確かに手数で押しているようにも見えますが、その実攻撃は全て防がれています。一撃たりともランス選手に届いていません。ユラン選手の素早い攻撃を見切る動体視力、そして攻撃の先読みをする

戦士としての勘。申し分ないですね。それに…」

解説の男が言いかけた瞬間、ランスが動く。ユランの連撃の中、一瞬の隙を見つけて剣を振り下ろす。不意を突かれた形になるユランだが、すんでのところで攻撃を躲し、バックステップで距離を置く。ランスの攻撃は地面に当たる。

「むかむか、避けるな卑怯者！」

「（ふざけるんじゃないよ、なんだこのでたらめな威力は）」

ユランが文句を言いたくなるのも無理はない。今の一撃で地面が大きく抉れているのだ。

「ご覧の通り、ランス選手の攻撃は剛剣。もし命中してしまえば、おそらく一撃でユラン選手はリングに倒れるでしょう。ユラン選手はいつ、どこからでも逆転負けの可能性がある。精神的にかなりの負担となりますね」

「なるほど…参考になります。手数 of ユラン選手か、一撃のランス選手か？どちらがこの勝負を制するのでしょうか！」

再びユランが連撃を仕掛け、それをランスが捌く形となる。が、どうしてもユランが攻めあぐねる。互いに決め手に欠ける状態が続く中、先に動いたのはユランであった。ランスの攻撃のパターンを読み取り、避けた直後に下がるのではなく前に出たのだ。

「おおっと、ユラン選手、あの剣の軌道は…！」

このコロシムに通うモノならば誰しもが知っている。チャンピオン、ユランの必殺剣。コロシムで多少強かった対戦相手も、全てこの剣の前に倒れてきた。剣の軌道が妖しくも美しく流れる。観

客も、そして目の前に対峙するランスも、その剣の軌道を目で追っ
てしまう。

「（認めよう…あなたは私より強いよ…）」

この技にはユラン以外誰も知らない隠された効果がある。今まで
放った相手は、そのほとんどが格下であったため知られずにいた効
果。それは、自分よりも格上の相手に放った場合、その威力が増す
のだ。それも、格段に。

「（だからこそ、あんたはこの技で敗れることになる！）」

・その軌道、正に夢幻の如し…・

「幻夢剣!!!」

一閃。流れるような動きをしていた剣が、恐るべき早さでランス
の身体に迫る。ランスは反応できていない。その場にほとんどのモ
ノがユランの勝ちを確信した。確信していなかったのは二人。ラン
スの目を見て、何かあると感じた解説の男と、種明かしを知ってい
るルークだ。ユランの剣がランスの鎧に到達した瞬間、その軌道が
曲がる。鎧が滑るのだ。

「なんだって!」

「がはははは、幻夢剣破れたり!」

そう、昨日「ぱとらっしゅ」の親父から聞いていた幻夢剣の破り
方を実行したのだ。朝の内にパティという女の子が経営しているア
イテム屋でヒララレモンを買い、この試合直前に鎧に塗りたくって
いた。攻撃を食らえばユランにばれる可能性があったため、ここま

で必死に捌いてきたのだ。そして頃合いを見計らって若干の隙を見せる。ワンパターンな攻撃がそれだ。

「まさか…誘われたのか!？」

「がはははは、気がつくのがちょっと遅かったな!」

ランスは剣を両手持ちし、頭上からがむしやりに振り下ろす。

「ランスアタアアック!!」

しかし、その軌道はユランではなく、その目の前の地面に振り下ろされる。地面には昨程までとは比べものにならない大きな穴が開く。まさか…外したのか、とユランは思うがそうではない。これはランスの情けか、はたまたこれから抱く女を傷つけたくなかったのか。直後ユランを衝撃波が襲う。とてつもない威力に鎧は崩れ、吹き飛ばされるユラン。発生源はランスアタックが振り下ろされた地面だ。

「(近くにいた衝撃だけでこの威力とは…直撃していたら今頃私は…)」

吹き飛ばされながらそんなことを考える。地面に叩きつけられ、目を開くと目の前に剣を向けるランスが立っていた。

「どうだ、俺様は強いだろう?」

「そうだね…幻夢剣を破る奴が、アリオス以外にもいるとはね…」

「ふっ、負けを認めるな?ユラン」

「ああ…あんたの勝ちだよ、ランス」

そうユランが宣言する。ユランが負けたことにショックを隠せな

い観客も多いが、目の前のこの凄い技を見せられれば納得するしかない。

「それまで！勝者、ランス選手！決勝進出決定です！」

うおおおお！大歓声上がる。そんな中、少し違うことを考えている男がいた。ルークだ。

「（あの技…よく似ている…ふつ、考えすぎだな…）」

ランスとユランの試合から十分後、会場に開いた穴の整備などが終わり、準決勝二回戦の開始となる。ルークとアレキサンダーが会場に呼ばれる。

「さあ、興奮冷めやらぬ中二回戦です！ルーク選手とアレキサンダー選手、ランス選手への挑戦権を勝ち取るのはどっちだ！試合、開始です！！」

シュリが宣言するとお互いに構える。お互いに間合いを計った後、先に攻撃を仕掛けたのはアレキサンダーだ。

「この試合はどう見ますか？」

「そうですね…申し訳ないですが、相手にならないでしょうね」

「へ？」

予想外の返答に戸惑うシュリだが、ほぼ同時に歓声が沸く。見れば、状況は余りにも一方的。攻め立てているのはアレキサンダー。それをルークが紙一重で躲す。状況的には先ほどのランス対ユランとよく似ているが、ルークは剣で捌くのではなく、その体術だけで

全ての攻撃を躲しているのだ。それだけではない。アレキサンダーに少しでも隙があれば、拳や蹴りをカウンターで入れるのだ。これではどちらが格闘家なのか分かったものではない。

「ご覧の通り、現在立っているレベルが違いすぎます。アレキサンダー選手も素晴らしい才能の持ち主ですが、相手が悪すぎる」

「ではなぜすぐに決着を付けないのでしょうか？ ルーク選手は剣をほとんど使っていませんか？」

「分かりかねます。無駄にいたぶるような選手でもないと思うのですが…」

一番困惑していたのは解説や観客ではない。対戦相手のアレキサンダーだ。遊ばれている訳ではない。これでは稽古だ。それは、大陸を武者修行し、己の力にある程度の自信があつたアレキサンダーにとっては侮辱とも感じられていた。だがどうあがいてもその拳がルークに届かない。もどかしい思いを抱きながら、まだ仕留める気がないルークの戦い方を逆に利用させて貰う。修行中に編み出した渾身の一撃を何としても決めるのだ。

「ルーク選手…確かに…あなたは強い…」

「まあな、悪いがあんたとはレベルが違いすぎる」

「だが…こちらにも意地がある！」

空気が変わる。アレキサンダーの拳を闘気のようなものが覆う。

「全力の拳を叩き込んでこい！次は避けん！」

「！？…その油断が…命取りだ！！」

アレキサンダーが拳を放つ。アレキサンダーは特に技の名前などに拘る人物ではなく、その技を編み出した際、相手モンスターの装

甲ごと破壊したことから、単純にそう呼んでいる。

「この一撃がこの試合の分水嶺…装甲破壊パンチ!!」

その一撃をルークは剣で受ける。が、拳はルークの剣を叩き折り、その刃が宙を舞った。この拳、届いた…アレキサンダーの集中が一瞬切れる。だがルークは動揺することもなく、既に次の行動に移っていた。宙を舞う刃を左手で掴み、右手でアレキサンダーの顔面を掴み押し倒す。一瞬の間にルークがアレキサンダーの上に馬乗りになり、刃をその首に突きつけていた。その動きを目で追いきれなかった観客も、目の前の現状に息をのむ。既に決着が付いているであろう状況の中、アレキサンダーが口を開く。その瞳には涙。

「私は…私自身を許せない…」

「理由を…聞いても良いか？」

「拳が届いた瞬間…私の心は満ち、集中を欠いてしまった…武闘家としてあるまじき恥だ…」

「ああ…それがあんたの敗因だ」

「…まいった」

アレキサンダーのギブアップ宣言が会場に響き、静かになっていた観客も、熱気を取り戻し、歓声を上げる。

「それまで！勝者ルーク選手！決勝進出決定です！」

宣言されると同時にルークはアレキサンダーから離れ、控え室に引き返そうとするが、後ろから声を掛けられる。

「ルーク殿！もしまた…どこかで巡り会ったら…手合わせしていただけませんか！」

「いいぜ。その腕、鍛え上げておけ、アレキサンダー」

そう背中越しに返事をし、奥へと下がっていく。アレキサンダーは自らの拳を見つめ、決意をする。

「（また一から鍛え直しだな…）」

帰りながらルークは先ほどの戦い方に自ら苦笑する。あのような相手を侮辱するような戦い方は本意ではなかった。しかし、せつかく見つけたダイヤの原石。あの程度の実力で満足してしまつては困るのだ。強者を多くしておく必要がある…後に控える、人類の存亡を掛けた大戦のために…

二十分のインターバルを置き、遂に決勝の幕が上がる。観客のボルテージは最高潮だ。

「皆様、大変長らくお待たせしました。いよいよ決勝戦です！果たして栄冠を手にするのはどちらなのか？それでは、ランス選手、ルーク選手、入場してください！」

うおおおっ！と観客席から地鳴りのような歓声が沸く。が、なぜか二人とも出てこない。観客席からだんだんと不安そうな声がかかる。シュリも二人が出ないことに戸惑っていると、控え室整備の女性従業員パニイが慌てた様子で掛けてくる。

「た、大変ですシュリさん。部屋にこんな置き手紙が…」

「置き手紙？一体何が…」

シュリが手紙に目を通すと恐ろしいことが書いてあった。

・ユランちゃんと一発やってくるので棄権するぞ　がはは　byラ
ンス様・

・涼しい顔装っていたけど正直剣が折れると思わなかった　戦えま
せん　byルーク・

「これを…発表しろと言うのですか…」

「でも…いつまでもお客様を待たせるわけにも…」

絶望の表情に変わる二人。いつ決勝が始まるんだとヤジが飛び交
う。

「…エキシビションが中止になったことを、あの方にもお伝えしな
ければいけないのでここはまかせます！」

「そ、そんな！ずるいですよ、シユリさん！」

「大丈夫、パニイさん、あなたならやれるわ！じゃあ、頑張っ
て！」

「ま、待ってくださいああい」

・リーザス城　コロシウム　VIPルーム・

「とうわけで、エキシビションが中止になってしまったんです。
無理を言って解説とエキシビションを引き受けていただいたのに、
本当に申し訳ありません」

「いえ、いいんですよ。しかしお二人ともいなくなってしまうとは
…少し残念ですね…」

シユリから報告を受け、先ほどまで共に解説をしていた男はエキ

シビションは残念そうに口を開く。既にエキシビションに備えて甲冑に身を包んでいるところだった。その整った顔は「忠」の文字が入ったヘルメットに隠されていた。

「残念？リック將軍はあの二人と闘いたかったんですか？」

男の名はリック・アディスン。リーザス赤の軍の將軍にして、世界にその名が知れ渡っているリーザス最強の戦士。

「ええ…ですが、いずれまた会う機会もあるでしょう」

「え？それはどうしてでしょうか？」

「あれ程の強者です。いずれ、どこかの戦場で出会いますよ…必ず」

それは同じ強者であるからこそその勘であろうか。まだ誰も知り得ぬ事ではあるが、リックの予想は見事に的中する。これより約八ヶ月後、ランス、ルーク、リックの三人は、肩を並べ、このリーザスで魔人と死闘を繰り広げることになる。

「お客様、物を…物を投げないでくださああああい」

哀れ、パニーさん。

第7話 惹かれあう強者たち（後書き）

「人物」

リック・アデイスン

LV 38 / 70

技能 剣戦闘LV2

リーザス赤の軍将軍。将軍就任の最年少記録を更新し、就任一年目でヘルマン一個軍をたつた一人で撤退させるといふ活躍を見せ、他国からは「リーザスの赤い死神」の異名で恐れられている。人類最強クラスの剣士。

ユラン・ミラージュ

LV 14 / 27

技能 剣戦闘LV2

コロシアムのチャンピオン。軍には所属していないが、その実力は本物である。これより数ヶ月ほど前、勇者アリオス・テオマンと共にとある奴隷商人を壊滅させている。

アレキサンダー

LV 12 / 77

技能 格闘LV2

修行のため世界を回る武闘家。非凡な才能を持ち合わせており、鍛え上げれば人類最強クラスにもなり得る人物である。ルークに敗れ、一から鍛え直すことを誓う。彼も間違いなく強者、いずれまた巡り会うだろう。

パティ

リーザス城下町のアイテム屋「ちゃん」で働いている女の子。一年中下着姿。

夢色・パニイ（オリモブ）

コロシアムの整備員。不憫。名前はアリスソフト作品の「闘神都市？」より。

「技」

ランスアタック

使用者 ランス

ランスの必殺技。剣を両手持ちし、頭上から渾身の力で振り下ろす。直撃すればもちろんのこと、周りに発生する衝撃波を食らっても大ダメージを受ける。

幻夢剣

使用者 ユラン・ミラージュ

ユランの必殺技。集中力を必要とするため、連発することは出来ないが、軌道が読みにくく、躲すことは困難である。また、格上相手には威力が2倍以上になる。ヒララレモンの汁で滑るとい弱点を持つ。

装甲破壊パンチ

使用者 アレキサンダー

アレキサンドアの必殺技。拳を闘気で覆い、渾身の力で相手に放つ。その威力は相手の装甲ごと身体を破壊する程である。

第8話 牽制

・リーザス城 コロシナム外・

「で、ユランとお楽しみで俺の試合は見ていなかったと」

「がはは、当然だ。誰が男同士のむさくるしい試合など見ていられるか。抱いてるときのユランちゃんはかわいかったぞ。普段とギヤップがあつてだな……」

「聞く気はない。興味もない。」

「何だ、インポか？男として終わっているな、がはは」
「違っわ！」

決勝戦をバツクれたルークは会場を出たところでランスと落ち合った。あちらも調度ユランとの情事を済ませたところだったらしい。今後の方針を話し合うため、酒場に向かおうとしていた二人に後ろから声が掛かる。

「すみません。少しお時間をいただけますか？」

振り返り、声を掛けてきた女性を見る。白い薄手のローブを身につけた美しい緑髪の女性。高級そうな服装を見るに、王宮関係者であるうか。

「お、美人ではないか」

「私は、王女様の侍女をしているマリスといいます。先ほどのトーナメント、たいへん見事な腕前でした」

「で、その侍女さんが俺たちに何のようだ？」

「王女様が貴方様方のお力をぜひお借りしたいと言われておられます」

なんとという幸運。王女の調査が困難になってしまったと思っ
た矢先に、あちらの方からわざわざ近づいてきてくれるとは。切っ
掛けはランスが勝手に申し込んだトーナメントということを考える
と、やはりこの男、天に愛されている。

「王女様と言うからには美女なんだろうな？」

「それはもう。あれ程の美しさを兼ね備えた方を私は知りません」

「がはははは、では話を聞こう」

「そうだな、こちらにも異存はない」

「それでは案内させて頂きます。私に付いてきてください」

・リーザス城 王女の間・

「はじめまして。冒険者の方なのでご存じないかもしれませんが、
私はこの国の王女、リア・パラパラ・リーザスと言います」

そう言っ
て挨拶をしてきたのは優しそうな女性。とてもユキを冤
罪で投獄したり、誘拐に関わっているような人物には見えない。

「お初お目に掛かる。私はギルドに所属している冒険者で、名をル
ークと申します」

「そして俺様が英雄ランス様だ！王女様は可憐だな、100点だ！」

王女様相手にとんでもない挨拶をかますランスだが、それを笑顔
で許容する王女。侍女のマリスは無表情で王女の後ろに控えている。

「あなたたちの強さを見込んで一つ頼みがあります。私の大事な魅

力の指輪が妃円屋敷の悪霊に奪われてしまったのです。あなたたちには、その屋敷に行つて悪霊を退治し、指輪を取り返して貰いたいです」

「王宮の兵士ではなく、なぜ私たちに？」

「それは、この頼みは私の個人的な理由からなるものであるため、王宮の兵士を動かすことは出来ないのです」

「なるほど、そこで強くてかっこいい俺様他一名に頼みに来たわけだな！見返りは？なんなら王女様の処じ」何がいただけるのでしょうか？」

不敬罪で首が飛びかねない発言をしようとしたランスの言葉を遮り、ルークが聞き返す。ふ、と場の空気が変わった。緊迫感が増す。

「…あなたたちは、ヒカリって娘を捜しているのでしょうか？その娘に関する情報を提供しましょう」

「…どうして私たちがヒカリという娘を捜していると知っているのでしょうか？」

確かにルークはリーザ城下町で聞き込みを一週間ほど続けた。しかしそこはルークもプロ。足の付くような聞き込みはしていない。ルークの問いに、これまで無言で後ろに控えていたマリスが薄く目を開け、静かに答える。

「…我が国の情報網は完璧です」

「…なるほど、大した情報網だ。忍者でも雇っているのでしょうかね？」

「さて…そのような存在が、大陸にいるのでしょうかね…？」

牽制しあうルークとマリス。一瞬の静寂が訪れるが、ランスがそれをすぐに破る。

「わかった、引き受けよう。ヒカリの情報は頼んだぞ」

「ありがとうございます。妃円屋敷の鍵は情報屋の娘が持っていますので、屋敷に行く前に受け取っていただけます」

「了解しました。それではこれで失礼させていただきます」

一礼をし、ランスは先に部屋を後にする。続いてルークも部屋から出ようとするが、後ろから王女が問いかけてきた。

「…それと…ユキ、という娘の居所をご存じありませんか？」

「…はて、そんなことは冒険者風情ではなく、後ろの侍女に聞いた方がよいのではないでしょうか？この国の情報網は完璧のようですからね」

ルークの挑発にマリスは表情一つ変えず、リアは妖しく微笑む。誘拐に関わっている人物に見えないと思っただが、前言撤回だ。間違いない、こいつらが犯人だ。

- リーザス城下町 情報屋 -

ひとまずランスとルークは二手に分かれた。ルークは情報屋で鍵を買い、ランスは折れてしまったルークの剣を買いに行き、妃円屋敷の前で落ち合う手はずとなっている。パシリのような仕事にランスは難色を示したが、600GOLD手渡し、余った金で好きなものを買っていいと言ったら喜んで武器屋に向かった。武器を自分が買い、ランスに鍵を取りに来させるのが本来望ましい行動だろうが、ルークが情報屋に来たのは訳があった。彼女をランスに会わせるのは危険だ。情報収集をしている際に出会ったその女性は、とても美

しかつた。が、他人に心を開かない。理由はその足にある。ほとんど動かすことが出来ず、車いすでの生活を余儀なくされている。そんな彼女とランスを会わせるのは、ライオンの檻に野ウサギを入れるようなものだ。

「あ…いらつしゃい、ルークさん…」

彼女の名前は朝狗羅由真。ルークが初めてこの情報屋を訪れた際、彼女は心ない冒険者に暴行される直前にあった。ルークはその冒険者をその場で斬り捨て、由真を救っていた。そのこともあり、彼女はルークにだけは若干心を開いていた。

「事情は分かっています。こちらが鍵です」

「流石は優秀な情報屋、耳が早いな」

「いえ…私をもっと早く気がついていれば…お気づきかもしれませんが、事件の犯人は…」

「待った。それ以上はいけない。どこで聞かれているか分からないからね」

言いかける由真をルークは制止する。敵は強大、彼女を巻き込むわけにはいかない。

「…お気遣いありがとうございます…お気を付けて」

「ああ、ありがとう。事件が終わったら、また寄らせて貰うよ」

情報屋を出たルークはついでに正面のレベル屋に足を運ぶ。

「ようこそレベル屋へ。儀式を行わせて貰います」

「ああ、よろしく頼む」

水晶玉に電流が走り、レベルアップの儀式が行われる。彼女の名前はウイリス。優秀なレベル屋で、今度レベル神への昇進試験を受けるらしい。因みに彼氏持ちである。

「…駄目ですね、経験値が不足しています」

「そうか、手間を掛けた」

「ルークさんは既にかなりのレベルですからね。これだけ高い人は滅多にいないですよ」

「ありがとう、それでは邪魔をした」

「あ、ルークさん。今つて外は晴れていますか？」

「ん？快晴だが、どうかしたのか？」

「今日この後彼とデートなんです」

職務中だぞ、この野郎。お幸せに。

・リーザス城下町 妃円屋敷・

「遅かったな」

約束の時間よりかなり遅れてランスがやってきた。武器屋方面には特にこれと言って足止めを食いそうな施設はなかったはずだが。

「がはは、武器屋のミリちゃんと一発やってきたからな」

「人を待たせて置いて…まあ予想通りだが…」

やはり情報屋に向かわせなくてよかった。ますます由真が人間不信になってしまう。

「とりあえず買って来た剣を渡してくれ。流石に丸腰では、悪霊がいるらしいこの屋敷では危ないんでな」

「ほれ」

ランスが買って来た剣をルークに手渡す。ルークは受け取るが、その刀身に違和感を覚える。刃がぶるぶると震えている変わった剣。こんなもので敵が斬れるのだろうか。

「ランス：俺の記憶が正しければ、これはあの店で一番安い剣じゃないか？」

ここでルークはランスの装備が大きく変わっていることに気がつく。どれも一流の冒険者が身につけるような良質の装備である。

「さすがリーザス、中々に良い武器を売っているな。その剣とこの一式でぴったり600GOLDだったぞ。がはは」

「金返せ、この野郎っ!!」

「馬鹿言つな！貴様のものは俺様のもの、俺様のものも当然俺様のものだ!!!」

口喧嘩をしながら妃円屋敷へ入る二人。すると、今入ってきた扉が勝手に閉まり、どこからともなく悲しげな女性の声が響く。

「…ようこそ妃円屋敷へ。貴方もあの王女の部下かしら…?」

なるほど、これが悪霊か。一筋縄ではいきそうにないな。

第8話 牽制（後書き）

「人物」

リア・パラパラ・リーザス

LV 3 / 20

技能 なし

リーザス国王女。美しい容姿の裏に影を持つ。政治家としても非常に優秀であり、野心家で、既に実の両親である現国王と女王を隠居させる計画も密かに進めている。生まれてこの方人に怒られたことがない温室育ち。誘拐事件の犯人最有力候補。というか間違いない犯人。

マリス・アマリス

LV 25 / 67

技能 魔法LV2 剣戦闘LV1

リーザス国筆頭侍女。事実上リーザスの政治を司っているとさえ言われる影の実力者。戦闘能力も非常に高く、その才能はリーザス最強剣士リックに次ぐが、自ら前線に立つことはほとんどなく、常にリアの側を離れないようにしている。リアを溺愛。

ウイリス

リーザス城下町のレベル屋で働く女性。年下の彼氏とはラブラブ。本編では1の時点では名無しの女性であった。その後、現在までに6作品に登場。大出世である。

ミリー・リンクル

リーザス城下町の武器屋「PONN」の女性店員。自殺願望あり。

朝狗羅由真（オリモブ）

リーザス城下町の情報屋「NET」のオペレーター。コンピューターを使う優秀な情報屋であり、本編では名無しの女性。名前はアリスソフト作品の「大番長」より。情報戦といえば彼女。

「装備品」

えくすかりば

ランスが購入。伝説の聖なる剣の量産品。200GOLD。

ごっずアーマ

ランスが購入。特殊な金属で作られた高級な鎧。200GOLD。

めでうさの盾

ランスが購入。鏡で出来た優秀な盾。180GOLD。

ぶるぶるの剣

ルークが購入（不本意）。ぶるぶる震えて敵に打撃を与える剣。200GOLD。これでピッタリ600GOLD。因みに本編でも本当にこの値段である。

「アイテム」

魅力の指輪

リアの私物。その名前から魅力が上がると思われるが、多分ただの指輪。

第9話 妃円屋敷の幽霊

・リーザス城下町 妃円屋敷・

「とりあえず二手に分かれて探索しよう」

そうランスに提案するルーク。中々に広い屋敷、わざわざ男二人肩寄せ合って一緒に探索する理由はない。

「うむ、しっかり働けよ」

「何いきなりロビーの椅子に腰掛けてるんだ！そっちも捜すんだよ！」

洪るランスを無理矢理立たせて西にある広間や倉庫の探索に向かわせる。ルークは東にある食堂や厨房、応接間を担当する。厨房を調べているとき、一つのメモ帳を見つけた。悪霊が住み着く前、ここに勤めていた料理人が書いたものらしい。パラパラと中身を確認していくと、気になる一文を発見した。

・王女様のお食事の注意・

「この屋敷には王女が住んでいた…？」

ガタツ、と後ろから物音がし、振り返ると四匹のさげび男がこちらに迫ってきていた。ルークは目の前まで来ていた一匹に斬りつけるが、一撃で倒せない。相手が霊体系のモンスターで物理攻撃が効きにくいというのもあるが、やはり剣が悪い。厨房は狭く、戦い辛かったため、隣の応接間までひとまず移動する。部屋に入った瞬間、暖炉の奥の光る何かが目に入る。どうやら剣のようだ。手に取ろう

としたところに二匹目のさげび男が迫ってきたため、その剣で振り抜くと、さげび男が真つ二つになり消滅した。

「この剣は… 火事場泥棒みたいで申し訳ないが、使わせて貰おう」

残りの二匹も一撃の下に粉碎する。中々の業物。誰も住んでいない幽霊屋敷に置いておくのは勿体ないおばけが出てしまうと考えたルークは、とりあえず頂いておくことにする。冒険者とはこんなものだ。暖炉の奥には代わりにぶるぶるの剣を備えておく。

「何か手がかりはあったか？む、なんだその剣は？俺様に寄越せ！」
「俺の金で新しい剣買ったばかりだろうが！」

ロビーに戻ると西の探索を終えたランスがいた。いきなりたかられるルーク。

「そうだな… この屋敷に王女が住んでいた可能性が高いということくらいだな」

「ふん、使えんな。俺様は倉庫で変な映像を見たぞ。いきなり突風が吹いて、目を開けたら女の子が三角木馬に乗せられて拷問を受けていた。話しかけたらすぐに消えてしまったがな」

「拷問を受けていた女の子… この屋敷の幽霊と関係がありそうだな」
「それとこんなものも見つけたぞ」

ランスが手に持っていたのは、日記帳であった。ルークはそれを受け取り、ページを開く。日記の最後のページには、美しい字体でこう書かれていた。

・また今夜も地獄の時間が始まる。何度死のうと思ったかわからない。でも… 夜9時から11時までの間、この時間が私の地獄の時間

「これを読んで俺様はこの屋敷の謎に気がついてしまった! どうだ、分かるか?」

「はて…特に新しい情報はない気がするが?」

「ふっ…これが英雄と凡人の差だな。あれを見ろ!」

ランスが指指した先には壊れた柱時計が置いてあった。その時間は10時25分で止まっている。

「この屋敷の時計は10時25分で止まっている。このせいで彼女は死んでも拷問から抜けられないのだろう。つまり、あの時計の時間をずらせば、悪霊はきれいさっぱり消えるというわけだ。がはは!」

「そんな単純な…別にこの屋敷の時計があれ一つという訳でもあるまいに」

「言ったな! ではあの時計で解決したら報酬の分け前は8:2だぞ!」

「関係なかったら6:4な。やれやれ」

呆れるルークをよそに、ランスは時計の時間を12時25分にずらす。何も起こる訳が…と思った矢先、屋敷を覆っていた邪悪な気配がきれいさっぱり消えてしまった。更には奥の厨房の方から大きな音がする。

「なん…だと…」

「がはははは、16000GOLDゲットだ!」

ランスは意気揚々と、ルークはショックを隠しきれない様子で音のした厨房に向かう。すると、地下室への階段が新しく出来ていた。

「おやおや、厨房を散策していながらこんなものも見つけられなか

った冒険者がいるのだな。情けない奴だ、顔を見てみたい。これは分け前が9：1まで有り得るな」

もはやぐうの音も出ない。正反対のテンションで二人は階段を下りていくと、部屋の中央には悲しげな顔で少女が立っていた。その身体は青みがかって若干透けている。

「おお、あの娘だ！さっき俺様が見た拷問を受けていた娘だ」

「彼女がこの屋敷の幽霊か」

「ありがとうございます…あなたたちのお陰で私は地獄の時間から解放されました」

「聞いたか？やはり時間だ、がはは！それじゃあ魅力の指輪を返してくれるか？」

勝ち誇るランスがそう言うと、彼女の周りの光が一瞬暗くなり、彼女は黙り込んだ。

「あの指輪だけは返すことは出来ません」

「なぜ？」

「それは…」

「君を死に追いやったのが…その持ち主だからか？」

ルークの問いに静かに頷き、自分の身に起こったことを語り始める。

「私の名前はラベンダー、パリス学園の生徒です。私がパリス学園に入学したのは二年前でした。そのときの私は、あの学校の真の姿を知りませんでした。学園長のミンミン先生から優秀生徒に任命されてから一週間後、眠り薬を飲まされて…」

「やはり学園もグル…か…」

「気がつくとも王女様の目の前にいました。王女様は私をペットにすると言って…それからこの屋敷に隔離されて毎日、毎日…」

「この地下室で拷問を受けていたわけだな」

「あの王女様は残忍です。私の前にペットにしていたメイドの女性は、狂い死んでしまったから残念だったと、笑いながら話していました。私に残されたのは、自分から命を絶つことだけでした…」

「それでせめてもの復讐に指輪を奪ったというわけだな」

「はい…王女様が憎い…」

小さな唇を噛みしめながら彼女は言った。その目には涙が浮かぶ。

「こうしている間にも、また他の女の子が王女様の餌食になっていると思います」

「それが…ヒカリちゃんか…」

「わかった。俺様が王女を懲らしめてあげよう。それで、君は安心できるかい」

「!?!?…ありがとう!」

ランスは彼女に抱きつかれる。ランスの腕に、無いはずの質量が少しだけ伝わってくる。彼女はランスの胸で泣きじゃくった。それを静かに見守るルーク。

「絶対に王女様を止めてくださいね。そうしてくれなかったら、化けて出ちゃうから」

「任せろ。まあラベンダーちゃんみたいなかわいい子だったら、化けて出てくれて構わんがな。がはは!」

悪戯っぽく言う彼女に対し、ランスが笑いながらそう返すと、彼女は微笑みながら、その身体を少しずつ消していった。どうやら成仏したらしい。後には、彼女が王女から盗んだ魅力の指輪が床に落

ちているだけであつた。ランスはそれを拾い、懐へとしまう。

「随分と無茶な約束をしたな。王女を懲らしめるとは…大国リーザスを敵に回すつもりか？」

「ふん、関係ないな。悪い娘はお仕置きしてやるのがいい男の勤めだ」

「ただではすまんぞ？」

「ユキちゃんを牢から逃がした奴が何を言ってるんだかな」

ランスはルークを見る。知らないものが見れば、ランスの顔はいつも通りの笑い顔であつた。だが、ルークの見解は違う。ランスは今、戦士の顔つきになっていた。

「ルーク、とつくにお前もリーザスを敵に回す覚悟は出来ているんだろう？」

「当然だ。あの王女、野放しには出来ん」

ランスが初めてルークの名前を呼ぶ。それに気がついていたかは定かではないが、ルークも戦士の顔つきになり、ランスに笑い返す。二人は肩を並べて、屋敷から出て行った。

・リーザス城下町 パリス学園・

「シイルさん、少し話があるのだけど、ちょっといいかしら？」

シイルにクラスメイトのセラが話しかけてきた。以前ランスに報告していた、思考をシールドの魔法でガードし、考えを読み取ることが出来なかつた生徒だ。要注意人物としてマークしていたが、特

に怪しいそぶりは見せておらず、心配のしすぎかとシイルは思い始めているところであった。

「はい、なんでしょうか？」

シイルが振り向いた瞬間、腹部に衝撃が走る。

「えっ…?」

「おやすみ、シイルさん」

倒れていくシイル。だんだんと意識が遠のいていった。

「（ランスさま…ま…）」

それを抱き留めるセラ。彼女の正体は、リア王女の侍女、マリスであった。

第9話 妃円屋敷の幽霊（後書き）

「人物」

ラベンダー

妃円屋敷に出没する幽霊。かつてリア王女に度重なる拷問を受け、自ら命を絶った少女。ランスの腕の中で成仏する。

ラベンダーの前任のメイド（半オリモブ）

ラベンダーの前に拷問を受けて死んだ少女。彼女もこれより数年後、リーザス城に悪霊として出没するようになる。自分の拷問の姿を見せて兵士を怖がらせようとするが、Hな映像であるため男性兵士を喜ばせているだけである。出番はランスクエスト本編で。地下で拷問を受けていたと書いてあったから、おそらく妃円屋敷の被害者。

セラ

パリス学園に通う生徒。その正体はマリス・アマリリス23才。色々な意味で恐ろしい変装である。学園の生徒はきつと見て見ぬふりをしてくれていたのだろう。

「モンスター」

さげび男

アンデッド系。赤いもやが集まって出来たような顔だけのモンスター。物理攻撃が効きづらく、EXPを奪うというような嫌らしい攻撃も仕掛けてくる。

「技」

シールド

リーダーから思考を守る初級魔法。ある程度の魔法使いなら用心のために極力掛けるようにしておく。

「装備品」

妃円の剣

妃円屋敷に隠されていた業物の剣。盾と鎧も存在するが、二人は発見できなかった。

第10話 ここより変わるリーザスの物語

・リーザス城 城門前・

ランスが城門前までやってくる。門番に通行手形を見せて城の中に入ろうとすると、マリスが門から出てきてランスを出迎える。

「ランス様、指輪は手に入れられたみたいですね」

「耳が早いな。手に入れたのはついさっきだぞ」

「リーザスの情報網は完璧ですから。さあ、どうぞこちらへ」

「うむ、案内を頼む」

そう言っつて案内をしようとするマリスだが、その歩みを止める。

「ところで…ルーク様はどちらへ？」

「指輪を手に入れたのは知っているのに、それは知らんのだな。少し寄るところがあるから、先に俺様だけやってきたのだ」

そう、今この場にいるのはランスのみで、ルークの姿はない。ランスが説明をするとマリスは納得したようで、王女の間へ案内するため、再びランスの少し前を歩き始めた。後に付いていくランスだが、ふと違和感を覚える。

「おかしいな…来るのは二回目だが、こんな道だったか？」

「王女様の部屋までは特殊な結界が張ってあって、私の案内無しでは何者も侵入できません」

「戦士ランス様、無事に悪霊から魅力の指輪を奪い返していただけましたか？」

部屋に到着したランスに、王女はそう話しかけてきた。マリスは既に王女の後ろに控えている。ランスは先ほど拾った指輪を懐から取り出す。

「これの事か？」

「本当に取り返してくれたのですね。ではその指輪をこちらに……」

「その前に聞いておきたいことがある。屋敷にいた幽霊は、ラベンダーという美少女だった。知っているか？」

言いかけた王女の言葉をランスが遮る。王女は困惑の表情を見せて黙り込んだが、すぐに元の笑顔に戻っていった。

「知りませんわ」

「ふん、まあいい。で、ヒカリちゃんの情報はどうなった？」

「そうでした……マリス、ヒカリをここに」

王女が指示すると、マリスは一度カーテンの後ろに下がる。しばらくの後、カーテンの奥から再び姿を現すと、その横には両手を縛られた少女を連れていた。写真で見ていた少女で間違いない、彼女がヒカリだ。

「ランス様、これがあなたたちお探しのヒカリ嬢ね？」

「ふん、やはりそう言う事か。ラベンダーちゃんの話は正しかったようだな。この変態レス王女め」

ランスがそう言うと、静かに控えていたマリスがカツと目を開き、

声を荒げる。

「口を慎みなさい！リア王女に対し、何という事を！」

「残念だけどヒカリは私のかわいいペット。返すことはできないわ。知りすぎてしまったあなたたちもね…もう一人はこの場にいないみたいだけど、どうせ後からのこのことやってくることでしょう。そのときはマリス、ここまで案内して差し上げなさい。目の前でゆっくりといたぶってあげるわ」

そう言い放つ王女。それに対し、素直に返答するマリス。国の上層部にいるものは、得てしてこのような歪みを持ち合わせているものである。それは、リーザスと並び立つ二つの大国、魔法大国ゼスと軍事大国ヘルマンにも言えることである。その歪みがランスとルクの前に立ちはだかるのはもう少し先の話となる。

「がはは、本性を見せたな。ならば力づくで返して貰うまでだ。ついでにレズ王女様にもお仕置きだ！」

王女に飛びかかるうとするランスだが、急に後ろに気配を感じた。振り返ろうとしたランスの首に、細いひものようなものが巻き付く。

「なに！」

後ろから現れた黒装束の娘は、ランスの首に絡ませたひもを締め上げる。もがくランスだが、ひもは外れない。このままでは窒息死してしまう。

「お前は…あのときの公園の…（うぐっ…やばい、このままでは…）」

以前に公園でサイフを盗もうとした女忍者であると気がつく。そうこうしている間に紐は食い込みを増し、ランスの顔がだんだんと青ざめてくる。ランスの意識が無くなりかけてきたそのとき、聞き慣れた声が部屋に響いた。

「マジックミサイル！」

部屋の外から炎の塊が飛んできて、ランスの首を絞めていた女忍者を吹き飛ばし、ランスの首のひもが緩む。間一髪で事なきを得たランス。

「ランス様！大丈夫ですか！？いたいいたいなの、とんでけーっ！」

シイルがランスに駆け寄り、ヒーリングの呪文を唱えると、ランスの首に出来ていたアザが消え、息苦しさがなくなっていく。

「げほっげほっ、助けに来るならもっと早く来い、バカ」

「なぜこの娘がここに！？隣の部屋に縛っていたはず！」

そう、シイルは王女の次のペット候補兼、いざというときの人質として捕らえられていたのだ。そのシイルがなぜここに…困惑するマリス。

「理由は簡単。俺が助け出しただけだ」

シイルの後ろから声がする。この場にいなかったもう一人の戦士、ルークだ。

「なぜあなたがここに…」

「以前シイルちゃんが優秀生徒になったと聞いていたのを思い出し

てな。ラベンダーも任命された後に誘拐されたと言っていたから様子を見に行ってみれば、既に誘拐された後。流石に焦ったぞ。まあミンミン学園長を拷問したら、あんたが連れて行ったことをすぐに白状したかな。それでこうして助けに来たわけだ。わかったかい？完璧な情報網を持つリーザスの侍女さん」

「あの学園長…処刑ね」

王女が冷たく言い放つ。後ろに控えていたマリスは、今は王女を守るように前に立ち、ルークに対し、再び問う。

「なるほど…ですが一番聞きたいのはそこではありません。なぜ結界を突破できたのですか！？あなたは魔法使いではないでしょうに！」

なるほど、とルークはマリスの疑問に頷く。確かに普通の戦士であつたなら、あの高度な結界を突破することは不可能だつただろう。しかし、今この場にいる男は…

「誤算だつたな。あの程度の結界、俺には何の意味も持たんぞ」

「くっ…」

結局なぜ結界が破れたのかは分からないマリスだが、現実問題としてルークが今ここにいる。状況の悪さから、額に汗が流れる。その状況を察してか、女忍者がルークとランスの前に立ちふさがる。

「リア様、マリス様、ここはお任せを」

その言葉を受け、王女とマリスは部屋の奥に下がり床を持ち上げる。そこには逃亡用の隠し階段があつた。地下へと逃げる二人。

「シイル、あそこで倒れているヒカリちゃんの治療をしておけ。ルーク、この場は任せた。俺様は王女を追う。あの王女に説教してやらんとな！」

真面目な顔つきで指示を出すランス。その表情はお仕置きと称して飛びかかるうとしていたときの顔とは違う。その顔を見てルークはそれに答える。

「了解だ。あの王女に世間の厳しさを教えてやれ！」
「簡単に行かせると思わないですよ！」

ランスに対して手裏剣を投げつける女忍者。が、一瞬でランスと女忍者の間に割り込んだルークに、全てはたき落とされる。

「行け！ランス！」
「がはは、俺様に任せておけ！」

そう言い、王女たちを追って地下への階段を下りていくランス。それを追おうとする女忍者だが、ルークに阻まれる。先ほどまでと立場が逆転した。

「さて…ランスが王女の説教係なら、俺はあんたに説教することに
するかな」

「説教ですって！？ふざけたことを…死んで貰うわ！」

女忍者は言うど、手裏剣を放つ。それを全てはたき落とすが、目の前から女忍者が消えていた。いや、消えたのではない、飛んだのだ。両手にくないを持ち、空中からルークに迫る。

「死ね！」

「そんな無防備に空中に飛び上がるとは…」

ルークはそう言いながら腰を沈め構える。そして素早く剣を左下から右上に振り切る。発生した真空波が女忍者に直撃する。

「真空斬、手加減版」

「ぐえっ！」

女の子が出してはいけないような声を出して、女忍者が吹き飛ばす壁に激突し、一瞬意識が飛びかけるが、頭を振り立ち上がる。が、それを阻むように首に刃が突きつけられる。

「戦い方がまるで素人だ…隠密要員であって、戦闘は場数を踏んでいないようだな」

「くっ…バカにして…」

懐から手裏剣を取り出そうとするが、一瞬殺気を込められ、「ひっ…」と声を出して手裏剣を取りこぼす。やはり場数はあまり踏んでいないようだ。

「少し…聞きたいことがある」

「何よ…拷問されたって、リア様のことは話したりしないわ」

そう言い放つ女忍者に対し、ルークは予想外の行動に出る。首に突きつけていた剣を下げたのだ。困惑する女忍者。

「王女の事が聞きたいわけではない。あなたの意見を聞きたい」

「私の…？」

「ああ…君は、王女が行っていた今回の犯罪、本当に正しいと思っていたのか？」

「…っ！」

ルークが尋ねた内容に驚愕し、目を開かせる。一瞬言いよどむが、すぐに返事が返ってくる。

「私の意見などないわ。忠臣として、命じられたことに答えるのは当ぜ…」

「それは真の忠臣ではない!！」

言いかけた女忍者の声を、ルークが遮る。先ほどまでの話し方と違い、その一言一言に、迫力が増す。

「忠臣として等と逃げるのではなく、君自身の意見を言ってくれ」

「…リア様が行っていたことに…間違いなどは…」

「罪もない民を自分の快樂だけのために死なせることがか？それが本当に上に立つ者の行動だとも？」

「…」

ルークの問いかけに女忍者は答えることが出来ない。その拳が強く握られたのは、何に対しての悔しさからだったのであるうか。

「先ほど忠臣と言ったな。真の忠臣であるのならば、主がその道を違えたら、横つ面引つ叩いてでも道を正すものじゃないのか？」

「それでも…自分の意志を殺しても主の命に従うのが…忍びとしての役目です…」

自分の意志を殺してでもと言ったのを聞き逃すルークではない。先ほどまでの迫力のある喋り方から一転、穏やかな喋り方になる。

「確かに…忍びとしてはそれが正しいのかもしれない。だが、忠臣

として…人間として…そして、一人の女の子として、その考えは絶対に間違っている」

自然と涙がこぼれる。情けない、恥ずかしい。涙を止めようとするが、止めることが出来ない。

「私だって…あんなことしたくなかった…でも…恩義に報いるために…」

嗚咽混じりに答える。やはり、彼女の行動は本意ではなかったらしい。ルークがそれを感じたのは以前の公園での出来事。あのように姿を現し、手を引けと忠告するのがそもそもおかしいのだ。殺すので忠告などせずにさっさと殺せばいい。彼女は王女を止めることが出来なかった。だからこそ、巻き込まれて犠牲になる様な人を減らしたかったのだ。彼女もまた、足掻いていたのだ。ルークは女忍者の頭に手を置き、泣き止むまでしばらく待つてやった。シルも気絶しているヒカリを介抱しながら、静かにそれを見守る。少しの後、泣き止んだ彼女は、恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「すみません…恥ずかしいところを…」

「いや、気にしてないさ。恩義っていうのを聞いてもいいかな？」

「命の恩人なんです。祖国のJAPANに帰れず、大陸に行くところもなく彷徨っていた私を、リア様が拾ってくださったんです」

「そうか…」

それは、ただの気まぐれだったのかもしれない。あるいは、大陸には珍しい忍者を貴重に思ったのかもしれない。しかし、あの王女が彼女の命を救った、これは一つの真実なのである。なればこそ、彼女は王女に仕えたのだ。たとえ自分の意志を殺してでも、その恩義に報いるために。

「因みに…祖国にはどうして戻れないんだ？捨て駒扱いで切り捨てられたとか、何かの秘密を握ってしまつて命を狙われているとかか？」

ぴくつ、と女忍者の動きが止まる。はて、何か変なことを聞いてしまっただろうか、と考えるルークに対し、言いにくそうに彼女が答える。

「…ゆう…でまい…つて…」

「ん？何か言いにくいことだったか？それだったら無理しなくても…」
「…研修旅行で迷子になつて…勘違いで抜け忍扱いされて…帰れなくて…」

屋内なのに冷たい風が吹く。女忍者の顔は、先ほどよりも更に赤みを増している。

「んっ…それは…災難っ…だったな…くっ…」

「笑つた！今笑いましたよね！！」

「いや…全然笑つてなんかいないぞ…ぷっ…くっ…」

「隠せてない！全然隠せてないですから！だから言いたくなかつたのにい！！」

今にも泣き出しそうな顔をしてルークに詰め寄る。ルークは必死に堪えるが、笑いが抑えられない。それを見かねて、シイルがフオロ―に入る。

「ルークさん、笑っちゃかわいそうですよ…ふふっ…あははっ！！」
「うわああああん！！！！」

まったくもってフオローになっていなかった。

・リーザス城 地下通路・

ルークは女忍者を引き連れてリア王女が逃げた通路を歩いていた。途中で気絶していたマリスを拾う。ランスの前に立ちふさがり、返り討ちにあつたのだらう。目覚めたマリスに、先ほど女忍者にしたのと同じような事を言った。

「…返す言葉もございません。リア様のためを常に考え、叱らずにいたことが…甘やかしてしまっていたのかもしれない…」

そうルークに答えるマリス。だが、話を聞いているとその役目をマリスに託すのは酷であつたかもしれない。リア王女とマリスの年の差は7つで、王女が幼い頃から仕えていたため、どうしても妹を見るような目になってしまっていたのだらう。本来、叱るのは親の役目だが、リアの両親は幼い頃から優秀であつた娘を恐れ、遠ざけてしまっていたらしい。彼女のしたことは決して許されることではないが、彼女が歪んでしまった原因を考えると、彼女もまた被害者なのかもしれない。

「まあ、今頃ランスがしつかりと叱っていてくれるだろう」

「大丈夫なんですか？正直…あの男と二人きりにするのは危ない気が…」

問いかける女忍者に笑いながら答える。

「まあ、大丈夫だろう。別れ際にかなりまじめな顔をしていたからな。ランスも許せなかったんだろう。まだ出会ってから一月も立っていないが分かる。あいつは…決めるときは決める男さ」

言っていると、目の前に光が差し込む。長い地下通路を抜けた先には泉があった。そのほとりの方で声がする。三人はそちらに向かって走り出した。

「ああっ…もつと、もつと気持ちよくして!」

「がははは、ではもつとお仕置きしてやろう!」

そこにはお仕置きと称して王女とやっているランスがいた。

「はふう…」

マリスが倒れる。目の前の現実に打ちひしがれたのだろう。

「って、やっぱり全然駄目じゃない!何があいつ決めるときは決める、ですか!」

「キめていたじゃないか…それはもう、バツチリと…」

「何上手いこといった風な顔してるんですか!」

まさか本当に王女に手を出すとは…あの真面目な顔はなんだったんだろうか。ランスにとって王女とHすることは、大まじめな顔をするに価する出来事だったてことか。

「がはははは!どうだ、もう悪いことはしないな?」

「もう悪いことしません、庶民もいじめません。だからもつとおお

!」

「まあ…あれはあれで改心したってことでいいんじゃないか?」

「よくなああああいー！」

・数日後　アイスの街　ランス宅・

無事に仕事を終了し、報酬を受け取ったランスはGOLDで敷き詰めた風呂に入っていた。ルークとの分け前は宣言通り8：2にし、計26000GOLDを手にしたランスは満足そうだった。

「がはははは！大もうけだ！だがGOLD風呂は痛いだけだな、もうやめておこう。」

「よかったですね、ランス様」

その後、王女が許していたので怒るマリスと女忍者を尻目にしっかりと帰路についたランス。ルークとは今朝別れた。俺様が女を抱く邪魔をしないし、色目も使わん。俺様程じゃないまでもそここの腕はある。まあいても邪魔にはならんな、というのがランスのルークに対する評価であった。

「そつだ、一応奴隷として少しは活躍したからな。お前にも服を買ってやるっ」

「本当ですか？私、外出用のお洋服が欲しいです」

「そつだな、すけすけのネグリジエか超ミニスカートを買ってやるっ」

「…はい、ありがとうございます…：そういうえば、ランス様宛に手紙が届いてましたよ」

「ん？俺様宛のファンレターかラブレターか？」

「お城からの手紙みたいですね」

ランスはシイルから受け取った封筒を開き、中の手紙を読む。

・親愛なるランス様。我が王家には、初めて交渉した者と結婚しなくてはならないという

代々伝わる伝統があります。それに従ってあなたは責任をとって私と結婚して頂きます。

ではこれより、すぐにあなたの所に嫁がせて頂きます 王女リア・パラパラ・リーザス・

「シイル、逃げるぞ」

「へ？」

結婚などする気のないランスは逃げようとするが、時既に遅く、家の扉が大きくノックされる。

「ダーリン！！開けてー！！リアが参りました！！」

声が聞こえた瞬間に、ランスはシイルを連れて一目散に逃げ出していた。

「シイル！ついてこい！」

「はい！ランス様、どこへでも！」

・アイスの街近辺 街道・

ルークは一人その道を歩いていた。約束の報酬をランスに渡した後、次のギルド仕事を受け、休む間もなくアイスの街から旅立っていた。歩きながら、ルークは思う。面白い奴であったと。またどこかで巡り会いたいものだ。すると、遠くから声が聞こえてくる。

ルークが歩いている街道の向こう、今考えていた男が、パートナーを連れて王女と侍女から全力で逃げている。最後まで退屈させない奴だ。

「やれやれ…また会いたいとは思ったが、早すぎるだろう…」

そう思うルークに、こちらに気がついた女忍者が道を外れて近づいてくる。

「どうした？王女様から離れていいのか？」

「すぐに戻りますから。ルークさんに…一言お礼を言いたくて」

「礼などいらんさ。今後、リーザスがどのような道程を辿るか楽しみだよ。道を違えそうになったら…」

「私が戻します。今はまだ無理だけど…いつか、真の忠臣と呼ばれるように…」

「上出来だ」

ふと二人が笑いあう。ランスたちが少し離れてしまったので追いかける一礼し、追いかけてよとする女忍者をルークは呼び止める。振り返る彼女に、もっと早く聞いておくべきだった事を問いかける。

「名前、まだ聞いてなかったな」

「かなみ、見当かなみです」

満開の笑顔を向けてくる。これは、良い気分で次の仕事に移れそうだ。青天の下、ルークはそんなことを考えていた。

第10話 こじより変わるリーザスの物語（後書き）

「人物」

見当かなみ

LV 14 / 40

技能 忍者LV1

リーザス王女リア直属の忍者。不本意にも抜け忍になってしまっていたところをリアに拾われ、恩義に報いるため諜報から暗殺まで忠実にこなす。ルークの言葉を受け、少しずつだがリアに自分の意見を言うようになる。意外なことに、関係は以前よりも良好。本編では一応1のラスボス。一応とか言うな。

ヒカリ・ミ・ブラン

ブラン家の次女。リアに誘拐されていたが、実はそのときに色々目覚めてしまい、リアのことが大好きになってしまう。ランスとルークのことは、気を失っていたのであまり覚えていない。ランス1のサブタイトル「光を求めて」が、彼女の名前と掛かっていることはファンの間では有名である。

ウエンズディング・リーザス

リーザス国国王にしてリアの父。実権は娘に握られている。婿養子であり、結婚前の名前を名乗るなど少し頭がおかしくなり始めている。

カルピス・パラパラ・リーザス

リーザス国女王にしてリアの母。頭の良すぎた娘をあまり良く思っており、知らず知らずの内に遠ざけてしまっていた。

ミンミン

パリス学園の学園長。裏でリアと繋がっており、美少女を定期的に提供していた。事件解決後、全て自分一人で犯行を行ったという遺書と共に遺体で見られる。マリスが一晩でやってくれました。

「技能」

忍者

忍者としての才能。隠密としての素質や、強力な忍術の使用に關わる。

「技」

ヒーリング

傷を癒す初級神魔法。暖かい光で包み込み、傷だけでなく体力も回復させる。

マジックミサイル

炎の塊をぶつける初級魔法。炎の矢よりも威力は低い、塊であるため敵に命中しやすい。本編では炎の矢の旧名であり同一魔法。後にダイジェスト版が出た際、名前が炎の矢に統一され、その存在が抹消される。本作では別魔法扱い。これは、筆者がマジックミサイルでランスの窮地をシイルが救うシーンが1屈指の名シーンだと思っており、名前を変えたくなかったためである。

第11話 反逆の少女たち

GI1009

- 自由都市カスタム -

話は少し前にさかのぼる。自由都市地帯のほぼ中央に位置する町、カスタム。この年、とある老魔法使いが魔法塾を開塾する。男の名はラギシス。人当たりが良く、町の住人からの信頼も厚かった。これを受け、カスタムの町では一つの事項を決定する。それは、町を守る魔法使いを育てるため、三人の娘をラギシスに弟子入りさせるというものだ。

若い娘たちにそのような重荷を背負わせることに初めは疑問の声も上がったが、三人の娘は彼に良くなつき、魔法の修行も自ら進んで行った。三年後のGP1012年にはもう一人娘が加わるが、こちらもすぐにラギシスに懐いた。四人の娘と一人の老魔法使い。師匠と弟子、というよりは親子のようだな、と住人の一人が言った。何を今更、もう彼女たちの育ての親だよ、ラギシスさんは、と聞いていた住人が答えた。

「うわあああ、きれいーい」

本日の授業は草原で行われていた。ラギシスが腕を振るうと、その腕から花びらが舞う。入塾したばかりの紫色の髪の少女は目を輝かせる。

「本当…きれいね」

「そんなのより攻撃魔法を教えて欲しいわ」

「もっ…」

赤い髪の娘が言うと、緑色の髪の娘が別の魔法が良いと言う。隣にいた青い髪の娘がとがめるが、ラギシスは優しく微笑む。本当に不満に思っているわけではないのを知っているからだ。そう文句を言った娘も、舞い踊る花びらを見ながら優しく微笑んでいたからだ。花びらが彼女たちを包むように回り始める。その美しい光景に、娘たちの目の輝きが更に増す。

「ふうん…目隠しくらいには使えそうね。今日の授業はやっぱりこれでいいわ」

「もっ…素直じゃないんだから」

あはは、と笑い声が草原に響く。言われた娘はふん、と拗ねた風な顔を見せるが、耐えきれなかったのかすぐに吹き出してしまう。平和な光景が、そこには広がっていた。

そして…月日は流れる…

LP0001 10月

- 自由都市カスタム -

「ラギシス！」

ラギシスの前には美しく成長した娘たちが立っていた。しかし、様子がおかしい。ある娘は剣先をラギシスに向け、ある娘は魔法を

使う構えを取る。

「どうしてもやるのか…」

悲しげに呟くラギシス。返ってきたのは言葉ではなく、魔法。紫の髪の娘が、小型の幻獣をラギシスに放った。

「…!!」

それが始まりの合図であった。師であるラギシスだが、既に老体の身。それにリーダー格であった緑髪の娘は、既にラギシスをも凌駕した力を持ち合わせている。更に、四対一。必死に抗戦するが、徐々に追い詰められていくラギシス。青い髪の娘が水の魔法を放つ。防御魔法でそれを防ぐと、剣を持った赤髪の娘がラギシスに迫った。

「くっ…」

ギリギリで剣を躲し、距離を置くラギシス。が、すぐに気がつく。誘導させられた、と。他の三人が左右に分かれ、道を開く。今、ラギシスと一直線上に対峙するのは、リーダー格の娘。既に呪文詠唱を終え、放つ直前だ。ラギシスに逃げ場はない。

「死ねええええええ!!!!」

「っ!!」

ラギシスを光が包む。結界を張るが防ぎきれない。吹き飛ばされ、動けなくなるラギシス。柱が崩れ、瓦礫がラギシスの身体に落ちていく。薄れゆく意識の中でラギシスは思った。

「（指…輪…）」

ラギシスの身体が瓦礫に埋もれていく。それとほぼ同時に、空中に魔方陣が現れ、町全体を包む。娘たちの誰かが使ったのであるのか。恐ろしい魔力で魔方陣はカスタムの町を地下に陥没させていった。

住人は言う。娘たちが狂った。育ての親である師匠を殺し、地上に出られないよう封印を掛けた。あの娘たちは悪魔だ。誰か…この町を救ってくれ。四人の娘たちの指には、それぞれ違った色の指輪が妖しく光っていた。

- アイスの町 キースギルド -

男は数多くある依頼書の中から、その依頼書に目を付けた。

- 反逆の少女たち、親代わりでもあった師匠を殺し、町を封印する。彼女たちは今こう呼ばれている、カスタムの四魔女、と。 -

「なんだ？その仕事受けるのか？こつちとしちゃーありがてーが、報酬はそんなに高くないし、割にあった仕事じゃねーぞ？」

「割に合わない仕事はいつものことさ。この四魔女というのが少し気になつてね…」

「なんだ？遂にお前にも春が来たってか？」

下品な笑みを浮かべるギルドマスターのキースに対し、そんなんじゃないさ、と返す。

「まあ、そこまでお前が興味持ったって事は、受けるんだろ？」

「ああ、この依頼、受けさせて貰う」

「あいよっ！頼んだぜ、ルーク！」

第12話 地下に沈んだ町

- 荒野 -

砂埃舞う荒野をルークは歩いてきた。向かうはカスタムの町。アイスの町からそう遠くない町だが、ルークは迷ってしまっていた。

「…おかしいな、地図によるともうそろそろのはずなんだが…」

というのも、ルークはカスタムの町をほとんど訪れたことがない理由としては二つ。リーザスやポルトガルといった、仕事で訪れることの多い大都市に向かう際の通り道からは少し外れてしまっているというのが一つ。もう一つは、いままでギルドに依頼されるような事件は起こらない平和な町であったため、訪れる機会がなかったのだ。そのような平和な町での異変。一体何が起きているのだろうか。

「訪れるのは約20年ぶり、あの時とはどれほど変わっているのかね…」

前述の通り、ルークはこの町を訪れたことがないわけではない。かつて、たった一度だけこの町に来たことがある。18年前、7つの時だっただろうか。ルークはかつての光景を思い出す。

GI0998 冬

- カスタムの町 -

身なりはボロボロ、全身に擦り傷を付けた二人の子供が町の前に立っていた。声を掛けようとする者はいない。その目だ。後ろに連れられている少女は普通だが、もう一人の男児の目が普通ではない。濁っている。まるで、この世全てを恨んでいるかのように。

「どうしたんだ？何かあったのか？」

そんな中、一人の男が声を掛ける。この町に最近移り住んできた魔法使いだ。それが、ルークとこの男の出会いであった。

LP0001 10月

荒野

ふ、と自嘲気味に笑うルーク。懐かしい思い出でもあり、同時に出来ることならば思い出さたくはない過去である。そう、あの時はまだ彼女が隣にいたのだ。と。そんなことを思っていると、目の前に洞窟の入り口が見えてくる。そこには一人の少女が立っていた。こちらに微笑んで近づいてくる少女。

「お待ちしておりました。ルーク様でいらっしゃいますね？」

「そうだが、君は？」

少女は顔をパツと輝かせると、深々とお辞儀をした。

「ようこそおいでくださいました、カスタムの町へ。私は町長の娘、チサと言います」

「町……どこにあるんだ？」

「さあ、どうぞこちらへ。父がお待ちしています」

娘はそう言うと、ルークを案内するように洞窟の中へと入っていく。

「まさか…洞窟の中か…？」

・カスタムの町・

洞窟をしばらく進むと、そこには地下の空洞の中に町があった。

「地下に町が丸々入っているのか！？以前来たときは普通の町だったが…封印というのはこういうことだったのか…」

「以前に町を訪れたことがあるのですか？すいません、町長の娘ともあるうものが、覚えていなくて…」

申し訳なさそうに頭を下げるチサに対し、こちらもすまなそうに返すルーク。

「いや、謝らなくて良い。多分君が生まれる前の話だ。20年くらい前だからね」

「そうだったんですか。…ルーク様から見て、今の町はどのように見えますか？」

周りを見回す。だいぶ過去の話なので記憶も曖昧だが、以前はもっと住人の元気な声が飛び交う町だったはず。それに、所々破壊された家が目に入ってくる。

「正直…以前の姿を知っている者からすれば…信じられない光景だ

な」

「それも全て…彼女たちが…」

悲しそうな、それでいて悔しそうな顔をする。そんな話をしている内に、町長の家に着き、中に案内された

「これはこれは、よくぞ来てくださいました。身体が少し弱いので、床に入ったままで失礼します。私は町長のガイゼル・ゴードといいます」

町長を見るルーク。以前の町長とは違うな。あちらもルークのことを覚えていない。無理もない、18年も前の話だ。それに、この町に滞在していた期間も短かった。

「あなたはキースギルドに所属する冒険者の中でも、特に優秀な戦士だと聞いています。どうか、この町をお救いください」

キースめ、大げさに言いやがったな、とルークは思う。多くの人々を救った優秀な冒険者、という点では、ラーク&ノアコンビの方がよっぽど当てはまる。というのも、ルークの仕事の請負方には癖があるからだ。事件の規模や報酬ではなく、強そうな奴に会えるか、その依頼者との繋がりが必要な意味を持ちそうかという事を最も重要視している。そのため、時には初級冒険者が請け負うようなお使用のような依頼もこなす。以前ラークに苦言を呈されたが、先の大戦を見据えているルークにとって、この方針を変えるつもりはなかった。

「まあ、任せておいてくれ。受けた依頼はきっちりこなすさ」

「それは頼もしい！それでは町の状況を説明させていただきます。チサ、頼んだ」

ガイゼルがそう言うと、チサが一步前に出てくる。

「はい、ルーク様もご存じの通り、この町は元々地上にありました。ですが、少し前に魔法使いたちの戦闘がこの町に起こりました。一人の魔法使いの名前をラギシス。この町で魔法塾を開いていた方です。彼は私たちを守って戦ってくださいました。悪いのは四人の魔女たち。ラギシスの塾生であった彼女たちは、突如反逆を起こしました。ラギシスの持っていた指輪を奪い、ラギシスを殺した彼女たちは、指輪の力でこの町を地下へと沈め、町を封印してしまいました」

「町一つを地下へ沈めたというのか…その娘たちが…」

にわかには信じがたいことである。魔法大国のゼスでも、たった四人でそんなことを出来る者は限られてくるだろう。

「きっと、指輪の力で彼女たちの魔力を増幅させているんです。そして彼女たちは地下に迷宮を築くと、私たちの生活を脅かすようになりまし。数々のモンスターが町へ進入してきたり、若い女性が誘拐されたり…」

「彼女たちを倒そうとはしなかったのか？」

「いいえ、青年団が四人の魔女を倒そうと迷宮に潜っていきまし。が…まだ誰も帰ってきません…」

そう、肩を落とすチサ。

「酷な話だが…もう生きてはいないだろうな」

「あつ…か、彼女たちの目的は分かりませんが、お願いです。私たちをお救いください！」

「私からもお願いします。彼女たちを倒して、この町を以前のよう

な平和な町にしてください」

ゴード親子がルークに対し懇願する。ルークは右拳を少し前に出し、力強く握ると、口を開いた。

「任せておけ。すぐにこの町を元の平和な町に戻してやる」

「ありがとうございます！ルーク様！」

ルークの手をチサの手が包み込む。その光景にごほん、とガイゼルが咳払いをすると、恥ずかしそうにチサが手をすぐに下げた。

「…娘はやらんぞ。で、報酬のことだが…」

「安心してください。どこかの冒険者と違って、節操なしではないんで…」

ルークは三ヶ月ほど前、共に仕事をした男の顔を頭に浮かべる。

あいつだったら、報酬はチサちゃんが良いとか言い出すだろうな…

「うむ、それならいい。で、報酬なのだが一応20000GOLD用意しています。ただ、依頼した冒険者は一人ではないため、早い者勝ちになってはしまいますが…」

ふむ、20000GOLDか。事件の規模を考えると割の良い仕事とは言えない。町を沈める程の魔力を持った魔法使いと、命を掛けて戦わねばならないのだ。前回の誘拐事件の割が良いすぎたのもあるが、（まあ結果としてあれもリーザス王家が絡んでいたから、割の良い仕事では無かったが）それにしても安すぎる。報酬の額を気にするルークではないが、この案件は個人の依頼ではなく、町としての大規模な依頼。あまり安くされると、キースギルドの名が汚されると同時に、カスタムの町の評判も落ちてしまうのだ。

「少し安すぎますね。復興のための資金を貯めなければならぬのは分かりますが、30000GOLDが最低限のラインですね。そうでないと、ウチのギルドだけでなく、カスタムの町の評判も落ちます。それに、その値段では請け負ってくれる冒険者が極端に減るでしょうね。早く解決させた方が、結果として出費を安く抑えられると思いますよ」

「なるほど…申し訳ありません。今までギルドに依頼などしたことが無かったものですから、相場が分からなくて。それでは30000GOLDとさせていただきます」

「了解だ。それでは、正式に受けさせて貰う」

そう言い、部屋を出て行くルーク。

「…なんて頼もしく勇ましいお方。あの方ならきつと大丈夫ですね、お父様」

「うむ、彼になら任せても良さそうだな…だが、娘はやらんぞ」

「…あつ、お父様。もうすぐ次の冒険者様が到着する時間なので、町の入り口まで迎えに行つてきますね」

ルークは町の中を見て回っていた。時間を掛けて町を一周するが、中々に入り組んだ町であると同時に、モンスターに荒らされてしまっているため、店の場所などを思えることが難しかった。と、チサが歩いているのが目に入る。

「ああ、チサちゃん、ちょっといいかな」

「あら？どうされましたか、ルーク様」

「ちょっと町の地図をいただけませんか？少し覚えるのに時間が掛かりそうだ」

「それでしたら、家にいくつか予備がありますのでついて来てください」

チサの後をついて行き町長の家まで引き返すルーク。道中無言なものも気まずいので、世間話感覚でチサに話しかける。

「そういえば、チサちゃんは買い物か何かかな？」

「はい、ルーク様の次にもう一組冒険者様がお見えになったんですけど、お茶菓子を切らしてしまいました」

そう言い、家の中へ入る二人。すると、町長の部屋の方から大声が聞こえる。これがもう一組の冒険者の声だろうか。それにしても、どこかで聞き覚えのある声な気が…

「がはははは、安すぎる！！報酬は50000GOLDか、チサちゃんの処女だ！！！そうでない俺様は降りるぞ」

「駄目だ駄目だ駄目だー！チサには指一本触れさせんぞー！……」

間違いない、あいつだ。

第12話 地下に沈んだ町（後書き）

「人物」

ガイゼル・ゴード

カスタムの町の町長。病に倒れながらも、町再建のために奔走する。親バカである。

チサ・ゴード

カスタム町長の娘。父親思いの優しい少女である。50000G OLDに吹っかけた冒険者に対しても、頼もしく勇敢で彼なら大丈夫とのたまう辺り、あまり深く物事を考えていないと思われる。

「都市」

リーザス王国

大陸東北部に位置する、人口約5000万人の豊かな国。ヘルマン帝国に反乱を起こしたグロス・リーザスがG I O 5 3 4年に建国以後、長きに渡りヘルマンとの争いが続くこととなる。土地が豊かで食料に恵まれ、商工業も盛んで暮らしは豊か。魔人界とも隣接していないため、基本的には平和な国である。

アイスの町

自由都市。ランスが生活している町であり、キースギルドの他に、冒険者のお供として有名な回復薬「世色癌」で薬市場の約50%を占めている世界有数の製薬会社「ハピネス製薬」などがある。

ジオの町

自由都市。「ジーク・ジオ」を合い言葉としており、経済力は高い町である。

第13話 トマト爆誕

- カスタムの町 酒場 -

「まさかこんなに早く再会する事になるとはな…稼いだからしばらく働かないんじゃないかなかったのか？」

ルークは自分同様、依頼を受けるためカスタムまで来たランスとシイルと共に、町の酒場で食事を取っていた。当然のようにルークの奢りになってしまっている。テーブルの上には注文した料理が並んでいる。口を付けたうるろーんが余りにもまずかったので、ビールで口直しをしながらルークが尋ねる。

「ふん、どうせ再会するならヒカリちゃんとかの方が良かったがな。ん？金か？あんなもんとつくに使い切ったわ」

言い放つランス。少し贅沢な生活をしていても、しばらくは大丈夫なレベルの大金があったはずなのだが。シイルの方を見ると、食べていたチョコレートパフェをテーブルに置き、申し訳なさそうに頷く。本当に使い切ったのか…

「まあ50000GOLDで交渉成立したから、この仕事が終わったら、またしばらく仕事する気はないがな」

上機嫌に出来たてのへんでろばを食べるランス。そう、先ほどガイズルに対する値上げ交渉は見事に成功し、報酬は50000GOLDへと跳ね上がった。娘を守るための苦渋の決断だったのだらう。

「そこで、提案なんだが。どうだ、またこの間みたいの手を組まないか？」

「ん？まあ…分け前次第だな…」

ルークの提案に珍しく応じる気配を見せるランス。理由としては、ルークの実力を知っており、同時に自分が女を襲う邪魔をしない男というのが一つ。もう一つは四魔女が美少女であった場合、やる気満々なため、ランスはさっさと事件を解決させたいのだ。

「そうだな…俺は10000GOLD貰えれば十分だな」

「むう…まあいいだろう。がはは、俺様のためにしっかり働けよ」

ルークに10000GOLD支払っても、当初提示された報酬よりも多いのだ。それに、ルークと一緒にいると今夜の食事のように、所々で奢らせることが出来る。これ幸いと手を組むことにするランス。

「はい、ご注文のうはあんお待たせ」

店の自称看板娘であるエレナが追加で頼んだ料理を持ってくる。と同時に、シルルの頭を撫で始める。

「…おい、人の奴隷に何やってるんだ？」

「わつと、ゴメンなさい。私って、人の頭を撫でるのが好き…で…ふああっつ！何これえ！」

頭を撫でていたエレナが突如騒ぎ出す。

「な、なに、この頭…あつたかくて…優しくて…心が引きずり込まれていく…正にゴッドオブヘアー…」

「あ…あの…あんまり中で動かさないでください…」
「ええい、さっさと離れろ！」

ランスに引きはがされるエレナ。その顔は恍惚の表情を浮かべている。特徴的なもこもこヘアーだが、あの中はそんなにも気持ちのよいものなのか…？

「…おい、ルーク。何を人の奴隷の頭に手を伸ばそうとしているんだ？」

「…そんな事してないですよ？」

「喋り方が普段と違うし、目を反らすんじゃない！」

ランスが暴れ始めて酒場の中が騒然となる。シイルは周りに平謝り。こうして夜が更けていった。

- 翌日 カスタムの町 アイテム屋 -

迷宮に挑むことになるため、それに備えてアイテム屋に寄るのは冒険者の常識。ということで三人はアイテム屋にやってきていた。

「いらっしやいませですねー？ここはアイテム屋ですかー？」

「…それを店主のあんたが聞いてどうするんだ？」

店に入ると整った容姿の店員がそんなことを行ってきた。頭の弱い娘なのだろうか？ミミックと思われるモンスターが檻に入れられている。どうやらペットのようだ。

「おう、中々にグッドな娘さんだな。名前は何という？」

トマトの頭に二人のチョップが炸裂した。

「しくしく…何を求めになられますか」

「自業自得だな、さすがに。ん…：棚がすかすかだな」

「町がこんな状況なので、物資があまり届かないんですよ。特に剣が品薄なんですよね？」

「こつちに振るんじゃない。とりあえずこの剣と鎧を貰うかな。ルーク払っておけよ」

「いつから俺はお前のサイフになったんだ！というか、この間俺の金で勝手に買った装備はどうした？」

リーザスで買っていた装備の方が、今選んだ装備より良いものだと思うのだが、とルークは思う。

「ああ、盾は装備してても戦いにくいんであの後すぐに売った。剣と鎧はもうちょい後に生活費の足しにするため売った」

「人の金で買ったものを…」

「すみません、すみません…」

シイルが謝る横で、ルークも店内を物色した。剣は妃円の剣がまだまだ刃こぼれを起こしていないので、鎧と世色癌を購入。

「ん？シイルちゃんも遠慮しないで買って良いんだぞ？」

「いえ…申し訳ないですし…」

「主人と違って謙虚だな、シイルちゃんは。店主、そのローブもついでに買わせて貰うぞ」

「はい、お優しいんですねー？」

「すみません、ありがとうございます」

「あ、こら！勝手に俺様の奴隷に服を着せるんじゃない」

「ダンジョン潜るときくらいは羽織るくらいいいだろ。流石に危な

いぞ…って、何勝手に世色癌そんな大量に買ってたんだ！」

「全部で4000GOLDになりますー？」

「高っ！ランスお前、何買いやがった！！！」

「がはははは、高そうな鎧とは思ってたが、中々の値段になったな」

渋々払うルーク。流石に分け前をもう少し上げて貰おう、と心に誓うのだった。トマトはほくほく顔でお金を受け取りながら、先ほどランスから返して貰った家宝の剣を大事そうに抱えていた。

「そんなに大事な剣だったのか？」

「はい、家宝というのもありますが、私、いつか自分で冒険をした
いと考えているんです…よね？」

「アイテム屋さんなのですか？凄いですね」

「全く鍛えてるようには見えんが…危ないぞ。俺様が近くで守って
やるっ」

シルルが感心し、ランスが下心満載で護衛に志願する。

「鍛えてはいないですけど、何とかありますよ。…その、気合いで
？」

「それはある程度ちゃんと鍛えた奴が最後に頼るものだよ。ふむ…
でも素質は悪くなさそうだな。鍛えれば一端の冒険者になれるかも
しれないな」

「え？本当ですか？わーい、そうだったら、いつか一緒に冒険して
くださいね？」

「がはは、最強の俺様はいつかじゃなく、今すぐでもいいんだがな
「いつかそんな日が来るのを待っているよ」

店を出て行く三人を見送るトマト。流石にお世辞なのは分かっていたが、ちょっと剣の修行を試みようかな、と思うのであった。

- カスタムの町 ラギシス邸跡 -

その家は戦闘の影響でか、崩れかけであった。部屋は薄暗く、床には魔方阵が刻まれている。

「ランス様…ここ、なんだか怖いです。なにか…気配みたいなもの感じませんか？」

「ラギシスの亡霊でもいれのか？馬鹿馬鹿しい、びびりすぎだ」

「で…でも、もしかしたら…」

ブルブルと震えるシイル。するとそのとき、ペシーんと音が響いた。

「ひゃあああああ」

「がはは、尻を叩かれたくらいでびびりおって。情けないぞ」

「ひどいですよお…ランス様…」

悪ガキっぽく笑うランス。シイルは目に涙を浮かべながら、腰を抜かして床に座り込んでしまった。その姿が中々にそそる。

「よし、やるぞシイル。ルーク、ちょっと外で待ってる」

「はいはい、早めに済ませてくれよ」

「え、え、え、…その…ここは怖いんでせめて場所を変えましょうよ」

シイルの胸を揉み始めるランスに、場所替えを提案するシイル。それを尻目に部屋から出て行こうとするルークだったが、部屋の中

心部、魔方陣のあつた辺りが光輝き、青白い人の形を成したものが
出来上がっていった。

「こら、神聖なる屋敷で不埒な行いをするんじゃない。その男も
出て行かないでちゃんと止める」

「うわっ、なんだこの親父は！おばけか？」

ランスがそう言うと、シイルは怖がってランスの後ろに隠れる。
ルークも出て行こうとしていたのを止め、剣に手を伸ばして臨戦態
勢に入る。

「お化けにあらず…怯える必要はない。私こそ、この町の守護者、
ラギシスだ…」

死してなお、その魔法使いは地縛霊となりこの世に留まっていた。
それは自分の弟子を止められなかった後悔からか、あるいは別の未
練があるとしてもいづのだろうか…

第13話 トマト爆誕（後書き）

「人物」

ランス （2）

LV 10 /

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV1 冒険LV1

早々にルークと再会した鬼畜戦士。誘拐事件解決時にはLV15ほどになっていたが、その後ほとんど冒険をしないでいたらレベルダウンしていた。

シイル・プライン （2）

LV 10 / 40

技能 魔法LV1 神魔法LV1

ゴッドオブヘアーの持ち主。ランス同様、冒険していなかったため仲良くレベルダウン。

トマト・ピユール

LV 1 / 37

技能 剣戦闘LV1

カスタムの町アイテム屋店主。趣味は盆栽と俳句で、ミミックをペットにしている変わった娘。大冒険に興味がある。本家2とリメイク版である02で性格がだいぶ違う。本作では02仕様。因みにRance1のパッケージは彼女だったりする。しかし、1に彼女は登場しない。最新作ランスクエストにて再登場。その保有スキルの使いやすさから、お世話になったプレイヤーも多いのでは？

エレナ・エルアール

カスタムの町酒場の看板娘。覆面社交パーティーで抱かれた初恋の男を捜すため、500GOLDで体売っている。

「モンスター」

ミミック

宝箱に潜むモンスター。強力なレーザー攻撃を放つため、油断は禁物。なぜかトマトがペットにしている。

「装備品」

イナズマの剣

ランスが購入。切れ味は並だが、雷属性の武器であり、通が好むとされている。

界陣の鎧

ランスが購入。戦士向けの本格的な鎧で、値段も1800GOLDと中々の値段。

真紅の鎧

ルークが購入。若者に大流行の軽鎧。付属のマントはランスに上げた。

防御のローブ

シルが購入。女性用の防具で、見た目は軽いがそこそこの防御力を持つ。

「アイテム」

世色癌

回復薬。ハピネス製薬が発売しており、冒険者のお供。苦い。どこかの世界にはこれを1000粒くらい一気のみする猛者がいるら

しい。名前はナクト、きつと世色癒食LV3の技能保有者なのだろう。

「料理／食材」

うるろーん

ねちよーりして、ガリンゴリンしていて、それでいて半生の料理。つまり不味い。

うはあん

桃りんごを用いて作る高級料理。果物である「うはあん」と名前が似ているが、別物である。

ビール

ご存じビール。本家2でエレナが勧めてくる。

チョコレートパフェ

ランス曰く男の食べ物。よって、シイルはあまり食べさせて貰えない。

第14話 抱く疑念

- カスタムの町 ラギシス邸跡 -

「あんたが四人の魔女に殺されたラギシスに間違いないんだな？」
「いかにも。お主たちはこの町の住人ではないな。雇われた冒険者であるか？」

廃墟と化したラギシス邸跡で、ルークは霊体になったラギシスと話をしていた。未練を残した人間が霊体となってこの世に留まるのは、珍しくはあるが決してあり得ない事ではない。この間の誘拐事件の際も、ラベンダーという幽霊になった女の子がいたように、冒険者を長く続けていれば、何度かは出くわす事もあるケースだ。ラギシスは長髪に髭を生やした、ナイスミドルという言葉がよく似合いそうな、老人一歩手前の中年であった。平穩無事なら、まだまだ余生を過ごせたであろう。

「ふふん、俺様こそ史上最強の戦士、ランス様だ！こっちは奴隷のシイルで、こいつは下僕のルーク」

「よ、よろしく…お願いします…」

「俺はいつになったら下僕を卒業できるんだ…？」

ランスがポーズを取りながら自己紹介をし、その後ろから控えめにシイルが顔を出しお辞儀する。

「そうか…頼む、どうかこの町を救って欲しい。私にはもう、それを行う力はない…」

申し訳なさそうに霊体となったラギシスが頼み込む。その顔はどこか悔しそうであった。町を守れなかったこと、弟子たちに反乱を起こされたこと、現世に相当な未練があるのだろう。

「任せておけ。で、出来ることなら事のあらましを本人から聞きたいのだが」

「さて、そう言われても…どこから話していいものか…そうだな、私はこの町の守護者として長い間この町を守ってきた。だが、老いには勝てん。力が衰えていくのを感じた私は、魔力に素質のある者を四人集め、後継者として育て始めた。ゆくゆくは、この町の守護者として跡を継いで貰おうと。幼い彼女たちに魔法を教えている時間は、安息に満ちた時間であった。日に日に魔力を増した彼女たちを見るのは…」

「まてまて、要点だけ話せジジイ。お前の思い出話が聞きたいんじゃない。話したいならその辺の石にでも話してる」

「……………」

バツサリと切って捨てるランス。が、内心ルークは拍手していた。正直ルークも、この先関係ない話が続きそうな気配を感じ取り、どうしたもののやらと考えていたからだ。

「…要点だけ話そう。ある日奴らは私の大事なフィールの指輪を奪っていった」

「フィールの指輪？聞いたことがないな…」

「以前にゼスのとある魔法使いから譲り受けたものでな。はめた者の魔力を数倍にも増幅させるのだ」

話を聞いてルークは驚く。今この男は数倍と言ったか？確かに魔力を増幅させる装飾品が無いわけではない。例えばカラー族のクリスタル等がそうだ。彼女たち一族の額に埋め込まれたクリスタルは、

ある方法を用いると魔力が増幅され、強力なマジックアイテムの材料となる。これを加工したクリスタルリング等は、魔力を増幅させる装飾品と呼べるだろう。が、それでも増幅する魔力はせいぜい二倍。相場20万GOLDのクリスタルを加工した、市場にあまり出回らないクリスタルリングでさえその程度なのだ。なればこそ、数倍にもなるようなマジックアイテムがあれば、国宝になっけていてもおかしくはない。それを手放すぜスの魔法使い、そんなことが有り得るのか…

「奴らはこともあろうに、師である私に戦いを挑んできたのだ。普通であれば未熟者が束になろうと負けはせん。が、フィールの指輪を装備した奴らは絶大な魔力を手にしていた。特に、リーダー格であった娘は私をも凌駕する魔力…私は敗れ、このような姿になってしまった。…このまま野放しにするわけにはいかない！」

「待て、今の話し方からすると、フィールの指輪は一つではないのか」

「うむ、全部で四つある」

四つ…一つでも国宝になりかねん、そんな指輪が四つだと…

「ふん、自分の弟子に負けるなど情けない奴め。とりあえず、彼女たちの情報について教えて貰おう。名前、得意技、スリーサイズを答えろ！」

「スリーサイズは知らんが…答えられる範囲で答えよう」

魔力の増幅などに興味のないランスは、指輪の異常さに気がつかず話を進める。ラギシスがそれに答え、彼女たちの説明を始めるが、ルークは未だ頭からフィールの指輪のことが離れていなかった。

「まずは、マリア・カスタード。冰雪系の中でも、取り分け水魔法

を得意とする少女だ。魔法以外にも研究や発明の才能もあつたな。ひよつとしたら育てればそちらの方が伸びたかもしれん」

「可愛いのか？」

「たとえ殺されようとな…どの子も、私にとっては可愛い娘だ」

そう言うラギシスに対し、ちよつと感動したのかシイルがつるつると涙目になっている。奴隷として売られていたということは、両親は亡くなっているか、生きていたとしても長く会えていないのだろう、とルークはシイルを見ながら思った。

「次にミル・ヨークス。他の三人よりも弟子入りしたのが遅く、年齢も一番若い。珍しい幻獣魔法の使い手だ。指輪の魔力を持っている今では、ほぼ無尽蔵にモンスターを生み出すだろう」

「厄介だな。次。」

「三人目はエレノア・ラン。彼女は剣の腕にも秀でた魔法剣士で、初級魔法レベルのものを手広く学んでいる。その中でも幻惑系の魔法を最も得意としている」

「つまり器用貧乏タイプだろ。一番中途半端なタイプだな」

三人目までの説明を聞き、戦い方を考えるルーク。ランスも言ったように、ここまでで一番厄介なのはミルという娘だ。前衛に守らせ、後ろで詠唱をするという魔法使いの基本戦術。基本であるが故に、ただ単純に強い。その前衛を、無尽蔵に生み出すというのだ。単体ではもちろん、他の魔女と組まれると非常に不味い。逆にエレノアという娘は、幻惑魔法にさえ気をつければ、比較的やりやすい。そして、問題の四人目だ。リーダー格であり、指輪を付けていたとはいえ、師であるラギシスをも上回る魔力を持ち合わせた人物。

「そして最後が…ランス、ルークよ、彼女には特に気をつけるんだ。将来的には間違いなく人類最強クラスの魔法使いになるであろう素

質を持っている。魔法大国ゼスでも、これ程の才の持ち主は限られるだろう」

ゼスでも有数の魔法使いか。ふと、一人の青年が思い出される。何度か仕事を共にしたことのある魔法使い。魔法使いにあらずば人にあらずという思想が蔓延するゼスにおいて、そういった思想に捕らわれない珍しい男。初めて出会ったとき、あいつはまだ学生だった。ギルド仕事で学園を訪れた際、モンスターが現れ駆り出されたあいつは、得意の炎魔法で敵を消し炭に変えていった。正直、別のギルドから派遣されていた魔法使いや、その場に居合わせた教師なんかよりも、よっぽど才能を持ち合わせていた。つい先日、約10年ぶりに再会を果たした際、ゼスの兵隊になっていたのを見たときは時の流れに驚かされたものである。まあ、あちらも、10年も顔を見せないから死んだと思っていた俺と再会して、たいそう驚いてはいたが。そんな事を懐かしんでいると、最後の娘の名前を聞き逃す。

「あ、すまない。考え事をしていて聞き逃した。最後の娘の名前は？」

「ぼーっとしてるんじゃない、馬鹿者。志津香だ、志津香！」

「気をつけるよ、彼女も数多くの属性の魔法を……」

「返す言葉もないな。ゼスと聞いて友人のことを思い出していた」

「ん？美少女か？だったら俺様に紹介しろ」

「いや、男だよ」

「なんだ男か。…ん、なるほど、以前女に興味ないとか言っていたが、そういう事か。貴様、ホモだな！」

「一応訂正しておくが、女じゃなくて、お前が誰を抱いたって話に興味なかっただけだからな。」

「ル、ルークさんにそんな趣味が……」

「違うから。あり得ないから。信じないでくれ、シイルちゃん！」

がはは、と一歩ルークから離れながら笑うランス、信じてしまったのかシヨックを隠しきれない様子でルークを見るシル、必死に弁解するルーク。やんややんやと大騒ぎを始める。

「あの…まだ話の途中なんだが…」

- カスタムの町 地獄の口 -

ラギシスから少女たちの情報を聞いた三人は、彼女たちが築いたという迷宮の前まで来ていた。住人の間では、地獄の口と呼ばれて恐れられている場所だ。

「さあ、入るぞ！がはは、とつと少女たちをお仕置きして、報酬ゲットだ！」

ランスが先頭に立ち、その後ろをルークとシルがついて行く。中に入ると辺りは暗く、少し先も見通せないほどだった。ただでさえ暗い洞窟が、地下にあることで光の全く差し込まないダンジョンになっていた。

「とりあえず明るくしますね」

シルが呪文を唱えると、2メートルくらいの位置にミニ太陽が現れ、ダンジョン内を明るく照らす。

「んー、やはり魔法使いがパートナーだと仕事がやりやすいな。もうちょい大事に扱ってやれよ、ランス」

「ふん、こいつは俺様の奴隷だから、俺様がどう扱おうが問題ない。余計なこと言ってるんで、さっさと奥に進むぞ」

そう言っただけで先に歩いていってしまおうラン。ダンジョン内はあまり入り組んでおらず、出現するモンスターもきゃんきゃんやミートボール、ハニースライムなど、雑魚モンスターばかり。道中出るモンスターを倒しながらスムーズに奥へと進んでいく三人。と、ランの足が滑る。足下が急に坂になっていたのだ。

「げー!!」

「うおっ、人の足を掴んで巻き込むな!!」

「きゃあああああ!!」

巻き込まれるルークとシル。三人は下にあった地下水湖に仲良く落ちていった。

・洞窟内 研究室・

洞窟内のある一室、ダンジョンを築く際、わがままを言って無理矢理作った部屋だ。机の上には怪しげな薬品の入ったビーカーや、拡げたままの難しそうな書物が散乱していた。そこに、少女はいた。白衣を身につけ、顔には特徴的なまん丸メガネ。彼女がここで研究しているのは、新たな兵器。魔法の才能を持たない戦士でも、魔法使い同等の威力を持った長距離攻撃を可能とする新兵器を開発していた。

「もしもこれが完成すれば…戦闘の歴史がひっくり変わるわよ…ふふふ」

怪しげな笑みを浮かべ、メガネがきらーんと光る。と、そのとき研究室の入り口前からゴゴゴゴ、と音が聞こえる。モンスター進入撃退用のトラップが発動したのだ。左右の壁が迫ってきてモンスターを押しつぶす、彼女の自信作である。

「うがああああ！！なんじゃこりやああ！！！」

「きゃー、ランス様あああ！！！」

「まずい、駆け抜けるぞ！ギリギリ間に合うかもしれん！」

いけない、モンスターではなく人間が引つかかってしまったらしい。慌ててトラップのスイッチを切る。

「ん？止まったぞ？がはは、へっぽこトラップめ、故障したな」

むか。私の作ったものがそんなに簡単に故障してたまるものですか、と聞こえてきた声に腹を立てる少女。程なくして、部屋の扉が開かれる。そこには冒険者が三人立っていた。一応こちらが危険な目にあわせてしまったので、謝罪する。

「すみません、大丈夫でしたか？怪我はないですか？」

「うむ、怪我なら平気だ。ところで君は何者だ？」

一番前にいた口の大きな冒険者が問いかけてくる。彼の言うように、三人ともなぜか濡れているが、怪我はないようだ。ホツとしながら、彼女は男の問いに答える。

「ああ、申し遅れました。私の名前はマリア・カスタード。よろしくお願いします」

第14話 抱く疑念（後書き）

「人物」

ラギシス・クライハウゼン

LV 23 / 30

技能 魔法LV2

カスタムで魔法塾を開いていた魔法使い。故人。弟子でもあり、娘のような存在であった四人の少女たちに反逆され、死亡する。死語は地縛霊となってカスタムに留まる。

「モンスター」

きゃんきゃん

一つ星女の子モンスター。無邪気な性格で戦闘意欲はなく、人間魔物問わず、遊んでと持ちかける。

ミートボール

槍と盾で武装した知能を持った肉団子。食べてもおいしくない。

ハニースライム

体が溶けているハニー。ハニー誕生の儀式に失敗すると、体が固まりきらず、この形状となる。

「技」

見える見える

ミニ太陽を生み出す初級魔法。ダンジョン内を探索するのに非常に役立つ。

「装備品」

クリスタルリング

カラーのクリスタルを加工して作るアクセサリ。魔力を二倍にする効力があるが、非常に高価であると同時に、市場に中々出回らない。

「アイテム」

クリスタル

カラーの額に埋め込まれている宝石。処女を失うと色が赤から青に変化し、膨大な魔力を持つようになるが、クリスタルを抜かれたカラーは消滅してしまう。相場は20万GOLD。カラー族は見目麗しく、クリスタルは犯されれば犯されるほど魔力を増すため、一攫千金を狙う者たちによるカラー狩りが後を絶たない。

第15話 その娘、研究者

- 洞窟内 研究室 -

「こんなに友好的ですと戦い辛いですね、ランス様…何かの間違いじゃないのですか？」

シイルが小声でランスに問いかけるのも無理はない。四魔女の一人であるはずの少女は、今自分たちの前で丁寧にご自己紹介をしながら、ペコリと頭を下げて一礼しているのだ。シイルの言うように自分の師匠を殺して指輪を奪うような人間には思えない。まあ、そういった初見での評価が当てにならないことは、この間の王女様で証明済みだが。

- リーザス城 王女の間 -

「ぶえつくしっ！」

「リア様、大丈夫ですか？風邪気味なでしたら、今すぐお休みになつて…」

件の王女が大きなくしゃみをしていた。心配そうにする侍女。

「ううん、大丈夫。ところで、ダーリンの居場所は分かった？」

「はい。かなみの調査の結果、現在ランス様は仕事でカスタムの町を訪れているようです」

「じゃあ今すぐ向かいましょう！マリス、準備を」

「申し訳ありません、リア様。例の物を持ち出す許可が下りるのに、もう少々だけお時間が…」

「えー、今すぐ出発したいのにい…ぷんぷん」

仕事を放り出してランスに会いに行くことは特に問題視していないマリスだが、すぐに出発しようとするリアを止める。理由は王女がランスに会いに行くに当たって、城から持ちだそうとしていたものだ。それは本来持ち出し厳禁の代物で、裏で実権を握るマリスだからこそ、色々と手回しをして持ち出すことが可能なのだ。

「早うしの準備は整っておりますので、許可が下り次第すぐに出発できます」

「急いでね、マリス。待つてね、ダーリン！」

「かなみも準備を進めておくように」

「はっ！」

この部屋にいたもう一人の人物にマリスが声を掛ける。カーテンの裏に潜んでいたかなみはそう返事をしながら、主君が目当てにしている人物とは別の人のことを考えていた。

「（調査しているときに分かったんだけど、ルークさんも今カスタムに滞在してるみたいなのよね…偶然会ったりとかするかな…）」

・洞窟内 研究室・

「なんだか寒気が…」

「大丈夫ですか、ランス様？」

「それで、あんたはここで何の研究をしているんだ？」

ランスが得体の知れぬ悪寒を感じ取っている横で、ルークはマリアにそう尋ねる。すると、マリアが「バツ！」と目を輝かせてルークを見た。

「興味ある？興味あるのね！しょうがないな、ちよつとだけ説明してあげる！魔法って才能ある人しか使うことが出来ないでしょ。だから自然と魔法を使えない人は戦士として前衛に立つことが今の戦闘の通例になってるの。でもそれを覆せるとしたら？戦士にも魔法使いと同じだけの破壊力を持った後衛攻撃が出来るようになったら？」

「一応遠距離をこなす戦士も少数だが存在はするんじゃないか？弓矢とかの武器もあるし、遠距離技を使う奴もいるしな」

捲し立てるように喋り出すマリアにちよつと引き気味になりながら、ルークが尋ねる。自分自身、一応真空斬という遠距離技を持っているからこそ、彼女の発言に少し引つかかったのだ。すると、マリアはやれやれ、分かってないな！という顔をしてみせる。

「確かにそういった例外もあるわ。でもね、弓矢なんかはある程度のセンスや努力が必要だし、必殺技なんかそれこそ持って生まれた才能が必須になるでしょ。そうじゃなくて、才能も努力も必要としない新兵器の開発をしているの！」

「努力を必要としないというのは無茶じゃないですか？やっぱり強くなるうとしたら、ある程度の努力が必要にはなってくるかと…」

「無茶を可能にする！そういった研究をしているの！もしもこれが完成すれば…ふふふ…」

シイルの問いに、グツ！と右拳を握りしめマリアが答える。その瞳は燃えていた。一見すればマッドサイエンティストの類に見られ

かねないが、確かに彼女の言う兵器が本当に実現すれば、戦いの歴史は大きく動くだろう。

「そこまで言うとなると興味があるな。どういった兵器か俺様に見せてみる」

「残念だけどそれは秘密。まだ完成していないもん。詳しい質問も受け付けないわよ。私が欲しいのは弟子じゃなくて、研究を手伝ってくれる人なんだから」

「こら待て、俺様を助手扱いとは無礼な！」

「…あれ？助手希望の人じゃなかったの？だったら助けるんじゃないかな」

そう言うてのけるマリア。今の発言に、ルークは少し思うところがあり、問いかける。

「つまり…助手希望の人間でなかったら、死んでしまっても構わなかったと？」

「うん、だって時間の無駄じゃない」

先ほどまでと何ら変わらない調子で、マリアは恐ろしいことを言うてのける。それがさも当然であるかのような様子に、ルークは若干身震いする。こんな少女が…

「わあ、私たち間違われたおかげで助かったんですね。ラッキーです」

ガクツ、とルークがこける。相変わらずシルは少し天然が入っていた。

「喜ぶな、バカ」

「ん？助手希望じゃないとなると…もしかして敵？」

「うむ！四魔女を退治しに来たのだ！」

「あー、それじゃあお帰りはあちらです。研究の邪魔になるから出て行ってください。早く出て行かないと警備のハニーやグリーンハニーやダブルハニーをたくさん呼ぶわよ」

「ハニーに何かの拘りでも！？」

マリアがお帰りください、とルークたちの入ってきた扉を指さす。警部を呼ばれるという発言を気にする様子もなくランスが答える。

「がはは、そんな雑魚どもは全く怖くないぞ。それより、どうして町を陥没させたんだ？」

「……………」

「質問を変えよう。フィールの指輪は？」

「一つは私が持っているわ。ほら、これがそうよ」

マリアが手をかざすと、その指には青い指輪が詰められていた。本当にあったのか…とルークは内心動揺する。

「あなたもこの指輪が目当てなの？でも渡せないわ」

「がはは、なら力尽くで奪うまでだ！」

ランスがそう言うと同時にルークも臨戦態勢に入る。魔力を数倍にするというのが本当なのであれば、油断するわけにはいかない。魔法を使われる前に取り押さえる。

「はあ…なら悪いけど死んでね」

油断したつもりはなかった。初級魔法ならばいくら魔力が上がっていたところで対応は可能だし、中級以上ならば呪文の詠唱をして

いる間に飛びかかれるよう構えていた。しかし、結果はどちらでもなかった。マリアの後ろに水の柱が噴き上がる。

「ほぼ無詠唱で中級魔法だと!？」

「迫激水!！」

水の柱が滝となり、ルークたちに襲いかかる。攻撃範囲が広く、逃げ場がない。

「ぐっ…」

「うがぁ、水が水が水が!！」

「あーん!ぶくぶくぶく…!」

滝に飲み込まれ、部屋の外に押し流される三人。それを見届けると、マリアは新しいトラップを発動させて、時間を無駄にしたというような顔つきで研究の作業に戻っていった。

・洞窟内 研究室前・

「うがぁぁぁ!開けるおおお!！」

ランスが扉をがしがしと蹴る。かなり遠くまで押し流された三人が部屋の前まで戻ると、扉は固く閉ざされ中に入ることが出来なくなってしまうていた。

「結果…とは違うな。さっきのトラップと同じで、何かしらのカラクリか」

「これじゃあ、マリアさんにもう一度会うことが出来ませんね」

「ひとまず洞窟内に扉を開ける手段がないか捜すぞ！あの女、今度は容赦しないぞ。あんな事やこんな事してやる！」

ぶんすかと怒りながら、洞窟内の先に進んでいくランス。それにルークとシイルはついて行くが、ルークは先ほどの見通しの甘さを反省していた。魔力が上がる、ということだけを鵜呑みにし、詠唱時間さえも早まるという可能性を考えていなかった。一つ間違えれば、それが命取りになる。冒険者として気を引き締め直すと、少し開けた場所に出た。

「あ、ランス様！あそこにどなたかいらっしやいますよ!？」

言われた方を見る二人。そこには傷だらけの女性がいた。格好や近くに落ちている剣を見るに、冒険者だろう。すると、彼女が苦しそうにこちらに問いかけてきた。

「だっ…誰？」

「心配しなくて良い、同業者だ。俺はルーク、こっちの二人は同じく冒険者のランスと、そのパートナーで魔法使いのシイルだ」

「ふむふむ、美人じゃないか。…ぐふふ」

「よろしく願います」

「…どうやら貴方たちは奴らの仲間じゃなさそうね。私はネイと言い…ゲホッ」

挨拶の途中で辛そうに咳き込む。放っておくと危険な状態だ。

「シイルちゃん、とりあえずヒーリングを」

「はい。いたいので、とんでけーっ!」

シイルが治癒魔法を唱える。彼女の傷がふさがっていき、顔色が

良くなっていく。

「ふう…ありがとう。随分と楽になったわ」

「応急処置だからしばらくは安静にしていた方が良いな。こんな状況ですまないが少し聞いて良いかな？君は一人でこの迷宮に来たのか？」

「いいえ、私たちが迷宮に入ったのは四日前。私、ゼウス、カーネル、バードの四人で入ったの。目的は多分貴方たちと同じ、四魔女退治ね」

「うむ、俺様たちも同じ目的だ。それで、他の奴らはどうした？」

「水の彫像に負けて、みんな散り散りになってしまったわ」

「水の彫像？」

「強いんですか？」

「第二研究室を守っているガーディアンよ。恐ろしく強い上に二体いてね。私たちのパーティーでまともに応戦できていたのはバードだけだったわ」

「それはお前らがへっぽこだったからだろう。で、第二研究室とはなんだ？」

「へっぽ…！？」

ランスの発言に顔を歪めるが、一応命の恩人であるため話を続けるネイ。

「…あの迷宮にはマリアの研究室が二つあるの。一つはトラップで守られた第一研究室、もう一つが水の彫像に守られた第二研究室。基本的にマリアはどちらかにいるわ」

「俺たちが会ったのは第一研究室だな。扉を開ける手段があるか分からんし、第二研究室に向かった方が良さそうだな」

「待って。第二研究室に向かう途中の扉には鍵が掛かっているわ。頑丈な扉だし、破壊しての進入も難しいと思うわ」

「鍵か：水の彫像まで辿り着いたということは、君たちはその鍵を持っていたんだろう？その状態では探索の継続は無理だろうし、悪いが譲って貰えないかな？」

「ええ、ダンジョン内の宝箱から発見して持っていたわ。でも、彫像から逃げる途中で落としてしまったの。落とした場所は、多分地下水湖だと思う」

「おお、その場所ならさつき通ったぞ。よし、ルーク、捜してこい！」

「俺かよ……」

「当たり前だ！ネイちゃんを町まで送り届けなきゃならんがそれには護衛がいるし、悪化したときのための治療用でシイルも必要だからな」

まあ筋は通っている。シイルがネイと一緒に行動するのが確定な以上、主人であるランスがそちらの護衛をするのが普通の考えだ。

「ま、いいか。町の酒場で待っていてくれ。ネイは怪我人だからな、無茶はするなよ」

「がはは、任せておけ」

「あ、一緒にかえるの耳飾りも落としてしまったの。大事なものだから一緒に捜してきて貰えないかしら？」

「了解した。じゃあ行ってくる」

そう言って地下水湖に向かうルーク。残された三人の内の一人が、口をにたつと開いた。

「じゃあ、私たちも町に引き返しましょう。帰り木は持ってるのかしらっ？」

「……………」

「…なんでにじり寄ってくるの？なんで笑っているの？なんで何も

答えないの？なんでそっちの娘は遠い目してるのおおおお！？」

・カスタムの町 酒場・

「いらっしやーい。お仲間なら奥の席にいるよ」

酒場に入ってきたルークにエレナがそう言って案内する。その後地下水湖まで引き返したルークは、時間を掛けて捜した結果、鍵と耳飾りを発見し、約束の酒場までやってきたのだ。

「戻ったぞ。一応どっちも発見した…ん、ネイはどこに行った？」

「がはは、泣きながら「いつか殺してやる」とか言っただけで行ってしまっただわ」

…おかしい、この展開、最近どこかで体験したような。

「…無茶はしないように言っておいたはずだが…」

「うむ、英雄である俺様とのHは無茶な行動ではないな。がはは」

…そう、あれは確か盗賊団の…

「そうそう、お前も含まれてたぞ。「治療してくれたシルはいいけど、あんたら二人にはいつか地獄を見せてやる!!」とか言ってたし」

「完全にデジャブツ!!」

第15話 その娘、研究者（後書き）

「人物」

ネイ・ウーロン

LV 8 / 27

技能 シーフLV1

女冒険者。傷つき倒れたところをランスに襲われる。ランスとルークを恨んでどこかへと姿を消す。いつか某盗賊の娘と一緒に復讐に來たりするかもしれない。

ゼウス

ネイの仲間の男冒険者。水の彫像に敗れ逃げているところ、モンスターに襲われ死亡。

カーネル

ネイの仲間の男冒険者。水の彫像に敗れ逃げているところ、足を滑らせ転倒し死亡。

「モンスター」

ハニー

茶色い基本形ハニー。意外なことに、ランスシリーズに初登場したのは6。

グリーンハニー

緑色のハニー。右手にトライデンを持つ。1から長いことシリーズ皆勤を続けていたが、戦国ランスにて遂に記録が途切れる。正直、出して欲しかった。

ダブルハニー

誕生の際、失敗して二体くっついてしまったハニー。右手にトライデン、左手に花を持ち、お腹には日の丸の国旗がある。右と左で性格が違う。

「技」

迫激水

氷系内水類の中級魔法。水の柱が噴き上がり、滝となって相手に襲いかかる。

「アイテム」

帰り木

ダンジョンから脱出する事の出来る冒険者の必須アイテム。一度使うとなくなる。

かえるの耳飾り

ネイの大事なもの。返しそびれたのでルークが一応持っている。

「その他」

ハニー種

ハニワ状の不思議な生物。男女の区別があり、同種内で繁殖可能。人間ともある程度共存している。魔法を無効化する「絶対魔法防御」という特性を持つ。

うし

ムシの一種。丸っこい赤い体でみゃーみゃーと鳴く、世界で最もポピュラーな家畜。足が速く、上手く走らせれば時速100kmに

も達する。はやつまやてはさき等つしよりも速い生物も存在するが、
うしが最も簡単に扱えるため、交通手段としても広く利用されてい
る。

第16話 水使いマリア

- 洞窟内 第二研究室前 -

「これがネイの言っていた水の彫像か」
「うーん、腰のラインがいやらしい」

三人は洞窟内に戻り、第二研究室前まで来ていた。そこには美しい女神像が二体並んでいた。彼女の話の通りなら、これがこの部屋を守るガーディアン。

「部屋に入ろうとすると動き出すタイプか？」

「では入る前に破壊してしまえばいいんだろう。がはは、とー！」

ランスが剣を振りかぶり、女神像を破壊しようとする、轟音と共に二体の彫像が動き出した。

「我らが眠りを妨げる不埒者ども」

「その身で償いをするがよい」

「ええい、部屋に入ろうとしなくても動き出したではないか、この嘘つきが！」

「別に断定しなかっただろうが。ランス、右の彫像は任せた。シルちゃん、後ろから援護を頼む」

「はい！」

ルークはそう言うと、左から襲いかかってきた彫像に対峙する。見るからに頑丈そうな彫像だが、一定の距離で止まると呪文詠唱を始めた。彫像だから物理攻撃メインかと思っただが、どうやら魔法攻

撃タイプのようだ。ルークもその距離で腰を落とし、剣を左から右へ振り抜く。

「真空斬！」

ルークの放った斬撃は彫像の腕に直撃し、右腕が崩れ落ちる。が、特に気にすることなく呪文詠唱を続ける。

「水雷」

「おっと…痛みを感じてないな。一気に破壊するのが得策か」

彫像の放った魔法を躲し、ルークが彫像への戦闘方針を決める。少し離れた場所で、ランスももう一体の彫像と対峙していた。が、その瞳はとろん、と閉じかけている。

「えい、炎の矢！ランス様、起きてくださいーい！」

「おお！くそ、厄介な魔法使いやがって！」

シイルが炎の矢を彫像に放ち、寝かけていたランスを起こす。そう、ランスは彫像の放ったスリープの魔法で眠りかけていたのだ。地味ながらも強力な魔法である。

「水雷」

「ぶん、一気に仕留めてやる。必殺、ランスアタアアックー！」

彫像の放った魔法を空中に飛び上がることで躲し、その頭に渾身の力で剣を叩き込む。剣の直撃の威力と、そこから発せられた闘気が重なり合い、彫像は粉々に砕け散った。

「ぶん、ざっとこんなもんよ」

そう言い、ルークの方を見る。すると、ルークもシルの炎の矢の援護を受け、空中に飛び上がったところだった。その姿が先ほどのランスと重なる。っておい、ちよつと待て…

「真滅斬!!」

闘気を纏った刃が彫像の頭から下半身まで一直線に走る。真つ二つになった、彫像が崩れ落ちた。

「な…な…な…」

「ランス、終わっていたのか。時間を掛け過ぎたな、すまん。」

「パ…」

「パ？」

「パクリだ！俺様のランスアタックのパクリだ！貴様にはプライドがないのか!!!」

ランスがそう大声を上げ、慰謝料だ、賠償金だと騒ぎ立てる。

「いや…一応10年以上使っている技なんだがな…」

「ふん、証拠がないな。きつとこの間のユラン戦で見てパクツたの
だろう」

「一応キースに聞いて貰えば証言してくれると思うが」

「あんなハゲの言うこと信用できるか！今後その技を使いたければ
一回につき10000GOLD俺様に払え！」

「いやいやいや。おかしいから、その金額。それに構えは似てるけど微妙に違うから。俺のは一点集中型。お前のは拡散型。俺にはあんな風に闘気を爆発させて周りを巻き込むなんて芸当、真似出来ないやー、才能の差かな。凄いなー」

「むっ、そうだな。がはは、俺様は天才だからな。うむ、言われて

みれば確かにちょっと似ているだけで、俺様のものとはレベルが違うな。」

そうルークが煽てると、わかりやすく反応するランス。なんとか慰謝料だか賠償金だかを払う危機を乗り切ったようだ。上機嫌で第二研究室に入っていくランス。それを追いかけてながら、シイルがルークにぼそつと喋り掛けた。

「すみません、ルークさん。…でも、本当に似ていましたね」

そう言っただけでランスの後を追っていくシイルの後ろ姿を見ながら、ルークは小さな声で呟いた。

「似てる…よな、やっぱり。ってことは…そういうことなのかね…」

その言葉は、ランスとシイルの耳に届くことはなかった。

・洞窟内 第二研究室・

「「「「あ」「」「」

扉をくぐると、そこには MARIA がいた。扉の先はすぐに第二研究室に繋がっている訳ではなかったようで、開けた場所になっており少し道が続いている。MARIA は別の道を通って、この扉の前に来たところだった。おそらく、第一研究室から直通で道が繋がっているのだろう。

「がはは、さすが俺様の強運！見る見る、すっかり MARIA がいたぞ

「はい、とつてもラッキーです」
「げ、なんでここに」
「そちらこそどうしてここに？その道がおそらく第一研究室と繋がってるんだろうが、第二研究室に用事でも？」
「第一研究室は貴方たちのせいで水浸しになっちゃったのよ！責任取ってよね！」

ぶんすかと怒るマリアに対し、どう考えても自分のせいだと
思うルーク。

「ぶん、そんなことはどうでもいい！さあ、勝負しろマリア！今度は俺様が勝つ番だ！」

「まあ、三対一で申し訳ないが、諦めてくれ」

「ぶん、この指輪がある限り、私は負けない。それが死なないと判らないみたいね！」

マリアがそう言って手を前に差し出すと、詰められていた指輪が妖しく光る。それが戦闘開始の合図だった。

「行くぞシイル、ルーク！」

「シイルークって名前みたいですわね」

「暢気だな、シイルちゃん……」

「迫激水！」

マリアが唱えると、水の柱が滝になって三人に襲いかかる。が、先ほどと違い全員がそれを避ける。第一研究室のときは、部屋が狭く、部屋の外の通路も狭い一本道であったため逃げ場がなかった。しかし、今は違う。ランスとルークは素早く左右に避ける。そう、ここは開けた場所であるため、多少範囲の広い攻撃でも十分に避け

るだけのスペースがあるのだ。シルも扉をくぐって前の部屋に戻り滝をやり過ごした。

「ちっ、水雷」

続けて水雷を放つマリア。ルークが躲すと魔法は後ろの壁に命中し、壁が崩れた。本来はあまり威力のない魔法だが、指輪のせいであまり凶悪なものになっていた。

「がはは、俺様がお仕置きしてやる」

「水雷水雷水雷水雷もいっちょおまけに水雷！」

「うおっ、連発するんじゃない！！！」

元々連発可能な魔法ではあるが、流石にもうちよつと時間が掛かる。ここまでノータイムで連発されては流石のランスとルークも近寄ることが出来なかった。近寄りさえすれば、一撃で仕留められる。後はどう近づくか…するといつの間にか部屋に戻ってきていたシルが炎の矢で応戦を始める。

「炎の矢、炎の矢！」

「ふん、水雷水雷水雷水雷」

威力が違ったため相殺とはいかないが、炎の矢が直撃した水雷は威力が落ち、ルークたちに届く前に地面に落ちる。が、詠唱速度が違いすぎる。

「ええい、シル！もつと連発しないか！」

「すいません、ランス様。これが限界です…」

「いや十分だ。多少余裕が出来た」

シイルのお陰で避ける動作に余裕が出来たルークは腰を落とし、剣を振り抜く。

「真空斬！」

放たれた刃が水雷とぶつかり、相殺する。

「嘘…遠距離攻撃が使えたの？威力も高いし…でも速さが伴わなきや…」

「真空斬！真空斬！真空斬！」

「れ、連発可能！ずるいわよ！みつ、水雷水雷水雷」

「炎の矢、炎の矢」

立場が逆転する。ルークとシイル二人の攻撃をマリアが相殺する形となり、自然とランスに攻撃の手が回らなくなる。

「決める、ランス！」

「おお、くらええええい！！」

マリアの方に前進し、ほどよい距離で空中に飛び上がりランスアタックの構えを取る。狙うはマリアの手前の地面、ユランのときと同じように衝撃波で吹き飛ばすつもりだ。

「引つかかったわね、まずは…迫激水！」

そう言うとマリアがルークとシイルに向かい迫激水を放つ。それを左右へと躲す二人。と、同時にマリアの意図が読めたルークは慌てて腰を落とす。マリアはランスに向かって両手を揃えて突き出した。あれは上級魔法。

「さっきまでで斬激の速度は見たわ、すぐに気がついたのは良かったけど、そこからじゃ間に合わないわよ。…死ね、ウォータミサイル!!!」

「んげ!!!」

「ランス様あああ!」

マリアの両手から強力な水の塊が撃ち出される。指輪で増幅されたその威力は、直撃すれば一溜まりもない。焦るランス。

「ランス、俺を信じて気にせず振り抜け! うおお、真空斬!!!」

ルークが真空斬を放つ。間に合うわけがない、とマリアは思っていた。それが誤算。マリアは先ほどまでの真空斬がルークの全力だと思い込んでしまっていたのだ。真空斬は闘気の量によりその威力、速度、連射性が変化する。先ほどまでは連射性を上げるため、威力と速度をある程度落としていたのだ。そして、今から放つのは闘気を十二分に込めたため連射できないが、威力、速度共に申し分ない全力の真空斬。放たれたその刃は、ランスに迫っていたマジックミサイルに直撃し、水の塊が半分に分れる。割れた魔法はランスに命中することなく地面へと落ちていった。

「うそ…そんな…」

「ランスアタアアアック!!!」

ランスアタックがマリアの目の前の地面に命中し、衝撃波がマリアを襲う。吹き飛ばされながらマリアはまだ自分の敗北を実感できずにいた。

その部屋にある人影は三体。明かりは点っておらず、顔が判らない。ふいに声が発せられた。

「マリアがやられたようだな…」

「フフフ…奴は四魔女の中でも最弱…」

「冒険者ごときに負けるとは魔女の面汚しよ…」

パチツ、と部屋の明かりが付く。そこにいたのは一人の少女と二体の幻獣であった。明かりを付けたのは新しく部屋に入ってきた女性、四魔女の一人エレノア・ランだ。

「もう、ミル！暗くして遊んでたら目が悪くなるでしょ。それに今の喋り方はなんなの？」

「漫画で読んだの。かっこいいでしょ？」

部屋の中にいたのはミル・ヨークス。こちらにも四魔女の一人だ。

「幻獣は立ってるだけで、全部自分で喋っちゃってるじゃない。それに、マリアを勝手に最弱にしたり、負けさせたりしないの。ちゃんと謝っておきなさい」

「はい」

まさか本当にマリアが負けていようとは夢にも思っていない二人であった。

第16話 水使いマリア（後書き）

「モンスター」

水の彫像

第二研究室を守るガーディアン。スリープ等の高度な魔法を使用してくる強敵。初代2では、運が悪いと本当に何も出来なくなるため、初見で殺されたプレイヤーも多いはず。

「技」

真滅斬（オリ技）

使用者 ルーク

ルークの必殺技。剣を両手持ちし、頭上から渾身の力で振り下ろす技で、構えがランスアタックと非常に似ている。衝撃波を生み出して広範囲に影響するランスアタックと違い、刃に込められた闘気は拡散することなく直撃した相手を斬り伏せる。単体攻撃だが、直撃時の威力はランスアタックよりも上。

炎の矢

指先から生み出した炎の塊を放つ初級魔法。魔法使いがまず初めのうちに習うことになる基本魔法だが、使い勝手は良い。

水雷

指先から生み出した水の塊を放つ初級魔法。水魔法の使い手は少ないため、割とレア魔法である。

ウォーターミサイル

揃えた両手から濃縮された水の塊を放つ上級魔法。レアな水魔法の上級呪文なため、使い手が殆どいない。

スリープ

対象に眠りをもたらす支援魔法。非常に強力な魔法で、その分使いこなすのに高度な技術を要する。ゼスにはこれだけが得意な珍しい魔法使いもいるらしい。

第17話 明かされた真実

- 洞窟内 第二研究室前 -

「がはははは、新兵器開発とか言っていたな。これが俺様のハイパ
ー兵器だー！」

「うわ、でか！いーいやー！」

部屋の中からランスとマリアの声が聞こえる。今は勝者の特権、お楽しみタイムだ。ルークとシイルは部屋の外で待っていた。一般人や無抵抗の人間を無理矢理犯そうとすれば多少の苦言は呈するが、基本的に向かつてきた相手を犯すことに関してはルークは何も言わない。人によっては外道とも言うであろう行為だが、命のやりとりをしているのだ、たかだか犯される覚悟もない奴が向かってくるなというのがルークの考えだった。もちろん万人に受け入れられる感覚ではないだろう。以前ラーク & アコンビと共に仕事をした際、この事を話したら理解できないと苦言を呈された。逆にルークから言わせるとあの二人が純粹すぎるという感覚。キースから言わせればどっちもどっち、とのこと。ふと少し離れた位置にいるシイルを見ると、悲しそうな顔をしていた。

「はあ……」

「どうした、シイルちゃん。ため息なんかついて。やっぱり……こういうのは嫌か？」

ため息を吐くシイルを見かねたルークが問いかける。

「いえ、私はランス様の奴隷ですから……」

「…リーザスのかなみと俺が話したとき、側で聞いてたよな。その上での意見かな？」

「…出来れば、止めて欲しいです。でも…」

「まあ、言って止めるような奴じゃないだろうしな…」

「…ランス様にとって…私なんてどうでもいい存在なのかな…」

そう言っただけに落ち込むシル。自然と涙が頬を伝う。やれやれ、一番大切な人を悲しませてるんじゃないかねーよ、とルークは思う。まあルークがマリアとの情事を止めなかったのも原因の一環ではあるのだが、それはそれ。

「とおおおおお!!!!!!」

「ああああああん!!!」

という声が聞こえたかと思うと部屋の中が静かになる。どうやら終わったらしい。

「どうやら終わったみたいだな。シルちゃん、部屋に戻ろうか」

「あ、はい。ありがとうございます」

そう言っただけで部屋に戻ろうと扉に向かう二人。扉に手を掛けながら、ルークはシルに声を掛ける。

「大丈夫だよ、シルちゃん。ランスは君のことを大切に思っている」

そう言いながらルークが振り返り見たのは、シルが魔力を帯びた光に包まれている姿だった。

「ぎゃあああああああ!!!」

「あれは…テレポルトウェイブ！シイルちゃん！！」

シイルを包んでいた光にルークは見覚えがあった。依頼で魔法使い退治をした際、一度だけ見たことがある。光で包んだ対象をどこか別の場所にワープさせる魔法装置、テレポルトウェイブ。ルークは慌ててシイルに手を伸ばすが、その手が届ききる前にシイルは光に吞まれ、この場から消えてしまった。

「しまった…」

どこかに魔女を一人倒したことで気の緩みがあったのかもしれない。一人取り残されたルークは拳に爪を食い込ませながら自身の油断を悔やんだ。

- 洞窟内 第二研究室 -

「おつかしいなー、この指輪どんなことしても外れなかったのに、どうして外れたんだろう」

部屋の中では情事を終えたマリアが不思議そうに指輪を見ていた。ランスとのHが終わると、それまで絶対に外せなかったフィールの指輪が外れたのだ。

「スケベの力は偉大ということだ。それよりも、今後のことだが…」
「わかっているわ、町の人たちにこんな迷惑を掛けたんですもの。償いはちゃんとする。でも…その前にラギスだけは許せない！」

大きな変化は指輪が外れたことだけではない。マリアの様子が変化していたのだ。自分の行いを悔やみ、町の人たちへの償いをした

いと自ら申し出てきたのだ。反省や心境の変化で済ませるにはあまりにも唐突な異変。

「ラギシスを許せないとはどういうことだ？お前たちが反乱を起こして指輪を奪ったんじゃないのか？」

「違うわ…私たちは…話したら長くなるけど…」

「マリアが口を開き掛けたところで、バンツと扉が開く。部屋に入ってきたのはルークだ。が、様子がおかしい。それに一緒であったはずのシイルの姿がない。」

「ランス…スマン、落ち着いて聞いてくれ…」

「ん？何だ急に？それにシイルはどうした？」

「…シイルちゃんが攫われた。…俺の失態だ」

「な…なんだとおー！ルーク、貴様がいながら何をしていた！
！！」

「待って、攫われたってもしかしてテレポートウェーブじゃない？
だったら防ぐのは難しいんじゃない？」

「ああ、テレポートウェーブだ。だが、俺がもつと周りに気を張っていれば、シイルちゃんではなく俺が転送されるという手段もあった。一人で戦うことの出来る戦士ではなく、前衛がいないとまともに戦うのは厳しいシイルちゃんが一人になってしまったということが最悪なんだ」

「な…なんてことだ…シイル…」

「ランスがへたへたと座り込んでしまう。普段の気丈な態度からは見て取れない落ち込み様だ。先ほどまでとの態度の一変に驚くマリ
ア。」

「げ、元気出してよ。きつと見つかるはずだから…」

ランスを慰めながら、マリアはその落ち込みように、実は悪い人じゃないのかも、とランスの評価を改めていた。

「…あいつに有り金全部持たせてたのにー！シイルのばかやるー！俺様の許可もなくいなくなりやがってー！！」

「えっ！そんな理由なの！？」

「ふん、まあ俺様がすぐに見つけ出してお仕置きしてやる。シイルめ、待っている。がはは！」

そうあっけらかんとした様子でランスが言うのを見てマリアが呆れる。その後、とりあえず今後の方針をまとめるため一旦町まで戻ることとなった。帰り木で町にワープする直前、ルークはランスだけに聞こえるよう小さな声で話しかけた。

「本当にすまない、後でぶん殴ってくれて構わない。…必ず助け出す！」

「…ぶん。しつかり働けよ」

- カスタムの町 酒場 -

「いらつしゃーい、…あれ？あのゴッドオブヘアーの娘は一緒じゃないの？それにそっちのコートの人は新顔さん？」

酒場に入るとエレナが元気に声を掛けてくる。シイルがおらず、代わりにフード付きコートを深く被り、顔のよく分からない人物がいるのが気に掛かり尋ねてくる。

「がはは、あいつは邪魔になったから捨ててやったわ」

「ランスさん、ヒドすぎ…」

「宿泊用の奥の部屋、開いているかな？出来れば少しだけ使いたいのだが」

「開いてますよー。では、三名様ご案内です！」

この酒場は奥の部屋を宿泊施設としていた。本来宿屋が別にあつたのだが、現在建物が崩れていて使い物にならないため、元々は酔った客の介抱用であつた部屋や物置などを片付け、冒険者のために開放していたのだ。部屋まで通され、エレナが出て行ったのを見送ると、マリアがコードを脱ぐ。町をこんなにした犯人の一人であるマリアが見つければパニックになるため、このように姿を隠していたのだ。

「ふう…暑かつた」

「そういえばそちらだけにさせてしまつて、こちらの自己紹介がまだだつたな。俺はルーク」

「俺様は英雄ランス様だ。そして、今攫われている無能のバカが奴隷のシイルだ」

「もうちょい言い方つてものが…まあ、とりあえず始めましょうか」

そう言つて、マリアは自分たちがどうしてこのような事件を起こしたか、説明を始める。

「私たちはこの町の守護者となるため、ラギスから必死に魔法を教わつたわ。そして、半年前ラギスは私たちに卒業証書だと言つて一人一つずつ指輪を渡したの。それがこのフィールの指輪よ」

「盗んだんじゃないのか？」

「違うわ。あつちから渡してきたの。でもこれは、着けてはいけな
いものだったの。その晩、私の部屋に志津香がやってきたんだけど、

ラギシスの独り言を聞いてしまったらしいの」

「やはりそうか…全てラギシスの陰謀だったんだな？」

「そう、全てあいつが元凶よ」

「なんだ？ラギシスが怪しいと気がついていたのか？」

「確信は持てなかったが…奴の話に色々と引つかかる点があつてな。もう少し情報が集まったら一応お前らにも言うつもりだったんだが…」

奴の言う通りなのであれば国宝級の指輪。それを自らは身につけず弟子に渡すという不可解な行動。これらがルークには引つかかつており、素直にラギシスを信用してはいなかった。

「着けてはいけない…というのは、やはり呪いの類か？」

ルークは当初、指輪がラギシスの言っていたような効果はないのではと疑っていたが、最初にマリアと戦闘した際の魔力量や高速詠唱から、その考えを破棄。次に疑っていたのが装着者が何かしらのデメリットを被る、いわゆる呪いだ。

「その通りよ。この指輪は十人分の魔力を吸い取って成長する恐るべき指輪だったの。既に九人分の魔力を吸い取った指輪を手にしたラギシスは、最後の媒体となる四人の魔法使いを捜していたのよ」

「ほー、つまりラギシスは指輪を回収するためだけにお前たちを育てていたわけだな」

「ええ、そしてそれを私たちが偶然知ってしまった。許せなかった…信じていたのに…」

「なるほど…それが反逆へと繋がるのか」

「ええ、そうよ。それに、魔力の溜まりきったフィールの指輪を四つ全て着ければ、無限の魔力を手に入れると言うわ。でも、この指輪を外されたら最後、私たちは魔力を失ってしまう。だからラギシ

スに戦いを挑んだの。戦いの衝撃で町は地下に陥没してしまったけど……」

「なるほど…ラギシスや町長から聞いた話とかけ離れているな。それが真実か」

ルークの発言にマリアが驚きで目を見開く。目の前の男は、死んだはずの人間から話を聞いたと言ったのだ。それも、自らの手で殺した相手。

「ラギシスが生きているの！？確かに殺したはずなのに！」

「生きてはいない。奴の館に地縛霊として漂っている」

「そう…後で見に行かないとね…そして、今度こそ…ふふふ」

マリアの目に殺意がこもる。無理もない話ではあるが。

「それで、マリアたち四人が迷宮を築いたのも指輪の影響ってことで良いのか？」

「ええ、この指輪には人を悪の方へ惑わせる力があるわ。気がついたら迷宮を築いて、やってくる冒険者たちを返り討ちにしていたわ。こんな地下迷宮築いて…私たちは何を…志津香たちも救わないと！なるほどな…」

「ふん、指輪のせいで悪いことをしてるなら、指輪を外してやればいいんだろっ？で、この指輪を外す条件は処女を奪うで良いんだな？」

「ん、そうなのか？」

「ええ、多分。きつと魔力を込める対象になるのが処女なんだわ。その条件を失えば、指輪は外れる…っっていうことだと思う」

今まで決して外れなかった指輪が、ランスに犯された直後に簡単に外れたことからマリアはそう推理した。ルークも話を聞いてその

見解に賛成した。処女というのは神聖なものとして、儀式の条件などによく持ち入られるものであったからだ。

「なるほど、つまり事件解決のためには俺様が他の三人の処女も奪えばいいんだな！ぐふふ、これは面白いことになってきた。仕方がない、正義の為に俺様が苦労してやろう」

「…別にルークさんでも良いんだけどね」

「んー…状況が状況だし、相手がランスよりも俺の方が良いと言ったら抱きはするが…」

「ふざけたことを言うな！他の三人の処女も俺様のものだ！よし、そうと決まれば行動だ！まずはあの大嘘つきなラギシスの館に向かうぞー！」

そう言っつて腰掛けていた椅子から立ち上がり、外に出ようとするランス。が、後ろからマントを誰かに引っ張られる。振り返ればそれはマリアだった。決意のこもった瞳をしながら、マリアは口を開いた。

「私も…連れて行って！」

「…大丈夫なのか？」

「君は操られていただけだ。責任を感じる必要はないぞ」

「いいえ、操られていたとはいえ、町をこなしたのは私たちよ。足手まといにはならないわ、だからお願い！私もみんなを救いたいの！」

マリアが必死に懇願する。と、ランスがマリアの手をマントから無理矢理離して部屋から出て行こうとする。焦ったマリアが何か言おうとするが、それよりも先に口を開いたのはランスだった。

「行くぞ、ルーク、マリア。俺様の足を引っ張るなよ！」

「ああ、シイルちゃんも、操られている三人も救い出さず。よろしくな、マリア」

二人の話の流れについて行けず、混乱していたマリアだが、情報を頭の中で整理していき、その顔がだんだんと喜びに包まれていった。そして、満面の笑顔で二人に返事をする。

「うん、二人とも、これからよろしくね！」

第17話 明かされた真実（後書き）

「人物」

マリア・カスタード

LV 13 / 35

技能 新兵器匠LV2 魔法LV1

カスタム四魔女の一人。師であるラギシスを殺害するが、それはラギシスに裏切られたが故の行動であった。現在は他の三人を救うため、行動を共にする。水魔法を得意としていたが、指輪を外された際にその魔力のほとんどが奪われ、その力を失ってしまった。だが魔法以上に非凡な才能を持ち合わせているのは、兵器開発の面。彼女の発明の多くが、今後歴史にその名を残すことになる。

「装備品」

フィールの指輪

赤、青、黄、白がある四つの指輪。処女十人の魔力を吸い込んだ四つの指輪全てを身につけることにより、無限の魔力を手に入れることが出来る。長く身につけていると精神が蝕まれ、邪悪な心に支配されてしまうという呪いのアイテム。ラギシスがかつてゼスのある魔法使いから譲り受けたものらしい。

「その他」

テレポートウェイブ

対象者を決められた場所にワープさせる魔法装置。敵を分断させたり、自らの逃亡用などに使用することが出来る。

第18話 新たな事件とチューリップ

- カスタムの町 ラギシス邸跡 -

「こら、ラギシス！よくも俺様を騙したな！」

「黙ってないで出てきなさいよ！！」

ラギシス邸跡に入るやいなや、ランスとマリアがそう言って大声を上げた。しかしラギシスが出てくる気配はない。

「変だな？出てこんぞ」

「どういうことかしら…本当にここにラギシスがいたのよね？」

「ああ、ここに確かにいた。逃げたか？だが、俺たちがマリアと合流したことは誰も知らないはず…」

「成仏しちまったか？」

「そんな…そんなのってないわ…私たちをこんな目にあわせて、自分だけ成仏するなんて…」

ラギシスをもう一度殺すつもりだったマリアはへなへなと崩れ落ち、悔しそうに呟く。フォローを入れようとしたルークだが、マリアはすぐに立ち上がって、くよくよしても仕方がないから気を取り直して三人を助けよう、と自分で立ち直った。中々にポジティブな性格である。

「前向きだな。いいことだ」

「だって、ラギシスは憎いけど、それ以上に他の三人が心配なんだもん。ランスだって、シルちゃんのことを気になるでしょ？」

「馬鹿抜かせ。あいつはただの奴隷だ」

「とりあえず町長の家に向かうか。マリアの誤解を解いておかないと、ろくに町も歩けないからな」

・カスタムの町 町長の家・

「ラーンソーサーー！！ルソーサークーー！！」

「うおおお！なんだなんだ！暑苦しい！」

家に入るやいなや、町長のガイゼルが涙を流しながら二人に迫ってきた。普段は床に伏している彼が立ち上がって迫ってくるということは、よっぽどのがあったのだろうか。そういえばチサの姿が見えない。買い物にでも行っているのだろうか。いや、この取り乱しようから見るに、もしかしたら…と、ルークは考え、町長に尋ねる。

「チサちゃんは何処へ行った？まさか…いなくなったのか？」

「おお！そうなんだ！大変なんだ！どうやら娘のチサが、あの魔女たちに攫われてしまったみたいなんだ！」

「なんだと！！それでは、もしかしたら今頃あんなことやそんなこと…」

「うおおお！チーサーー！！」

「ちよ、ちよつと待って！私そんなことしてないわ！」

ランスに無駄に不安を煽られて更に騒ぎ立てるガイゼル。身に覚えのないことの犯人にさせられそうになり、慌ててマリアが話に割って入る。

「ん？誰だ…って、わー！ま、ま、マリア・カスタードじゃないか

「ランス、ルーク、敵だ敵だ！」

「ええい、落ち着け！」

「ぐふうううう！！！」

そう言つて腹に蹴りをかますランス。一応相手は病人なのだが、容赦がない。若干無理矢理にはあつたがガイゼルを落ち着かせ、ルークたちはここまでの経緯をガイゼルに説明した。

「ふうむ…あのラギシスが…にわかには信じられんが…あり得ない事ではない…か。つまり、娘たちは町の敵ではないと」

「いいえ、私以外はまだ町の敵です。指輪の呪縛から解放されるまでは…」

「安心しておけ。俺たちがすぐに呪縛は解くし、チサちゃんも連れて帰る」

「おお、頼もしい！」

「で、どうしてチサちゃんが魔女たちに誘拐されたと思つたんだ？何か証拠が？」

チサが誘拐されたのは心配だが、これが何か手がかりになるかもしれない。ルークが尋ねると、ガイゼルは言いにくそうにしながら口を開いた。

「そ、それはその…四時間も帰つてこなかったから…その、心配で…」

「…本当に誘拐なのか？彼氏かなんかと遊んでいるという可能性は？」

「なななな、なんてことを！チサに彼氏などいないわー！そんなもんいたら、とつくの昔に殺したに決まってるだろうが！」

「その通りだ！チサちゃんの処女は俺様のものだ！！」

「なんでランスまで突つかかってくるんだ！しかも町長、あんた今

とんでもないこと口走ったよな!？」

「はあ…厳格で信頼できる町長さんだったのに…」

今の町長の姿にショックを受けるマリア。彼女の中でガイゼル町長は過去の人となった。

「でも、四時間も帰って来ないのは確かにおかしいわね。この町の状況じゃ、寄り道するようないところもないだろうし」

「そうだな…道中見つけたら保護しておくよ。魔女の誰かが攫った可能性が高いだろうしな」

「おお…頼みます…」

「その分の報酬は別払いだぞ!がはは!」

「…鬼ね」

- カスタムの町 情報屋 -

一応目撃情報がないか、二手に分かれて聞き込みをすることになった。早く洞窟に潜りたいところだが、流石に放っておく訳にもいかない。ルークが情報屋、ランスが教会、マリアが酒場に聞き込みに行った。町長が早々にマリアは操られていただけという情報を町中に回してくれており、また、元々町の住人も小さな頃から知っている彼女たちが反乱を起こしたというのを信じたくなかったという思いがあったようで、既にマリアは町を自由に歩き回れるようになっていた。この行動の早さ、確かに親バカなこと以外は優秀な町長である。

「あら、ルークさんね。いらっしやい。何かご用かしら?」

「ああ、ちょっと聞きたいことがあってな。あれ、妹さんはどこへ

？」

情報屋に入ってきたルークに、コンピュータから手を放して話しかけてくる女性。彼女がこの情報屋を営む双子の姉、芳川真知子だ。ルークはこの町を初日に情報収集で一度店に寄っていたため、既にお互い顔見知りであった。が、今はもう一人店主である妹の今日子の姿が見えない。

「あの子ならどこかへフラッと。困った子ね」

「誰かに誘拐された、ということはないかな？」

「あら、出て行ったのはついさっきなのでそんなことはないと思いますわ。でも、どうしてそんなことをお聞きになるの？」

「まだ事を荒立てたくなくて町長も声明は出していないが、チサちゃんが行方不明だな」

「あら、それは大変。ごめんなさい、その事をお聞きに来たのであれば、私は何も知りませんわ」

「そうか、邪魔をした。今日子さんにあつたら家に帰るように行っておくよ。チサちゃんが本当に誘拐なのであれば、今外を不用心に散歩するのは危険だからね」

「すいません、お願いしますわ」

そういつて店から出て行くルークにペコリと頭を下げる真知子。

普段の余裕のある話し方から誤解されがちだが、これでも彼女は妹思いであった。

- カスタムの町 地獄の口 -

迷宮の前までやってきたルーク。情報を集めたらここで合流する

予定であった。やってきたときにはまだ二人はおらず、泣き濡れた老戦士が洞窟の前に立っていた。話を聞いたら彼の名前はANTというらしく、特に情報は持っていなかった。泣いてる理由も町から出られず困っているということだったので、特にどうすることも出来ず、放っておいたらそのままどこかへ行ってしまった。多分二度と会うことはないだろう。無駄な時間を過ごした。その後、少し待っていると言いつつとランスとマリアがやってくる。が、なんだかランスが疲れた様子だった。

「すみません、待たせちゃったみたいで。ルークさん、何か情報はありましたか」

「いや、こっちは特に何も。そっちは？」

「こちらも特には…聞く前からまだ内緒のはずのチサちゃんが誘拐されたことを知ってましたけどね」

「流石は情報飛び交う酒場と言ったところか。ランスの方はどうだった？」

「教会に淫乱シスターがいた…流石の俺様もあれはちょっと…」

「は？」

「ああ…ロゼさんの事ね。あの人は…気にしないに限るわよ。ちょっと変わった人だし…」

ランスがやる気になれなかった敗北感からか、かなり疲れた顔をしている。ランスとマリアの話を纏めると、元凶は教会にいるロゼという名のシスターらしい。よし、教会には近寄らないでおう、と心に誓うルークだった。ふと、マリアが先ほどまで持っていなかった筒状のものを両手に抱えているに気がつく。

「ん？ところでマリア、その手に持っているものは？」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれました。これこそが…」

「なんだ、このぶっさいくなものは。変わったこんぼうだな」

「…ランスにはこの無駄のない美しい形状が判らないみたいね。これはそんな原始的な武器じゃないわ。その名もチューリップ1号!」

ババン、とチューリップ1号という名らしい筒状の武器を高らかに掲げる。その側面にはチューリップの花の絵が描かれていた。決して口には出さないが、ルークにも無駄のない美しい形状というものとは理解できなかった。

「それが以前話していた戦いの歴史をも代えかねない武器か?」

「そう!まだまだ試作段階だけだね」

「ふむ、魔法が使えなくなつてへぼぴーで足手まといのお前を連れて行くのは正直迷つていたが、これで多少は戦えそうだな」

フィールの指輪を外したマリアはその際に魔法力のほとんどを吸い取られ、あの強力な水魔法を使えなくなつてしまつていた。が、これで多少の戦力にはなるとルークとランスは安心する。

「ところでこれはどうやって使うものなんだ?」

「ヒララ鉱石をエネルギーにして、爆発的な破壊力を相手にぶつけるの。そうね、雷撃の魔法なんかより遙かに威力を出せる武器だと思つていいわ」

「それは凄いな。雷の矢でなく、雷撃以上か」

「ふふふ、私の自信作よ。このチューリップとヒララ鉱石があれば、魔法が使えなくなつたつて役には立てるんだから」

「がはは、これであのバカがない分の後衛役は決まりだな」

「ええ、任せて。ヒララ鉱石さえあれば、モンスターなんかちよちよいのちよいなんだから!」

不意にルークは嫌な予感がした。何か先ほどからマリアの言い回しがおかしい。ヒララ鉱石が…あれば?そういえばヒララ鉱石は割

と手に入れにくい鉱物ではなかっただろうか？ランスと笑いあうマリアに、ルークは意を決して尋ねる。

「ヒララ鉱石…あるのか？」

ピタッ、とマリアの笑い声が収まる。ランスも、まさか…という顔でマリアを見る。俯いていたマリアが勢いよく顔を上げる。そしてマリアは、笑顔で元気よく答えた。

「ありません！」

「お前もう帰れ！！」「」

第18話 新たな事件とチューリップ（後書き）

「人物」

芳川真知子

カスタムの町の情報屋。双子の姉で、コンピュータを使って理論的に情報を導き出す。ランスのアプローチをのりくらりと躲す。

芳川今日子

カスタムの町の情報屋。双子の妹で、水晶玉を使って知りたいことを占う。一途な少女だが、若干いきすぎている。

ロゼ・カド

カスタムの町のシスター。神への信仰心は無く、金儲けの手段として使っている。暇さえあれば自分で呼び出した悪魔とのHに耽るなど、数少ないランスをどん引きさせた女性の一人。

牧場野ANT

冒険者。珍しい名前をしており、妹と娘がいる。シリーズでも上位に入るマイナーキャラであったが、2のリメイクとまさかのランスクエストへの再登場により知名度が上がった。ほんの少しだけだが。

「技」

雷の矢

指先から生み出した雷の塊を放つ初級魔法。炎の矢や氷の矢と並んで良く使われる魔法であり、特にゼスでは多くの若い魔法使いがこの魔法を好んで使う。その理由としては、「雷に愛された男」「雷帝」という異名を持つ老魔法使いが、魔法学園の講師をしている

ため、自然と若い頃に触れる機会が多くなるためと思われる。

雷撃

雷を水平方向に飛ばす中級魔法。本来は手から放つ魔法だが、鍛え上げると頭上から雷を落とせるようになる。

「装備品」

チューリップ1号

マリアが発明した新兵器。ヒララ鉱石をエネルギーとし、爆発的な威力を出すバズーカ。側面に描かれたマリア手書きのチューリップの絵が特徴的。

「アイテム」

ヒララ鉱石

レアストーン。特殊な条件下で強力なエネルギーを発生する。

第19話 その占い、今はまだ意味を持たず

・ピラミッド迷宮・

「これは…随分と様子が変わったな？」

結局頑なに帰らなかったマリアを連れて、三人は地下三階まで下りてきていた。するとそこは、二階までのいかにもな洞窟から、一目見て床や壁の石が明らかに人口のものと判る、整った迷宮になった。

「ここからはピラミッド迷宮になっているわ」

「こんなに突然迷宮の内部が変わるものなのか？」

「本来この迷宮は私が支配していた第二層までしかなかったの。ここから先は、他の場所から魔法で持ってきて追加したのよ。この第三層の支配者はミル。リンゲル王のピラミッドを改造したものらしいの」

「ミル・ヨークスとは仲間なんだろう？何か迷宮のことは知らないのか？」

「ごめんなさい、ずっと自分の研究室に引きこもってたから…」

「ちつ、役に立たない奴め」

「むかー、親切で教えたのにー！」

「ほらほら、喧嘩してないで進むぞ」

仲良く喧嘩する二人をなだめるルーク。迷宮の奥へ進んでいく三人。道中棺の並んだ部屋や四つの宝石が並んだ部屋があり、念入りに調査をしたが、特に何も発見することは出来なかった。更に奥へと進んでいくと大きな鏡が壁に埋め込まれた部屋に出る。

「わっ！大きい。こういうのって高いのよねー」

「がはは、鏡に映る俺様もかっこいいな！」

「ん？部屋の隅に石版が置かれているな」

鏡の前でポーズを取るランスを放って置いて石版を拾うルーク。

見れば何か文字が書いてある。薄汚れているが、ギリギリ読めるレベルだ。石版に書かれた文字を読んでいくルークだが、だんだんと呆れた顔になっていく。

「ルークさん。石版に何が書かれていたんですか？」

「あー…誤解しないで欲しいが、俺は書かれていることをそのまま読むだけだからな」

「？いいから早く読め」

「鏡の前で少女のパンティーを露出するべし。さすれば宝石の装置が起動するであろう」

「……なんなの、それ？」

マリアが冷たい視線をルークに向ける。ただ書いてあることを読んだだけのルークからしたら理不尽きわまりない。

「がはは、仕方がない。これも他の三人を救うためだ。とぉー！！」

「きゃああああああー！！」

いつの間にかマリアの背後に回り込んでいたランスが一気にマリアのスカートをまくり上げる。下着を白日の下にさらされ、マリアが悲鳴を上げる。

「ばっ、ばかあ！こんな事で本当に装置が起動するわけ…」

怒り心頭でランスに食ってかかるマリアだが、話を遮るように鏡から音声が響く。 - 第一のワープ装置、解除されました - と。

「最低だわこの鏡!!」

「がはは、中々見所のある鏡ではないか」

「第一の…って言ったよな。宝石って…四つあったよな。つまり…」

「やめてー、ルークさん、考えさせないで - 。私も気がついてはいたけど、気がつかない振りをしていたんだからー!!」

- ピラミッド迷路深部 小部屋 -

「くっそ…がああっ!!」

女戦士が近寄ってきたグリーンハニーを斬り伏せる。パリンっという音と共に、その体が砕け散る。が、ハニーに気を取られていた隙にラーカイムの接近を許してしまい、その鋭利なハサミが脇腹に突き刺さる。

「っ…!!何するんだい!!」

頭頂部の岩ごとラーカイムを粉碎する。部屋の中では大量のモンスターが四人の女戦士を囲んでいた。しかし、応戦しているのはたった一人。既に他の三人の息はなく、おびただしい量の血溜まりの中に倒れ伏していた。残った女戦士も满身創痕の状態だ。傷は浅くなく、愛用のロングソードは既に折れ、今は倒れた仲間が使っていた剣を手に戦っている。

「ルー、チヨルラ、リムリア…巻き込んだ形になっちまった

ね…すまない。ルー、あんたのアリスソード、自慢していただけの事はあるよ。もうちょっとだけ力を貸してくれ…」

今は亡き仲間たちにそう呟く。モンスターに囲まれているだけでなく、部屋の入り口にはグリーンスライムがへばりついており、通ることが出来ない。逃げ道はない、彼女はたった一人で十体以上いるモンスターの群れを倒さなければならぬのだ。普通ならば絶望に打ちひしがれ、生きることを諦めてしまってもおかしくない状況である。だが、こんな状況でも彼女の目は死んでいない。最後まで諦めずに勇敢に立ち向かった仲間のためにも…妹のためにも…

「まだ…俺は死ねないんだよおおお!!!」

咆哮し、近くにいたこんにちわを一刀両断にする。それと同時に部屋に爆音が響いた。音のした方向は部屋の入り口、見れば通路をふさいでいたグリーンスライムが吹き飛び、煙を上げていた。敵の増援か、女戦士に緊張感が増す。

「きゃー、やったー、見た見た？これがチューリップの威力よ！」

「凄い威力だな。ピラミッド内にヒララ鉱石の採掘場があつてよかつたな」

「むっ、部屋の中に傷だらけの美女を発見！」

そこに立っていたのはランス、ルーク、マリアの三人。ワープ装置で飛んだ先に偶然ヒララ鉱石の採掘場があり、こうしてマリアが戦力に加わった状態で探索を続け、この部屋まで辿り着いたのだ。状況の変化に頭の回転が追いつかない女戦士だが、どうやら敵ではないらしいことを感じ取り安堵する。しかし、あそこで喜んでいる女、どこかで見覚えが…

「行くぞ！ルーク、マリア！困っているときにはお互い助け合おう！それが冒険者の正しい姿だ！」

「すまないね、恩に着る！」

「もし襲われているのが男だったら？」

「一文の得にもならんから立ち去る」

「期待通りの発言、ありがとう。まあいい、さっさと仕留めるぞ！」

群れを成していたとはいえ、この部屋にいたモンスターは大した強さを持ち合わせてはいなかった。みるみる内に数をその減らしていく。いや、本来であればもう少し苦戦していたかもしれない。元々この部屋にいたモンスターはもっと多かったからだ。ミリは死んでいった仲間たちに感謝しながら、最後のこかとりすを仕留めた。すると、緊張の糸が切れたのか、床に倒れ込む。

「おい、大丈夫か！？せつかくの美女だ、このまま死んだら許さんぞ」

「死にやしないさ。あんたたちのおかげで助かった。礼を言っぜ。」

俺はミリ・ヨークスだ……」

「待つて……ミリ・ヨークス……」

名前を聞いて、先ほど喜んでいた女が近寄ってきた。やはり見覚えがある……と、ミリはすぐにその正体に気がつく。怒りで目を見開き、口元に付いていた血を拭くとマリアに食って掛かるように叫んだ。

「……！お前はマリア・カスタード！俺の妹をどこにやりやがった！」

「ヨークス……なるほど、ミルの姉か！」

「ああ、俺は妹を捕まえて始末をつけるために、ここまで来たんだ。あんだけの事をしでかしたんだ。姉として……俺が始末をつけなきゃならないんだ！」

「そういうことか。そうとなれば、誤解を解いておかなければならないな」

そう言い、自己紹介をすませた後、全ての元凶はラギシスにあることを説明するルーク。話を聞いている内に、少しずつ安堵の表情へ変わっていく。やはり妹が自分の意志で事件を起こしたわけではないということが判って、ホッとしたのである。が、ミリはすぐに真剣な表情に戻し、口を開いた。

「事情は判った。だとしても、このまま手を引く訳にはいかないな。目的が、操られている妹の救出に変わるだけさ」

「その怪我で探索を続ける気か？」

「妹は、放っておけないもんさ。だが、俺の仲間は見ても通り全滅だ。頼む、俺も一緒に連れて行ってくれ！」

「妹…か。そうだな、放っておいては…いけないな」

「がはは、俺様に任せておけ。だが、弱い奴はいらんぞ」

「ありがとよ、ルーク、ランス！話の判る奴らは好きだぜ！」

「がはは、そのまま惚れてしまっても構わんぞ！」

こうしてパーティーに新たにミリ・ヨークスが加わった。怪我を押して先を急ごうとするミリだが、ルークがそれを引き留める。

「待った。一旦町へ帰り木で戻ろう。ワープ装置を動かせるから、ここまでならすぐに戻って来られる」

「なんだい、ルーク！？俺の怪我の治療のためとか言うなら、そんなもんはいらないよ！」

「そうじゃないさ…」

ルークが床に視線を落とす。ミリもそれに併せて視線を落とす。そこには、掛け替えのない仲間たちの…遺体。

「葬つてやらんな。戦士の定めとは言え…大事な仲間なんだから」
「…すまない」

- 迷宮内 どこかの泉 -

そこに倒れていたのはシイル。泉から流れる水が頬を伝い、目を醒ます。朦朧とした意識がはつきりとしてきた。そうだ、自分はレポートウェイブでどこかへ飛ばされてしまったのだ。見覚えのない場所、近くにランスたちがいないか、声を出す。

「ランス様あー？ルークさんー？いませんかー？いたら返事してくださいあーい」

返事はない。が、ふと岩陰から気配がする。誰かが声に反応したようだ。

「だ、誰かいらっしやるんですか…？」

「……………」

「も、もしかしてランス様ですか？」

「うう…ぐっ…」

そこには一人の戦士が倒れていた。大きな怪我は無いようだが動けない様子。慌てて駆け寄り、ヒーリングを唱えるシイル。

「だ、大丈夫ですか！？しっかりしてください！いたいいたいのとんでけっ！」

「ん…ありがとう、もう大丈夫だ…君のおかげでこの命、拾うこと

が出来た」

「よかった、わたしはシイル・プラインと言います」

「僕の名前はバード。バード・リスフィ。君の魔法のお陰で助かったよ。改めて礼を言わせて貰う」

「え…えへへ」

こうもはっきりと感謝されることにシイルは慣れておらず、ちょっと照れる。ランスが素直に礼を言うなんて事、ほとんど無いからだ。バードという名の戦士が立ち上がり、辺りを見回す。

「君もあの変な魔法でここへ？」

「はい、早くランス様と合流しないと…」

「ならば、互いの目的は一緒だね。僕も君もここから脱出したい。どうだろう、ここからは僕と協力しないか？帰り木も奪われてしまったようだね」

「ええ、よろしくお願いします」

「ああ、よろしく…誰だっ!？」

バツつと後ろを振り返るバード。シイルもそちらの方向に目をやる。そこには赤い頭巾に身を包んだ少女が立っていた。緊張を解く二人。

「こんにちは。こんな迷宮内に来るなんてよっぽど物好きな人だね」

「こんにちは。可愛い子ですね」

「お嬢ちゃん？君は？」

「失礼しちゃう。アーシーはお嬢ちゃんなんかじゃないわ。こう見えても、てんちゃい占い師なんだから。おかし女が持っているお菓子をくれたら占ってあげてもいいよ」

「干し芋じゃ駄目かい？」

腰に掛けていた袋から干し芋を取り出すバード。

「駄目駄目。干し芋をお菓子のカテゴリーに入れないで」

「甘いんだけどなあ……」

残念そうに干し芋をむしゃむしゃ食べるバード。隣のシイルにも手渡し、シイルもそれを受け取って二人で干し芋を食べ始める。そんな二人を見ながら、アーシーはおかしな事に気がつく。

「あれ……そのお兄ちゃん……」

「ん？僕がどうかしたかい？」

「……なんでもない。教えて欲しかったらお菓子持ってきてね」

「そう言われると気になるな。でもごめんね、お菓子は持っていないんだ。君もこんな所にいると危ないから一緒にいて来るかい？」

「大丈夫……モンスターさんには占いのお陰で出会わないから」

「そう、じゃあ私たちは行くね。アーシーちゃんも気をつけてね」

そう言っただけで泉から離れ、ダンジョンを進んでいくバードとシイル。その二人の背中を見送りながら、アーシーはぼつりと呟いた。

「あのお兄ちゃん……凶の運命の持ち主だったな。かわいそう。それに、寿命がとつくの昔に無くなっちゃってるのに……なんでまだ生きてるんだろう……悪運？あんな人初めて見た」

アーシーのつぶやきは、誰の耳にも届かないまま虚空へと消えていった。

第19話 その占い、今はまだ意味を持たず（後書き）

「人物」

ミリ・ヨークス

LV 15 / 28

技能 剣戦闘LV1

ミル・ヨークスの姉。腕の確かな女剣士で、Hの腕はそれ以上。ランスがヤルのを嫌がる数少ない女性の一人。妹に事件の責任を取らせるため迷宮に潜っていた。誰にも打ち明けていないが、重い病を患っている。

バード・リスファイ

LV 15 / 42

技能 剣戦闘LV1

冒険者。顔、性格、腕の三重奏揃った戦士だが、幸が薄い。惚れっぽい性格をしており、気がつけば毎回違う女性を連れ歩いているが、本人に悪気はない。

アーシー・ジュリエッタ

LV 1 / 3

技能 占いLV2

魔人バークス・ハムの使徒。姉妹が二人いる。その占いの的中率は100%と言われており、お菓子をあげると占って貰える。

ルー（オリモブ）

ミリの仲間の女戦士。迷宮探索中に戦死。ミリとは三人の中でも一番性格が合い、飲み友達でもあった。ミリが持っているアリスロードは彼女の愛剣である。名前はアリスソフト作品の「DARK」より。

チヨルラ（オリモブ）

ミリの仲間の女戦士。迷宮探索中に戦死。ミリ、ルーと共によく一晩中飲み明かしていた。名前はアリスソフト作品の「DALK」より。

リムリア（オリモブ）

ミリの仲間の女戦士。迷宮探索中に戦死。普段から飲み過ぎな三人に頭を抱えていた苦勞人。名前はアリスソフト作品の「DALK」より。

「モンスター」

こかとりす

鳥系モンスター。肉の味が絶品で、冒険者によく狙われている。へんでろぱの材料でもある。

こんにちわ

顔が三つある球体のモンスター。怨念が深いと、倒された際こんばんわというモンスターとして復活することがある。

ラーカйм

ヤドカリに似たモンスター。岩を背負い、鋭いハサミを持っている。

グリーンスライム

緑のねばねばしたモンスター。物理攻撃を無効化する。

おかし女

一つ星女の子モンスター。お菓子を作るのが大好きで、その味は

絶品。戦闘能力は低い。

「技能」

占い

物事を占う才能。LV2以上にもなると、未来予知とも呼べるものになる。

「装備品」

ロングソード

ごく一般的な剣。値段の割にはそこそこ攻撃力もあるため、とりあえずこれを装備している冒険者も多い。

アリスソード

柄に女神アリスをモチーフにした紋章が飾られている剣。攻撃力は高いが、見た目以上に軽く、力のない魔法使いや神官でも装備可能。

第20話 未だ見ぬ宿敵

・ピラミッド迷宮 鏡の間・

「今度は鏡の前で少女が胸を見せる、だとさ」

「いーーーーーやーーーーー!!」

「一応言っておくが俺もやらないぞ」

「がはははは、全く持ってけしからん!が、これも三人を救うためだ。頑張るのだマリア、カスタムの未来はお前の両乳にかけられたぞ」

「ぜつつつたい、いやっ!!」

一度町に戻り、三人を丁寧に埋葬した一行は、再び迷宮に潜っていた。一つ目のワープ装置を利用しようとしたが、あの先は行き止まりであったとのミリの証言によりそれを中止し、なんとか二つ目のワープ装置を作動させられないか調べるため、鏡の間までやってきていた。その際、偶然にもミリが石版を宝箱から発見していたことを聞き、ルークが受け取り書いてあることを読んだのが今。嫌な予感のしていたマリアは、内容を聞くやいなや悲鳴を上げた。

「そつだ、前は私がやったんだし、今回はミリさんが…」

「嫌だぜ、俺は。そんな馬鹿馬鹿しいこと」

「んがつー!」

「ええい、まどろっこしい!早く見せんか!!」

渋るマリアをランスが後ろから羽交い締めにし、服をずり下げ胸を露出させる。ルークに出来ることはそっぽを向いて見ないようにしてあげることだけだった。南無南無。

「きゃああ！ちょー！いやー！ー！」

「うふふ、可愛い胸だね」

「さあ、鏡様にお前の胸を見て貰うんだ！上下に揺すって乳揺れのサービスだ！」

「こんなのひどすぎるー！ー！ー！」

マリアの絶叫と第二のワープ装置解除の放送が迷宮内に空しくこだました。

「あと二回…か…」

「ルークさん、その通りですけど不吉な発言しないでください！」

・ピラミッド迷宮 棺の間・

二つ目のワープ装置を使用し、少し進むと棺が大量に置かれた部屋に辿り着いた。その部屋の奥、他の棺に比べ多少豪華な装飾を施してある棺に、ミイラ男が腰掛けていた。モンスターかと身構える四人に落ち着いた様子でミイラ男が話しかけてくる。

「誰だい。ああ、そう身構えんでいい。戦うつもりなんてないんね」

「なんだ貴様は？」

「なーに、ただのミイラ男さね」

「ただの…ねえ。ただ者には見えないが？」

「え？どういうこと、ルークさん？」

声を聞く限りは中年男。包帯に隠れておりよく判らないが、体格はでっぴりとしており、とても強そうには見えない。ルークの発言

にからからと笑うミイラ男。

「おんやまあ。死んでから200年、こんだけ鈍っちまった体なのによく気がついたね」

「座り方がな…隙だらけのようできて、その実、隙がない。生前はかなりの実力者とお見受けしたか？」

「そんな大したもんじゃねーよ。おいちゃんは、リングエル王ザーハードス6世に仕える親衛隊副隊長、バ・デロス・ガイアロードじゃ」「なんつー大層な名前だ。まあ今はただのミイラだがな。がはは、情けない」

リングエル国。200年前に滅んだ国だ。ゼスと隣接した砂漠の中に栄えた国で、近隣諸国との関係も良好であったと文献には残されている。ピラミッドも、国の滅亡後に近隣諸国が建て、集められた関係者の死体を埋葬したものだという。そういえば、マリアがこの迷宮はリングエル王のピラミッドを改造したと言っていたか。

「砂漠の真ん中であつたんじゃが…いつの間にか地下じゃ。不思議な…」

「あ、ごめんなさい。それは私たちが魔法で移動させたせいなの…」

「ん？ほー、お嬢ちゃん若いのに凄い魔法を使えるんだの？」

「あんな広大な砂漠の真ん中とは、随分とへんぴな国だったんだねえ？」

「広大？うんにゃ、小一時間も歩けば渡りきれぬちつぽけな砂漠さね」

ミイラ男の発言の意味が分かっていない様子のランスとミリ。逆にその意味を正確に理解しているのはルークとマリアだ。

「死んでる期間が長くてボケたのか？」

「違うわよ、ランス。あの砂漠はね、昔はなかったの」
「そうなのかい？」

「ああ、今から200年ほど前、広大な大地を目当てにゼスに攻め込んだヘルマン軍とゼスとの戦争があつてな。ゼスは禁断とも言われた秘術でその大地を砂漠化することにより、ヘルマンの目的をなくすと同時に、以後ヘルマン軍がゼスに侵攻するのを難しくした。なにせ、ゼス中心部に攻め込むためにはその砂漠を通らなきゃならないからな。その秘術を使う際に、媒体としたのが数年前に滅んでいたリングエル国の砂漠だつたと伝わっている」

世界の中心部に位置するキナニ砂漠。専門の案内人なしに越えるのは自殺行為とも言われるほどの広大な砂漠の誕生にはこういった背景があつた。

「あんれま、今砂漠はそんなことになつとんたんか」

「2000年の間に、世界は大きく変わつていますよ」

「2000年か：言われてみりゃ長いもんじゃ。あの時代が懐かしいわい。アホな隊長とノー天気な部下に挟まれた日々は大変じゃつたが、楽しかつたなあ：モエモエ国の行方不明だつた騎士隊長はその後見つかつたんだろうか：娘のリスガドルはどうしとるかのう…」

昔を懐かしみ、遠い目をするミイラ男。平和な国を突如襲つた悲劇。ソレは無抵抗な民を虐殺した。ソレは抵抗する親衛隊を全滅させた。ソレはわずか二日で国を滅ぼした。

「2000年も前じゃ騎士隊長も娘もとつくにじじいばあになつて死んでるだろ。それよりも、ミルという娘を捜してるんだが、何か情報を持っていないか？」

「それもそうか、はっはっは。ミル？その娘かどうかは判らんが、四つ目のワープ装置の先で娘の話し声がよくするぞい。その部屋は

この部屋と壁挟んだ隣でな。因みにワープロコードは鏡の前でレス行為じゃ。以前迷宮内を歩いているとき石版に書いてあった」

「ぎゃああああ!!」

「おっ、それは俺の出番でもあるな。頑張ろうぜ、マリア」

「なんで張り切ってるんですか!」

「そりゃま、俺は男も女もいけるクチだからな…ふふ、楽しみだねえ」

「がはは、楽しみ…いや、町の平和のためだ。仕方ない。じゅるり」

「もういや…なんで私ばかりがこんな目に…」

「マリア、前向きに考える。三回で済んで良かったじゃないか!」

「全然良くありません!!」

ルークの精一杯のフォローが失敗に終わる。ランスとミリは既に行方を想像しているのか、ランスの表情はイヤらしく、ミリの表情は妖艶なものになっていた。

「情報ありがとうな、副隊長さん。安らかに眠ってくれ」

「おお、ちよつと待った。これ、持ってけ」

部屋を後にしようとするルークたちに対し、ミイラ男は何かを放り投げる。ルークが受け取り、見ればそれは剣。棺同様、装飾が施されているが決して武器を振る邪魔にはならず、斬れ味も良さそう

だ。
「それはおいちゃんが生前使っていた幻獣の剣だ。一緒に棺に納められてた。このまま腐らすのも勿体ないからな、あんたらが使ってくれ」

「いいのか?」

「がはは、ルーク、俺様に寄越せ!」

「お前この間新しい剣買ったばかりだろうが。しかも人の金で!」

「はっはっは、誰が使ってくれても構わんよ。おいちゃん、あんたらが気に入ったからな。やる」

「豪快なおっさんだね。ま、貰えるもんは貰っておくもんさ。俺はルーの剣があるからいらないけどな。さあ、行こうか」

「うう…鏡の間…嫌だな…」

豪快に笑うミイラ男に感謝するルークたち。ランスがまず部屋を後にし、ミリがマリアを引きずりながらそれについて行く。ルークも部屋を出ようとしますが、ミイラ男がポツリと呟いた一言に足を止める。

「あんた…ケイブリスって…知ってるかい…」

ケイブリスダーク。その事件は、今より200年前にゼスに侵攻した魔人の名前を取ってそう呼ばれている。多くの人間が虐殺された、地獄の一年。ゼスと隣接していたリングエル国も、この魔人に滅ぼされたのだ。

「…ああ、知っている。見たことはないが…かつて何度も聞いた名前だ…」

「そうかい…あれに出会っちゃいけない…ありや化け物だ…ちよつとは腕に覚えがあったが…一分も持たなかつたよ…ははっ…」

「そうか…だが会うなというのは無理な話だな…」

「ん？どういうことだんね？」

ルークは一瞬だけ振り返り、静かに笑う。それは己が身に過ぎたる事を言うことへの自嘲か、あるいはもつと別の何かか。

「いずれ…必ず戦わねばならない相手だ。あんたのその無念、俺がこの剣と共に持って行く」

・ピラミッド迷宮 鏡の間・

「いやー、もういやー！おうち帰るー！！」

「ふふふ、虐めがいがあるねえ、マリアは……」

「おお、いいぞいいぞ。ほれ、もっと股を開け！」

「はいはい、踊り子さんには手を触れないでください……」

こうして最後のワープ装置は解除された。頑張れマリア。

・ピラミッド迷宮深部 通路・

「もう……お嫁に行けない……」

一行は最後のワープ装置を起動させて迷宮の奥へと進んでいく。聞いていた部屋までは少し距離があるようだ。後ろでマリアがさめざめと泣いている。ミリが慰めているが、泣かせた張本人にフオロ―されても効果は薄いだらう。と、少し開けた部屋に出る。なんだか少し寒気がする。

「ねえ、ランス……なんだかこの部屋寒気がするわ……早く抜けましょ
う」

「うむ、こんな部屋に長居は無用だな。ん？なんだこの札は。てい
っ！」

壁に貼ってあったお札を考え無しに剥がすランス。すると、煙と

共に角の生えた緑色の神の女性が現れた。その強力な邪気に、ルークの緊迫感も増す。すると女性が深々と頭を下げながらこう言った。

「はじめまして、悪魔の札により召喚された者です。事情により名前は言えませんが、以後お見知りおきを」

「悪魔…だと…」

「ちょっと待って、私たちは別にあなたを呼び出してなんかいないわよ！」

「その戦士の方が札を剥がしてくださいましたでしょう。あれが私を呼び出す方法です」

「で、お前は何しに出てきたんだ？」

悪魔の女性はコホン、と咳払いを一つし、自分のやってきた目的を話し始める。

「私は呼び出された方の願い事を三つだけ叶えます。もちろん、私の力の範囲内なので、不老不死や世界平和などは無理ですが。さあ、願いを仰ってください。ですが、見返りとして…あなたの魂を頂きます。安心してください、魂は死後に引き取りに来ますので、今後の生活が変わるわけではありません」

キヤッチセールスの様な口調で話を続ける悪魔。彼女は内心こんなことを思っていた。

「（ようやく悪魔の契約係を任せられるくらいに出世したんだもんね…初仕事頑張らなきゃ…）」

「むっ、それはかなえられる範囲ならどんな願い事でもいいんだな？」

「ちょっとランス、危険よ！」

「確かに俺も危ないと思うぜ。話が美味すぎる」

「契約するなら無理には止めないが…賛同は出来んな…」

彼女はこの日、目の前の男と出会ったことにより転落人生を歩むこととなる。だがそんなことを知る由もない彼女。

「がはは、大丈夫だ。悪魔の娘、その契約乗ったぞ！」

「（やった、初仕事成功！私って幸先いい！！）」

彼女は今、とても幸せそうだった。

第20話 未だ見ぬ宿敵（後書き）

「人物」

バ・デロス・ガイアロード

LV 25 / 33 （生前）

技能 剣戦闘LV1

リングエル国親衛隊副隊長。平和な国、尊敬できる王、信頼できる仲間、美人の妻と愛娘、その全てを魔人ケイブリスに奪われた。現在はピラミッドの中でミイラとして暮らしている。この生活もそれなりに気に入ってはいるようだ。

「装備品」

幻獣の剣

生前、ガイアロードが使っていた業物の剣。特殊な結界に覆われていてダメージを与えられない幻獣をも斬り伏せる。盗難防止のため本人以外の男性が触ると電流が走る仕掛けとなっているが、その仕掛けを解除してルークたちに手渡した。

「都市」

リングエル国

自由都市。近隣諸国と良好な関係を築いており、特にゼスやモエモエ国との親交が深かった。ピラミッド内の装置はその名残。約200年前、魔人ケイブリスによって二日で滅ぼされる。

「その他」

GI0802 魔人の後押しを受けゼス建国 モエモエ国騎士隊長

行方不明に

GI0808 モエモエ国、ゼスに併合され滅びる

GI0813 ケイブリスターク発生 リンゲル国滅びる

GI0815 ゼスヘルマン戦争勃発 キナニ砂漠が誕生

第21話 転落人生

・ピラミッド迷宮 お札の間・

悪魔との契約を結ぶことにしたランス。その返事を聞いた悪魔の娘は、嬉しそうに羽尾をパタパタと動かす。マリアは心配そうにランスを見ているが、ルークとミリは何となくこの後の展開の予想がついている。

「おい、お前に叶えられる範囲ならなんでもいいんだな？」

「はい。ではさっそく、願いの方をお願いします」

ランスに問いかけられ、嬉しそうに綻んでいた表情を引き締める悪魔。ランスもキリツと真面目な顔になる。ゴクリツ、息を呑むマリア。

「うむ…俺様の願いはズバリ…」

「ズバリ…？」

「やらせる！」

「……………へ？」

想定もしていなかったであろう回答に思考が追いつかないのか、ポカーンとアホ面になる悪魔娘。隣では盛大にマリアがずっこけている。

「この男はなんだって、こつ…」

「そつか？俺は言うと思ってたぜ？」

「まあ、これでこそランスというか、何というか…」

予想通りの展開にちよつと誇らしげなミリ。

「どうした？まさかこの願いは駄目だとか言うつもりはあるまい？」
「へあ！？モ、モチロンそんなことありませんよ。ただ…そんな願い今まで話にも聞いたこと無かったので…」

「がはは、それではさっそくゴーだ！」

「え、ここですか？せめて他の方を別の場所にとか…」

ちらりとルークたちを見る悪魔娘。気のせいか視線が助けを求めている気がする。

「なんだ？悪魔のくせに恥ずかしいのか？情けないな！」

「カツチーン！そ、そんなことはありません。さあ、どこからでも来てください！！」

「ああ…まんまと挑発に乗っちゃったぞ、あの悪魔…」

「男慣れしてないんだらうねえ」

「そういう問題なの？」

「ぐふふ、では…とー！ー！」

「きゃあ！」

悪魔に飛びかかり、情事を始めるランス。ミリがそれをやんややんやと観戦し、ルークとマリアは部屋の隅で壁とにらめっこし、事が終わるのを待つ。もし万が一悪魔が反抗した場合の時に備え、部屋からは出て行かない二人。その背中では哀愁が漂っていた。

「がはは、悪魔はエロエロだぞ！マリアも見ろ！」

「ルーク、あんたもこっちに來たらどうだ？悪魔と人間の行為なんて、中々見られるもんじゃないぜ」

「…ギャラリー増やそうとしないぞ」

ランスとミリが壁を向いている二人を誘う。ルークを誘ったミリをランスが止めなかったのは、ルークがランスからそれなりの信頼を得ているのか、はたまた気持ちよすぎて深く考えなかっただけなのか。

「悪魔とのHに別に興味ないんでパス。魔人となら見学もちよっと考えた」

「私もパスします。女の子がランスにHされてるとこなんて、見たくないもん」

「がはは、マリアはやきもち焼きだな」

「…馬あ鹿」

「なんか今さらりと凄い発言が飛び出た気がするんだが…俺の聞き間違いか？」

「…胸揉みながら普通に会話とかしないで」

先ほどから悪魔娘がぼそりと抗議を続けるが、誰も聞いていなかった。

二十分ほど行為が続き、しっかりと本番まで終わらせたランス。悪魔娘はぐったりとしながら、人間のくせに…と小さく呟いている。トラウマにならなければいいが。

「ほら、いい加減起きろ。悪魔のくせによわっちいな」

「くうう…（人間のくせに、人間のくせに、人間のくせに…！）」

「さて、それじゃあ次の願い事だが…」

悪魔娘を無理矢理起こして二個目の願い事を頼もうとするランス。一体何を頼む気だろうか。金か？女か？順当にシイル救出の手伝い

か？思考を巡らせるルーク。

「ズバリ、やらせる！！」

「……………」

「……………お、鬼だわ！」

「……………これはさすがに読めなかったな」

「……………大した男だ」

「おねが、お願いです！お願いですから別の願い事に…いやあああああ……！！！」

カーン、とどこかでゴングが鳴る音が聞こえた気がする。第二ラウンド突入。それはつまり、ルークとマリアの壁とのにらめっこ第二ラウンド突入も意味していた。

「それでは…次が最後の願いです…よく…よく考えた上でお願いします」

第二ラウンドもたつぷりと時間を掛けられ楽しまれた悪魔娘。まさかの三ラウンドを警戒してか、必要以上に念を押してくる。それに対し、既に三つ目の願いを決めていたのか、ランスは即答する。

「俺様の魂を取るといふ話をなかったことにしろ」

「……………えっ？」

「何だ？お前に叶えられる範囲のことだろう、この願いは」

「…上手いな」

ルークが感心する。こういう悪知恵に対しての頭の回転は本当に凄い。

「い、いえ…その…あの…」

「まったく、悪魔というのは自分が交わした契約一つ守れないのか。ああ、情けない」

「……わかり…ました…受理させて…いただきます…」

ガクリと頭を下げる悪魔娘。その頬を涙が伝う。なぜかマリアの胸の中に親近感が湧いてきたらしく、私今なら悪魔と仲良くなれるかも…とか呟いている。

「がっはっは、悪魔とタダでHしてやったぞ！とーくしたー！」

「う…うーわん！この悪魔ー！ー！二度と私の前に現れるなー！ー！ー！ー！」

泣きながらどこかへと去っていく。悪魔に悪魔と呼ばれる人間が誕生した瞬間であった。

・ピラミッド迷宮 幻獣の間・

その部屋は、ただ広いだけの何も置いていない部屋だった。ここは四魔女の一人、ミル・ヨークスが改造して造った幻獣たちと遊ぶ部屋。自分が生み出したたくさんの幻獣たちと、あるときは魔法の修行を、またあるときは鬼ごっこやボール遊びを楽しんだ。そういった目的ゆえに余計な物を置いておらず、ミルの部屋はこの部屋の奥に別に造ってあった。先ほどまで幻獣たちと遊んでいたミルは自分の部屋に引き返そうとするが、入り口から誰かが入ってきたのが見える。

「だあれ？なにかご用？」

「ミルッ!」

「おお、あれがミルだな。ぐふふ、彼女も美人ではないか」

「あっ、ランス、言っておかなきやいけないことがあるんだけど、ミルはね…」

部屋に入ってきたのは四人。男一人は知らない人だが、女性の方は同じく四魔女の一人

マリアと、実の姉であるミリであった。予想外の客人に目を丸くするミル。スレンダー美人であるミルに対し感想を述べたランスにマリアが何か言いかけるが、ミルの言葉に遮られる。

「あれ、お姉ちゃん?もう、なんで来たのよ。私のことは放っておいてよ!」

「ようやく見つけたぞミル!町の人たちにこんなに迷惑かけやがって!指輪を外して姉ちゃんと来るんだ!」

「ふんだ!」

ぷいつ、と頬を膨らませそっぽを向くミル。妹の反抗にミリが額に青筋を立て、声を荒げる。

「こら!いい加減にしないとお尻ペンペンじゃすまさないよ!」

「ひっ…」

「子供かよ…」

ミリの発言もどうかと思っただが、それにびびるミルに対し呆れるルーク。あれではまるで子供だ。

「な、なによ、なによ。全然怖くなんかないんだからね!もう、さっさと帰って!」

ミルがそう言って手を振ると、虚空からザワザワと何かが生まれる。体は青白く、鋭い爪にギョロリとした目。あれが、幻獣。ミルを一瞬のうちに数体もの幻獣を生みだしたのだ。

「やっちゃって、幻獣さん!!」

「まずいわ!!」

ミルの合図と共に、幻獣たちがルークたちめがけて宙を走る。幻獣の呪文とは、無の世界から怪物を召喚する力。その怪物たちはある特殊な性質を持っていた。

「がっはっは、動きが鈍いな!俺様の華麗な剣技で真っ二つだ!!」

そう言って向かってきた幻獣に剣を振るランス。しかし、その剣は幻獣の体をすり抜けてしまう。

「あ、あれ?どういうことだ!？」

「駄目、私のチューリップも効かない!」

「あっはっは、私の幻獣さんにはそんな攻撃効かないわ!!倒したかったら大昔に所在不明になった幻獣の剣でも持つてくるのね!!」
「くそっ、どこまで世間様に迷惑かければ気が済むんだ、ミル!!」

これが幻獣の特性。その体を覆った特殊な結界のせいで攻撃がその体をすり抜けてしまい、ダメージを与えられない。一気に幻獣たちに囲まれてしまうランスたち。

「今ならごめんなさいすれば無傷で帰してあげるわよ。さあ……えっ?」

勝ち誇るミルだが直後信じられない光景を見る。一閃。目の前の

幻獣が先ほどまで静かにしていた男に斬られ、消滅していた。

「わざわざ説明ありがとう。幻獣の剣…っていうのはこいつのことかな？」

「ど、どうしてそれを！卑怯よ、反則だわ！その剣は幻獣使いにとつて天敵なのよ！」

男が持っていたのは先ほどミルが口走った幻獣の剣。あの剣は幻獣の境界を無効化してしまう特殊な剣で、幻獣使いのミルにとつては発言通り天敵とも呼べる代物だった。

「おお、ミイラ男に貰った剣か。仕方がない、今この場で戦えるのはお前だけだ。さあ、働け！」

ランスがルークに指示を出す、今の一撃で何かを確信したルークは、手に持っていた幻獣の剣をランスに向かって投げる。反射的に受け取ってしまうランス。

「ランス、使え。貰いもんなんだから後でちゃんと返せよ」

「むっ、貴様自分が楽するために俺様に剣を渡したな。めんどくさいからお前が…っておい！」

ランスの話が終わる前に、元々の装備である妃円の剣を抜いて幻獣に突っ込んでいくルーク。幻獣が鋭い爪をルークに振り下ろす。

「だめ、ルークさん危ないわ！！」

「何やってんだ！さっさと下がれ！！」

マリアとミリも声を上げる。普通の剣で幻獣に向かうなど自殺行為だ。幻獣の腕とルークの剣が交差する。剣はその体をすり抜け、

爪がルークを引き裂く、とその場にいた誰もが思っていた。が、現実には起こったのは全くの逆。幻獣の腕をルークの剣が斬り裂き、そのまま体ごと真つ二つにしていた。

「嘘、どうして！？なんで普通の剣で幻獣さんに攻撃できるの！？」「残念だったな、ミル・ヨークス。どうやら俺は幻獣使いにとって……」

ミルが先ほど以上に大声を上げる。マリアとミリも目の前の光景に唖然とする。普通であれば幻獣の結界に攻撃は遮られるはずなのだ。普通であれば、だ。しかし、今目の前に立つ男の持つ世界に唯一の技能は普通ではない。対結界。それは、ミルにとって幻獣の剣以上の……

「天敵みたいだ！！」

- 悪魔界 某所 -

「願い事を叶えたのに契約を破棄されたですって、このグズ！フェリス、あなたは降格処分ね……」

「そ、そんなあああああ！！フィオリ様あああ！！！！」

転落人生、スタート。

第21話 転落人生（後書き）

「人物」

フェリス

LV - / -

技能 悪魔LV1

元カラーの悪魔。若くして第六階級まで上り詰めたエリートであったが、ランスのせいで降格させられた。悪魔は通常のLV概念から外れており、階級や功績により強さがある程度変動する。第六階級ともなれば、並の魔人とも同等に渡り合える実力を持つ。降格したが。

フィオリ・ミルフィオリ（ゲスト）

LV - / -

技能 悪魔LV2

フェリスの上司。DS。第三階級悪魔で、広大な領地を持つ君主。その実力は並の魔人では到底太刀打ちできない。最近空中に浮かぶ都市が気になっているとかいらないとか。アリスソフト作品の「闘神都市3」よりゲスト出演。

「技能」

悪魔

悪魔としての才能。人間やカラーから転成した者は、転成する際に身につく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5750x/>

ランスIF 二人の英雄

2011年10月28日13時23分発行